

---

# レッドムーン

川墨直矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

レッドムーン

### 【Nコード】

N4450A

### 【作者名】

川墨直矢

### 【あらすじ】

近未来の日本。そこは世界一の犯罪大国だった。全ての権力を掌握しようとする巨大地下組織。組織と対峙する新警察機構。その狭間で翻弄される、男と女の、欲望と愛と正義が錯綜するバイオレンスアクションノベル。

## プロローグ&第一話 始まりの赤いバラ

レッド・ムーン

### プロローグ

厚いコンクリートの壁に、冷たく湿ったベッド。

鉄格子付きの小さな窓から覗く赤い月。

オレンジ色の一筋の光。

そこに立ち込める白紫色でくつきりと映し出される煙草の煙。

看守の呑気な口笛。

口から自然と突いて出る煙に混じった溜め息。

脳裏に浮かぶのは、さつきまで見ていた夢。

いやな夢。

理解できない夢。

そして、謎めいた夢。

始まりの赤いバラ

西暦二〇三一年 十月二十四日

一台の黒のベンツが高速道路を、京都に向かって急いでいた。ゆうに一二〇キロは出ている。ボンネットのところに旗が立っていて、ひっきりなしに、ばたばたと風になびいている。その旗印は、菱形に誠の一字、関東最大の裏組織、関東武田組のものである。そして、後ろの座席に乗車しているのは、つい最近就任式を済ませたばかりの三代目総長武田成明その人であった。

車内で武田は苛立たしそうに親指の爪を噛んでいた。その爪と歯が擦れる音が車内にガリガリと響いている。武田は焦っていた。計画は一向に進まず、長老たちからはケツを突付かれるばかり。これが成功しなければ、俺はあの爺どもに殺される。俺に任せてばかりいないで自分たちでやったらどうだ？くそ、死人の集まりめ！！そ

う奴らは死人も同じだ。横槍を出すだけの死人だ。それに、相当たちが悪い。そう思うと何もしないで横から口をはさむだけの長老たちに腹が立って仕方なかった。

だが、頭が上がらない理由が一つだけある。それは金だ。奴らの出資で成り立っている武田組にとって、死人同然だろうともなくてはならない存在なのだ。そう考えると自分の不甲斐なさで、ますます腹が立ってくる。その様子を、組員が運転しながらルームミラーでチラチラ窺っていた。武田がその視線に気づいて鋭く睨むと組員はサッと視線をそらす。

「総長、音楽でもかけましょうか？」

その組員が精一杯気をきかして言った。だが、武田に反応がない。組員の額に少し脂汗が滲んでいた。

「おい政司、おれたちや、遊びに行くわけじゃねえんだぞ？」

「失礼しました。ただ、総長があまりにもイライラなさっているものですから」

政司と呼ばれた男は、武田が三代目に就任する前からの側近で、武田の頼れるボディガードの一人でもあった。武田が行動するときはいつも彼が側にいた。その彼は今、総長のいつものイライラにどうすればいいのかわからなくて、ひっきりなしにハンカチで額の汗をぬぐっている。

「政司、俺たちの目標は、統一だ。全国制覇こそ、先代と俺の、いや、この組の最大の目標なんだ」

武田は、目を瞑りゆつくりと語りだした。武田にはわかっていた。先代も、またその前の代の総長も、みんな同じ難題を長老たちに突きつけられてきた。自分も例外ではない。奴らは簡単にこの難しい問題を口にする。全国制覇。武田の権力の傘を全国に広げること、日本全体を裏から操る魂胆なのだ。俺たちはただの道具にしか過ぎないわけだ。政司も先代の代からのボディガードであったためにそのことを骨身に染みるほどよく知っている。車の中で何度も先代から聞かされた言葉だ。だが、彼は一介のボディガードでしかな

いために、どうすることもできない。だから彼は、総長の愚痴を黙って聞くのが仕事だと心に言い聞かせている。

「そして、今その目標への第一歩を踏んだ。京都制覇だ。だが、見てみる。京都の京極会が関西の細川組と組み、その後ろにいる広島毛利連合までもが京都にちよっかい出してやがる。いまや京都は戦場と化した。幕末の頃の京都のように首の転がる日が絶えないだろうよ」

「へえ！」

そこではじめて政司が返事をした。ヤクザ独特の変に気合の入った返事だ。政司は訝しげな表情を浮かべて武田の話聞いていた。幕末の頃というのが政司には引かかる。政司は中学を出てすぐにこの世界に入った。それに中学の成績はどれを見ても一ばかり。そんな政司には、武田の話は難解なことこの上なかった。

「ところで、政司、先に京都に送り込んだ山県からの連絡は？」

「いや、それがまだ・・・」

それを聞いて武田は、また親指の爪を噛みだした。

「あの野郎、なにやってやがるんだ」

武田の声にドスがきいてきた。これは怒っている証拠であった。政司は押し黙って前を注視した。武田と目を合わせないようにするためである。目が合ったらまた難解な愚痴を聞かされる。

先代のころは良かった。先代もまた中学を出てすぐにこの世界に足を踏み入れているためにすっかり心身ともにヤクザだ。だから、言い方も、愚痴もストレートでわかりやすかった。だが、今の総長は大学を出ている。必要以上に知識が豊富なために、その愚痴の内容も、その話も、彼には全く理解できないところが多かった。

緊迫した空気の中、車内に搭載している電話が鳴った。その電話は後ろの座席の真中にあつたので、武田はワンコールで出た。

『山県です・・・』

「おい！！てめえー！！何やってやがったんだー！！」

電話の相手は、若頭の山県智典からだった。彼は先に京都に向か

い、京極会としのぎを削っていた。その山県に武田は頭ごなしに怒鳴り散らした。

『すみません。京都のマーケット確保に手間取ってたもんですから。』

最近日本では都市の合併が盛んである。二〇〇一年の合併都市さいたま市を皮切りにして、各地の知事たちは挙って人口増加と市の資金アップを狙って、大都市では次々と周りの市町村を吸収し、大阪、名古屋、横浜、果ては東京までもが合併都市を形成していった。実際の狙いは、自分たちの権力と利益の上昇でしかない。そして、マスコミで取り上げてくれるから。当然、利権をむさぼる知事の元では犯罪組織が裏で暗躍する格好となる。裏で犯罪を認められた犯罪組織は飛躍的に肥大化し、裏社会のみではなく企業という形で、表舞台でもその力を発揮しだすことになる。その代表格が関東武田組なのだ。そんな状態で、今や東京は世界最大の犯罪都市となり、数多くの銃火器や麻薬、それと比例して多額の金が日夜出入りしている。

こんな世俗のなか京都もまた三年前に周りの都市を吸収して合併都市を形成した。この関東から関西にかけての合併都市の増加に伴い、今まで遠く離れていた大都市同士が互いに大きくなることによって近くなり、それに伴って人々の動きも激しくなった。すでに東京・大阪間は普通電車で一時間ほどだ。当然人々が動くとも犯罪も動く。そうになると、犯罪都市東京は近くなり、もともと犯罪率の高い大阪、そして現状最悪の東京に挟まれた京都は一瞬にして犯罪率が上がった。

それから三年経った今の京都は、完全な無法地帯で警察までもが買収されるほどの東京に並ぶ世界有数の犯罪都市となっていた。そして、極東最大の武器庫と呼ばれていて、大阪、神戸経由で、北朝鮮、中国、ロシア、アメリカ、ヨーロッパ系の武器が、毎日のように出入りしている地帯であった。当然麻薬密売も盛んである。ここでは、頭の使いようによっては、いくらでも儲けられた。だから山

県がやっているその手のマーケット確保は、この世界ではかなり重要なことなのだ。

『今日、京極と細川が祇園で会うそうなんです』

武田の眉が微妙にピクリと動いた。口元には不気味な笑みが浮かんでいる。

「そうか、それは絶好の機会だな」

『ええ、ですから今夜、奴らが集まるキャバレーにあいつを送り込みます』

「だいじょうぶなんだろうな？」

『だいじょうぶですよ。彼は若いが、元傭兵部隊員。試験をしました、腕は確かです』

「名前はなんていったっけ」

『カズミ・ランカスター・サイトウです』

「そうだったな、こつちも、もうすぐ着く。吉報を待っている」

そう言つと武田は受話器を静かに置いた。顔には含み笑いを浮かべていて、大きな目を細くしている。政司がその表情を不気味なものでも見るかのような目でミラーから覗き込んでいた。その視線に気づいた武田がよりいっそう含み笑いを強める。今にも高々に笑い出しそうなくらいに。

「フフフツ、ようやく俺たちにも、運が回ってきた」

武田は突然、声を上げて笑った。政司はまたも訝しげな表情を浮かべて、首を傾げると車のほとんど通っていない広い高速道路に目をやった。空には月が高々と昇っていた。赤い、不気味な月だった。

「今夜は、荒れるぜ・・・」

武田はそう言つと、静かに目を閉じた。

## 第一話 始まりの赤いバラ - 続き

秋の京都は、紅葉がきれいだがかなり冷え込んでいた。しかも夜だから一段と冷え込みも厳しくなる。一ヶ月前に比べれば空も一段と高くなり、空気が冷たく澄んでいるため星がネオンサインに負けじと光を放っていた。そして、その中に無気味に光る赤い月があった。空の一番高い部分、最も星が集まっている場所にそれはあった。厳しい冷え込みにもかかわらず、その月だけはどこか熱を放っているような気さえ起こしそうになるほど真っ赤に猛っている月だった。その厳しい冷え込みのなか、黒のロングコートに身を包んだ男が、毒づいた光をけばけばしく放っているネオンサインの看板の下で煙草をふかしていた。足元には、複数の吸殻が踏まれた状態で落ちていた。頬はもう真っ赤で、口からは紫煙に混じって白い息が出ている。もうここに二時間はいる。

風になびく金色の髪に、女性のような端整な顔立ち、それに似合わない鋭い目つき、華奢な体つき、長い手足、そんな美人な男が右手に花束を持ち、煙草をふかして立っていた。そんな容姿だから、数々の男女に声をかけられた。男の場合は、女と間違えてというよりも、圧倒的に彼目当てが多かった。そんな奴らに彼は一睨みくれてやって、そして、一言で一蹴する。

「失せろ、邪魔だ！殺すぞ！！」と。

向かいの高級キャバレーの前に文字通り真っ黒のベンツが四台止まった。レースのカーテンを後部の窓につけ、スモークをフロントガラスにまで貼って、中の様子を見えなくしていた。

列の二番目の車から、京極会総長京極義昭がまわりを見回しながら出てきた。彼の周辺には、右の内ポケットに手をつ込んであたりをきよろしている組員が複数いた。

他の組員が車のトランクから大きなアタッシュケースを出してい



た。その様子を、カズミは物陰に隠れて、デジカメにおさめていった。

先に京極と複数の武装した組員が、ホステスに案内されて店内に入っていた。その後にはまわりを確認しながら、アタッシュケースを持った組員たちが入って行き、最期に、京極会のNo.2、荒城吉光が右手に大きな鞆、左手に刀を持って颯爽とその店に入ってしまった。

その十分後、その店の前にまた黒塗りの車が四台止まった。今度はクラウンだった。その先頭の車から、細川組組長細川貴一が出てきた。彼の周りにはサブマシンガンを肩掛けした物々しい感じの組員が取り囲んでいた。

そのサブマシンガンを持った組員は、三台目までの車に乗っていて、その数は十四人であった。普通では考えられない厳重な防備だ。

四台目の車からは、細川組の幹部連中が出てきた。その幹部連中は全員アタッシュケースを持っている。そのなかには、細川組で最強と言われている突撃隊長島津斉彬の姿もあった。カズミはその様子を物陰に隠れながらデジカメにおさめた。

二十分ほどして、カズミは二十本目の煙草を地面に投げつけ、踏みにじた。空き箱を自分の後ろに放り投げ、左右を確認して道路を小走りに横切り、店の入り口前に立った。

カズミはおもむろに空を見上げた。さっきから気になっている赤い月が、今度はもつと輝きを増してそこにあった。その月はこれから起こることを予測しているようにさえ見える。カズミは思わずその月に舌打ちをした。なぜだかは説明しろといわれても説明できない。だが、なんとなくうざったかっただけだった。

入り口前には、二人のボーイが立っていた。カズミが店内に入ろうとすると、ボーイは前に出てきて足を止めさせた。

「すみませんお客様。今日は生憎、貸し切りなのですが」

カズミは声をかけてきたボーイを鋭く睨み、内ポケットから偽造した京極会の金バッチを目の前に出した。そのとたんボーイは深く

頭を下げて「失礼しました、どうぞ」と言っただ道をあけた。

カズミは堂々と正面から、敵だらけの店内に入って行った。

店の中はこぢんまりとした七十年代のクラブといったおしゃれな感じに仕上がっていて、今のキャバクラのような馬鹿騒ぎをするような雰囲気はなかった。

端にカウンターが設けてあり、カウンターの奥にバーテンが二人、中央にはピアノが置いてあり、中年のピアニストがどこかで聴いたことのある曲を奏でていて、その横で一人の女が歌っていた。記憶が正しければ、『calling me』という今から三十年も前の、インディーズのアルバムの一曲だ。女の歌唱力はかなりのものだった。つい聴き惚れてしまいそうになったほどだ。

その様子をドアのガラス越しに見ていると、歌手の女と視線が合った。彼女は潤んだ悲しげな瞳をしていた。カズミはそれを見て一瞬心を奪われて見入ってしまった。いた。

カズミがはっと我に帰ると、目の前には左腕にナプキンを下げたボーイの姿があった。

「すみませんが、念のためボディチェックをしますから、腕を上げてください」

カズミは少し前かがみになって、両足のホルスターのボタンをはずす。

「こうか？」

カズミが手を上げると両手にはH&K MP5 KA4サブマシンガンがあった。目の前にいたボーイは、驚いて悲鳴をあげ腰を抜かした。

間髪入れずにカズミはそいつの腹部に踵をねじ込み気絶させ、そのドアを蹴り破って、中に押し入り、左手の小指に引っ掛けてあった花束を投げ込むと、即座に両手の銃を乱射した。花束は小さく爆発してばらばらに散った。

そのとたん、外にいたもう一人のボーイが悲鳴にもならない声をあ

[illegible]

カウンターの店員やホステス、そして本日の客の組員や幹部が次々とその銃弾に当たって、血に染まっていく。

床に転がっていた、レミーマルタンのボトルに口をつけそれを自分の後ろに放る。アルコールが体内を駆け回り体が熱くなった。ボトルはくるくる円を書きながら宙を舞っている。それに銃弾がぶち込まれ、中身を撒き散らした。そのとき微かに女の悲鳴が聞こえた。

カズミはピアノに向かって一目散に走りこんだ。その間容赦なくカズミ目掛けて銃弾が飛んでくる。その銃弾を巧みにかわしながら、カズミは前転してピアノの所にしゃがみこんでいるさっきの歌手を抱きかかえる。

そのたびに彼女は泣き叫んだ。

カズミは彼女を左腕で抱きしめ右手の拳銃で応戦した。その間敵の銃声は止む。銃声が止んでいる間にカズミは彼女に「泣くな。殺

しやしない。ここでじつとしていればだいじょうぶだ！」と目を見つめながら言った。

彼女は体を小さく丸めて、その華奢な体が軋むぐらいカズミの腕の中で震えていた。だが、その怯えの残る目だけはカズミをはつきりと捉えていた。涙で潤みながらも、どこか芯の強い目だった。カズミはその潤んだ瞳を見ていると、心臓が早鐘のように鼓動し、体が熱くなるのを覚えた。だが、彼は認めたくなかった。会ったばかりのしかも殺さなくてはならない目撃者にその気が湧き出てきたことを。こいつはさつき飲んだ酒のせいだ。そうだ、そうに違いない。カズミは気持ちを落ち着けるように深呼吸をし、拳銃のグリップを強く握った。

## 第一話 始まりの赤いバラ - 続き2

襲撃される十分前。

荒城がソファに腰をおろしたとき、すでに話はまとまっていた。たった十分で、だ。この早さには、関西方面の組織が武田組の動向を見抜いていて、すでに話を進めていたことにある。今日、両組織が集まったのは、両組織の親睦を深めるためのただの飲み会に過ぎなかった。

三ヶ月ほど前より、武田組の幹部が京都で暗躍しているという情報が入っていて、その情報を聞いた京極会が、京都のマーケット共有を土産に細川組との提携を申し出た。京都は今、極東最大の武器庫と呼ばれている。大阪を仕切っている細川組がより一層大きくなる絶好の機会だった。そして、そこにぱくりと喰らいついてきたと言う訳だ。だが、京極会の狙いは細川組ではなかった。その後ろについている西側最大の裏組織毛利連合の権力を手に入れようとしたのだ。京極会は細川組との提携の際に、毛利連合の傘下に加わることを約束している。今まで一匹狼だった京極会が後盾を得たのだ。これによって、対武田組の絶対防衛線を完成させた。

「今回はいい取引ができたよ」

京極義昭は立ち上がって手を出した。目の前に座っていた細川貴一も立ち上がり、その手を強く握って握手した。顔には満面の笑みがこぼれていた。彼らのテーブルの上には先程組員が持っていたアタッシュケースが置いてあった。京極義昭の前に差し出されたケースは二つで、二つとも現金で一億の金が入っていて、合わせて二億の金があった。

細川の前にも二つのアタッシュケースが置いてあり、その両方にガムテープでぐるぐる巻きにされたビニール袋が入っている。ガムテープの隙間から白い粉が顔を出している。多量のコカインだ。

「これからは、互いに助け合って、関西の統一に全力を尽くそうじ

やねえか」

二人は互いに笑いあつて、もう一方の手でグラスを取り乾杯した。それに順じて他の幹部たちも立ち上がり「乾杯！」と言つてグラスのブランドーを飲み干した。その後ホステスたちがきて、ますます場が盛り上がっていく。

酒の席は全部で三つあつた。一番奥の幹部席、その手前にある各幹部のボディーガードの席、そしてその右側にある一般組員の席である。それぞれに綺麗なホステスがついていて、かなり盛り上がっていた。

荒城は立ち上がつて、手前の各幹部のボディーガードたちの席に行つて、自分のボディーガードになにやら耳うちした。そして、そのボディーガードと荒城は店の右奥にあるトイレに消えていった。その時、扉のガラス越しに、黒のロングコートを着た金髪の男が見えていた。

それは一瞬のことだった。店員の悲鳴がした後、扉を蹴破つて一人の男が両手のマシンガンを乱射した。外の悲鳴を聞いたときに何事かと皆立ち上がっていたので、次々と狙い撃ちにされ血に染まっていた。

島津斉彬は、組長の細川に飛びついて床に押し倒した。そのとき銃弾が間一髪で細川のいた場所に命中した。細川の前にいた京極はもうすでに全身蜂の巣になっていた。

ソファの裏にかりうじて隠れることができた組員たちは、銃を取り出してロングコートの男に撃ちこんだ。男は銃を捨てて、カウンターを飛び越えて、裏に身を隠した。

「組長！！組長！！しっかりしてください！！！」

京極会の組員が、蜂の巣になっている京極の体を激しく揺さぶる。体中から血が噴出す。もう息はしていない。彼はおそらく即死だったのだろう。

「やつを殺せ！！！」

細川が立ち上がって叫んだ。細川の白い背広は血で汚れていた。彼の隣にいたホステスや、自分の仲間の鮮血で赤く染まっていた。彼は組員に命令した後、テーブルの上のケースの蓋を閉めロックをかけると急いでテーブルの下に隠した。今日の収穫を無駄にしたくなかった。

カウンターからボトルが飛んできた。島津はそれ目掛けてショットガンスパス１２の引き金を引いた。

ボトルが激しく割れて、中身を撒き散らした。そのとき微かに女の悲鳴が聞こえた。それとほぼ同時に、カウンターを飛び越えて、ロングコートの男が出てきた。

「撃てえええええー！！！」

島津は組員たちに狂ったように叫んだ。

組員たちは焦ったように一斉にロングコートの男目掛けて銃弾を撃ちこんでいく。

男は銃弾を巧みにかわしてピアノの裏に隠れた。そこから男はハンドガンを連射してきた。

## 第一話 始まりの赤いバラ - 続き3

カズミは彼女を片腕に抱きながら、必死に戦った。カズミが歯を食い縛る、ギリツという音が微かに彼女の耳に届く。

長い銃撃戦になった。両者一步も譲らずに十分が経過しようとしていた。

（あまり長引かせると警察が来るな。多少危険だが、一気にかたをつけるか）

カズミは彼女をその場にしゃがませた。そして大きく息を吸うと、一気にピアノに飛び乗り、両手に持っているハンドガンを連射しながら前方に飛び込んだ。

バンツバンツバンツバンツバンツ

その弾が当たって、2人の組員が体から血を噴き出させて悲鳴を上げて倒れた。

前転して受身を取り、すばやく立ち上がって、その奥にいる組員たちに向けて両手の拳銃を連射した。

バンツバンツバンツバンツバンツバンツバンツ

奥にいた組員たちはその銃弾に当たって次々と血を噴出して倒れていった。

カズミは撃った後すぐにソファの裏に隠れた。ショットガンのフオアグリップを引いて今にも撃とうとしている島津斉彬の姿が視界に飛び込んできたからだ。

ドンツッ！！

斉彬が引き金を引くと、轟音が店内に響き、散弾が、カズミが後ろに隠れているソファの綿を散らした。

カズミはそこでリロードをすばやく済ませて立ち上がり、散弾の飛んできた方向に両手に持った拳銃を乱射した。濃い硝煙の靄の中に鮮血が舞い悲鳴が轟いた。



斉彬が次の弾を撃ちこもうと構えたときにはもうすでに遅かった。規則的な二挺拳銃の銃声とともに、斉彬のスーツのジャケットの肩や腹、胸に血が滲み、斉彬は思わず叫びその場にどうと倒れこんだ。そのとき斉彬は朦朧とする意識の中で奇妙な笑顔を見た。

その笑顔は荒城吉光のもので、斉彬の顔を覗き込んでいた。まるで死ぬ直前の姿を見るのを楽しんでいるかのようだった。

（チツ、楽しそうに笑ってんじゃねえよ。ムナクソ悪い・・・）

斉彬は心底そう思った。

濃い硝煙の中に、二つの影が見えた。

（撃つても、撃つてもまだ出て来やがる。ゴキブリかこいつら）

ごとんという音がした。カズミはおもむろに足元を見た。ゴロゴロと足元を通りすぎる黒い丸いものが見えた。

カズミの顔から血の気が引いていった。

（グレネードボム・・・?!?!?!）

急いで踵を返し、全速力でカウンターの所へ走り込んだ。

その直後グレネードボムは、とてつもない爆風と炎を上げた。通常では考えられない威力だ。大きなグラウンドピアノが跳ね上がり、その一角すべてのガラスが吹き飛んだ。

カズミはそれを紙一重でかわしてカウンターの裏に隠れた。カズミはカウンターにもたれかかって大きな溜め息をついた。それは安堵と疲労と怠惰さが混ざった複雑な溜め息だった。

ピアノの裏に耳を覆って隠れていた歌手の女、秋月リエは入り口付近にいた。驚きのあまりそのまま動くことができないでいた。

自分の隠れていたピアノが跳ね上がり、その一角すべてのガラスが吹き飛んだのに、自分は無傷でその場にへたり込んでいたからだ。彼女はそのまま爆風で吹き飛ばされて、ピアノの下敷きにならなくて済んだのだ。彼女は自分の目の前に聖母マリアの姿を見た。彼女はへたり込んだまま手を合掌し、何度も何度も感謝の祈りを捧げ

た。

爆煙は身を隠して斬りこむには絶好だった。荒城吉光が刀を抜いて、持っていた鞘を腰のベルトに挿した。

だが彼の前に、今まで頭を抱えてテーブルの下に隠れていた細川が出てきた。

荒城吉光は細川を鋭く睨んだ。

細川の顔は血と涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。まるで鬼ごっこをしている最中に強烈に顔面から地面に突っ込んでいった幼稚園児のような顔だ。

「おお、荒城、助けてくれ。俺はまだ死にたくないんだ。ああそうだ、ここで奴を仕留めたら、うちの幹部にしてやる。どうだ・・・悪くないだろう？」

細川は荒城吉光の前にひざまずいて彼の顔を、まるで、神でも見るかのようなすがりつくような目をして見ていた。

荒城吉光はその顔が嫌いだった。命乞いをするときの人間の顔ほど醜いものはないと心底思っていた。

「細川、俺はあんたの所の幹部なんかには全く興味はない」

「じゃあ何だ？金か？女か？」

細川の表情に焦りが加わった。声も裏返っていった。汗も滝のように出ていてますます醜くなった。

荒城吉光の鋭い目が、よりいっそう鋭くなり、刀を持つ右手にぎゅつと力がこもった。

「・・・・・・・・」

荒城吉光は無言で刀を大きく振り上げた。細川の顔が引きつった。腰が抜けて立ち上がれない様子だった。刀を両手で持ち直し、細川の左肩目掛けて力いっぱい振り下ろした。そのときの荒城吉光の顔は冷酷の一言に尽きる表情だった。

刃は左肩から右脇腹まで到達した。筋肉と骨と内臓を切り裂く感覚が刀の柄から伝わってくる。荒城吉光はこの瞬間がたまらなく

好きだった。

細川の目が飛び出んばかりに見開いていた。口はパクパクしている。

荒城吉光はニヤリと笑うと刀を時計回りの方向に少し回して抜いた。今まで引つ付いていた体がバカッと割れて、そこからおびただしい量の血が噴出した。

「お前にはもう関係のないものだ」

吉光は吐き捨てるように言うと、足元で仰向けに倒れている細川につばを吐きかけた。その様子を楽しそうにボディーガードで弟の国光が見ていた。スーツや顔に返り血をいっぱいに浴びながら。

## 第一話 始まりの赤いバラ - 続き 4

カズミはカウンターから銃口を出して、二つの影が見えたところに何発か連射した。薬莢が床に落ちて撥ねる音が聞こえるだけで、それ以外何も聞こえてこない。

カズミは体を起こしてカウンター越しに様子をつかかった。その時爆煙の靄の中から、火花を散らす丸い光が見えた。その光がカウンターに放物線を描くように向かってきている。

カズミは慌ててカウンターから飛び出て、その場に身をかがめた。その直後爆発が起きて、椅子が天井に届かんばかりに飛び上がり、カウンターの一部を吹き飛ばした。カズミは一瞬の虚を突かれ、心臓が口から飛び出そうぐらい大きく鼓動していた。息もかなり荒い。こんなに焦ったのは戦場以来のことだった。こんなヤクザどもに虚を突かれるなんて俺も落ちたな。カズミは息を大きく吸ってゆっくりと吐き出し、口から出そうな心臓をなだめるように胸をさすった。

二度目に息を吸ったとき、微かに血の匂いがした。少し顔を上げてみると刀を持った男が、返り血を顔やスーツに浴びて二、三メートル離れているところに立っていた。

カズミはその男が誰だかすぐに分かった。彼は立ち上がると前方に銃を構え、片方の目をナイフのように鋭くして舌打ちをした。

「お前か？これをやったのは？ずいぶんな歓迎だな」

荒城は笑みを浮かべた。細川にも見せたあの冷酷な笑みを。

「お前のように強い男が、この世界にまだ残っていたとは思わなかった。グレネードを喰らっても、まだびんぴんしてるとは。これは退屈せずに済みそうだ」

「ああ、退屈しないだろうな。これからパーティーの始まりなんだから」

そう言った瞬間構えていた銃を荒城向けて三発発砲した。反動が

全くないかのように、三発の銃弾は荒城の眉間目掛けてまっすぐ正確に飛んでいった。

それは、全く目に映らないと言ってもいい。薬莢が三つ、むなく音を立てて転がった。カズミは眉根を寄せて舌打ちをした。

発砲した瞬間荒城が彼の横に立ち、刀をこめかみのところに据えてにたにたと笑っているのだ。にたにたと笑っている荒城に一瞥して舌打ちをする。そうすると荒城はますます顔をゆるめる。

（チッ、ムカツク野郎だ）

「残念だったな。俺は銃弾をかわすのが得意なんだな。パーティーはもう終わりか？」

カズミは嘲笑を浮かべた。笑っていた荒城が顔をしかめる。

「な、なにがおかしい!？」

「ふんっ、ずいぶんとおめでたい野郎だなと思ってな。かわすだけかわして、殺せないんじゃないじゃねえか。脳ミソ鼻から出てるぜ」

荒城の目の色が変わり、奥歯を噛み締めるギリツという音が聞こえた。今の言葉を気にしたのか、体を仰け反らせて鼻を思いつきり啜った。そして、こめかみに据えてあった剣先を大きく振り上げた。「ざけんな!! 望みどおり殺してやる!!」

荒城が刀を振り下ろしたその時、ガキンと金属音がした。荒城は驚きのあまり目を鳩のように丸く見開いていた。

刀を振り下ろすその刹那のうちに、カズミは体を反転させて、両手に持っていた拳銃を交差させて、振り下ろされた刃を受け止めていた。荒城の表情を見て再び嘲笑を浮かべた。

「フンッ、悪いが、オレは、刀を受け止めるのが得意なもんでね」

カズミは目一杯腕に力を入れて、刃を弾き返すと、荒城の額に拳銃をつきつけた。

だがその時、サイレンが轟いて、赤い光が交互に店内に射しこんできた。

（チッ、もう来たか。早すぎだぜ）

「フツ、命拾いをしたな」

額に突きつけた拳銃のハンマーを親指で押さえて静かに引き金をひく。カチツとハンマーがもどる音がする。

「今度会った時は必ずしとめる。この屈辱は貴様を殺すまで忘れないからな」

荒城はそのまま踵を返すと、両手にアタッシューケースを持った弟のところへ走り去っていった。二人は厨房の裏口から外に出て行った。

カズミはしばらくの間その姿を、銃をホルスターにしまいながら、鋭く睨みつけていた。

「荒城吉光・・・」

ポツリと呟くと体を反転させて、爆風で吹き飛んだ窓から飛び出した。

そのメインストリートの駐車場には、白いシーマが置いてあった。この時代から見たらかなりの骨董品だ。カズミはコートのポケットからカギを取り出すと、カギについている小さいリモコンで車のドアのカギを開けた。

車のドアを開けようとした瞬間、ジュラルミンの盾を擁した警官が三人カズミ目掛けて銃を構えてきた。

「止まれ。その男！」

バンツバンツバンツ

カズミは車のドアを開けてそれを盾代わりにして身を隠し、止まる代わりに警官三人に向かって拳銃を発砲した。ジュラルミンの盾に弾痕が残る。要するに従う気はないということだ。いや、必要ないということだ。

「野郎！！撃て！撃てー！！」

警官たちは身をかがめてサブマシンガンを発砲した。そのうちの一人が無線で応援を要請する。

車は銃弾があたるたびに弾痕を残して火花を散らす。カズミはその間に車の助手席においてあったスタングレネードを取り出し警官

目掛けて投げつけ身をかがめた。

地面に叩きつけられたスタングレネードは一瞬凄まじい閃光を放った。警官たちは悲鳴を上げ、目を押さえながらその場に仰向けに倒れこんだ。アスファルトに頬を押し付けて悶え苦しんでいる。

車に乗り込みエンジンをかける。発進しようとサイドブレーキを下げた瞬間さっきの女が車の助手席に乗り込み、ドアを閉めた。女は首を少し傾けてカズミに笑いかけた。カズミは驚いて声も出なかった。

「何してる！降りろ！」

「私を人質にしたほうが逃げやすいんじゃない？さっきのお礼がしたいの。お願い」

女は真剣な顔をして、カズミの顔をジッと見つめている。

カズミはため息をついた。

「どうなっても知らないぞ」

女は静かにうなずいて見せた。

カズミの目にはサイドミラーに映っている四人の警官の姿が映っていた。考える暇すらなかった。

四人の警官は彼らの車目掛けて銃を発砲してくる。車のボディーが火花を散らす。

カズミは目いっぱいアクセルを踏んで車を急発進させた。タイヤから白煙を出してシーマは弾丸のような速さで疾走していった。

カズミが車に乗り込んでから五分後。刑事の男が一人煙草をくわえながら入り口のところに立ち尽くしていた。

煙がしみるのかしきりに目をしばたいているその若い刑事の顔には、驚きと呆れの笑みが浮かんでいた。（フー、やりすぎだぜ・・）彼は心のなかで溜め息をついた。

その彼の周りを特殊警察機動隊がせわしく走り回る。

特殊警察機動隊。それは警視庁が激化する凶悪犯罪や対過激派テロリスト用に組織した特殊部隊の名称である。彼らは通常の警官と

違つて、特別な訓練を受けている。特殊急襲部隊いわゆるS A Tの様なものであるが、多少違う所は軍隊並の圧倒的な火力と、どんな命令にも忠実に動き、作戦を完遂するまで作戦行動を止めない。そして精神コントロールも受けているため、犯人に対して躊躇なく引き金を引く。こちら辺が今までとは違い、人間味のない全く新しいタイプの特殊部隊なのである。集団による突撃作戦を主としており、今の日本が世界に誇る、最強の部隊である。

店内の様子はそのままドアの外から見る事ができた。爆発で扉が吹っ飛んで地面に横たえてあり、周りには無数のガラス片が散らばっている。

彼は店から二メートル程離れたところに立っている。そこから見ても生存者は皆無に等しいぐらい店内はめちゃくちゃだった。

彼は溜め息まじりに煙をはきながら、手に持っていた煙草を地面に落として足で踏みにじつた。その彼の後ろには準備万端、いつでも突撃可能な彼の率いる特殊警察機動隊が彼の指示を待つて待機していた。

ひとりの機動隊員が彼に準備完了の報告をして、突入の合図を促した。彼は左脇につけているホルスターから、M 1 9 コンバットマガナム6インチを抜き出すと手で小さく合図した。その合図と同時にいっせいに特殊警察機動隊が突入を開始した。彼はその後尾に加わって、銃で肩をポンポン叩きながら怠惰な様子でゆっくり歩いて入っていった。

案の定、なかに生存者はいなかった。彼は鑑識を呼ばせて死体の確認をとることにした。だが彼にはこのなかで死んでいる奴等の検討はついていない。この会合の情報は彼が山県に流したものだっただけだ。無論、彼の素性は明かさずに。

鑑識の男が無残に体を引き裂かれた死体を写真に収めていた。刑事がその様子を見ながら上着の内ポケットからマルボ口を取り出し、火をつけて煙をふかす。鑑識の男が彼に気づいて結果を報告す



る。

「この男、鋭い刃物か何かで一気に斬られています。正木刑事、今でもこのような芸当ができる者がいるとは思えません？」

正木と呼ばれたその刑事は、細川の死体に小さな蹴りを入れて舌打ちをした。鑑識の男は何か気を害したのではないかというような表情を浮かべて見ている。

「いや、一人だけいる。明神一刀流免許皆伝、京極会系荒城組組長、荒城吉光……」

正木と呼ばれた若い刑事は奥歯をかみしめ、眉をひそめた。鑑識の男はその顔を見て、恐くなつてすばやく作業に戻った。

「奴を逃すと厄介だな。悪いが、まだお前の助けが必要だ……」

正木刑事はそうポツリと呟くと、床に散らばっている赤いバラの花びらを拾い上げてぎゅっと握りつぶし、煙草の煙をたなびかせながらその場から去っていった。

外に出たとたん、警官たちがあわただしく走り回っていた。入り口の枠のところに体をもたれかけて、煙草をふかしながらその様子を呆然と眺めてこの後のことを考え込んでいる正木刑事の下に、彼の部下で新米巡査長の岩崎賢治が駆け寄ってきた。

「ま、正木さん、は、犯人らしき人物が、じよ、女性を人質に車で、と、逃走した模様です。お、お、追いますか!？」

岩崎巡査長は、興奮していてうまくしゃべれない様子だった。彼はこういう現場は初めてで、しかも憧れの先輩と仕事ができるということに興奮しているのだった。そんな彼とは対照的に正木は呆然としていてそれを聞いていなかった。

「正木さん!!」

岩崎巡査長が急に大声を上げた。正木は驚いて目を丸くした。

「犯人を追いますか？」

「ああ……、お前に任せる」

その言葉を聞いた岩崎の顔が急に晴れやかになった。

「お任せください!!」

岩崎巡査長は大げさに敬礼をして、その場からそそくさと走り去っていった。

しまったと思ったときにはすでに遅かった岩崎巡査長は特殊警察機動隊を引き連れて、車で出たあとだったのだ。正木刑事が生きている彼を見るのはそれが最後になった。

「チッ、クソ、もう追ってきやがったか。話が違うぞ」

カズミはサイドミラーに一瞥して舌打ちをした。そのサイドミラーには三台のパトカーと二台の特殊警察機動隊のワゴンタイプの装甲車が夜の闇を引き裂くドブラー効果の赤い光と、うるさいサイレンを目いっぱい鳴らして、猛スピードで追ってきているのが映っていた。

カズミは窓を開けるとそこから拳銃を発砲した。サイドミラーを見ながら撃っているのだから当たらない。

それに対抗してか、二台のワゴンタイプの装甲車の両ドアが開きそこから身を乗り出した機動隊員がシグSG551で銃撃を開始した。その銃弾がカズミの車のリアウィンドウを粉々に砕く。助手席に座っていた女は悲鳴を上げてその場にうずくまった。

カズミは銃弾をたくみにかわしながら、スピードを更に上げて警察の追撃を振り切ろうとした。だが警官たちは執拗に追ってくる。先頭のパトカーから身を乗り出し箱乗り状態で出てきた男が拡声器片手に大声をあげた。先程この件を一任された岩崎巡査長だった。

「その前の車!死にたくなければ止まれ!!」

バンッ

その偉そうなセリフを聞いて腹を立てたカズミは無言で箱乗りしている岩崎向けて拳銃を発砲した。だが銃弾は岩崎をとらえることはできなかった。間一髪の所で当たらなかったのだ。だが、岩崎は驚愕してそそくさと車内に戻っていった。

大きなメインストリートは夜ともあって車の通りが少なく、逃走

するには絶好の機会だった。カズミが大きな交差点を横切るときには信号は黄色になったばかりだった。彼が横をすばやく確認したとき、大型石油タンクローリーが信号待ちをしていた。今にも発信しようと思気込んでいるようにエンジンをふかしていた。彼は心の中で「ラッキー！」と叫んだ。

信号が赤になった瞬間、パトカーとワゴンタイプの装甲車が交差点を横切ろうとした。それと同時にタンクローリーが急発進した。そのとき交差点の真中で見事に衝突して爆発炎上した。

激しい爆風と炎を上げて、周囲の建物の窓ガラスを吹き飛ばし、ガス管は破裂して、一面火の海と化し、大惨事へと発展した。

その様子をバックミラーで確認したカズミはほっと息を抜いた。助手席の女は身をかがめて泣きじゃくっていた。カズミはそれを横目にアクセルをいっぱいに踏んだ。車はそのままこの大きくどこまでも長い道を疾走していった。

## 第一話 始まりの赤いバラ - 続き4 (後書き)

第一話、これで完結です。第一話は、アクションシーンに特化しておりますが、第二話より、もうちょっとストーリー性が出てくるかと思えます。ムフフなシーンもご用意しておりますので、乞うご期待！現在執筆中。進行率、80%

## 第二話 リエ（前書き）

あのキャバレー襲撃事件から一年。事件現場で偶然にも出会った二人は、恋人同士に。しかし、それが、本当に偶然なのか、あるいは、仕組まれた必然なのか？

リエは、この物語の鍵を握っている、らしい？？

## 第二話 リエ

### 第二話 リエ

西暦二〇三二年 十月二十九日 午前

新しく建てられた京都府警察署前の大きな木に囲まれた小さな公園。そのベンチにカズミの姿があった。黒のロングコートに身を包み、曇り空を眺めながら煙草をふかしていた。

そのカズミが座っているベンチに四つ折りにした新聞を持った、背広を着たサラリーマン風の背の低い一人の男が腰掛けた。新聞の間に何か挟まっているのか、異様に盛り上がっていた。

男はカズミに新聞を渡すと、公園で地面を啄ばんでいる鳩に目をやりながら口を開いた。

「車は黒のクラウンだ」

「・・・」

「今日はどこかで会議があるらしい。奴は必ず出てくる。その門から出てきたら、そいつで撃て」

男は警察署の門を指さして言った。その門の前には警備の警官が二人立っている。

「いいか。一人残らず殺せ。俺はここで見ていてやる」

男はライターで煙草に火を点けると、盛大に煙を鼻から出した。カズミは新聞の中に手を入れて中でスライドを引いて、薬室に銃弾を装填した。サイレンサー付きのオートマグ3。スライドのところには高精度のスコープが付いていて、かなりカスタマイズされている。

「おい、出てきたぜ」

男が煙草で門を示唆した。門が開かれて、中から京都府警署長の西田を乗せた黒いクラウンがゆっくりと出てきた。二人の警備の警官が敬礼をしている。

カズミは立ち上がると少し前に出てオートマグ3を両手で構えた。

スコープを覗いて、十字のレティクルの中心を車の後ろに座る西田の頭に合わせた。心臓の鼓動が高鳴り、息が荒くなった。

息を思いつきり吐き、止める。気持ちを落ち着かせて、オートマグ3の引き金を静かに引いた。こもった銃声とほぼ同時に、車のガラスに弾痕ができ、西田が前のめりに倒れた。反対側のガラスに蜘蛛の巣のようなひびができ白くなった。その窓に血が飛び散っている。それを見たカズミの目に涙が浮かんできた。

車が止まり中から拳銃を持った警官が辺りを見回しながら右往左往している。二人の警備の警官も腰のニューナンプを抜いて周囲を見回している。彼らのいる所は、木々に隠れて向こう側からはちょうど死角になっていた。

カズミは車の付近で右往左往している警官たちに銃を向けて引き金を引いた。こもった銃声と、弾き飛ぶ薬莢が地面に落ちると同時に、警官たちは頭から霧の様な血を噴出してその場に倒れていった。それは一瞬で、彼らには絶叫の一つも無かった。

ベンチに座っていた男が、煙草を足元に落としてそれを踏み蹴ると、拍手をしながらカズミに近づいた。彼は満面の笑みを見せながらカズミを見上げた。

「お見事！さあ、長居は無用だ。ずらかるぜ」

カズミは銃を腰のホルスターにしまうと、目に溜まった涙を手の甲で拭って隣にいる男を置いて歩き出した。それを見た男は訝しげな表情を浮かべて首を傾げた。

西暦二〇三二年 十月二十九日 夕方

雨が降ったりやんだりとパツとしない、苛つく嫌な昼下がりだった。街中はそんな天気のせいでいつもより人通りが少なかった。

そんな人通りの少ない道を金髪の男が口に煙草をくわえ、ロングコートを身にまとい、いかにも高そうな黒の傘を差して歩いている。男の視線の向こうには一軒の小さな花屋が在った。シャッターが降りていて、“しばらくお休みします”という張り紙がしてあった。

男は花屋の裏に回って裏口のカギを開けた。中は居住空間になっていて奥にはテレビやコンポ、パソコンなどがきれいに配置されている。そして真中にはソファが置いてあった。

男はコートを床に脱ぎ捨てて、ソファにどかと座った。体にはたくさんの銃火器がついている。

テーブルの上においてあるリモコンでコンポの電源を入れてCDを再生した。コンポから悲しげなジャズのメロディーが流れてきた。男はその曲を聴きながら涙を流した。この涙を流している男はカズミである。

部屋の中は薄暗く、男のすすり泣く声が響くだけだった。カズミは頭を抱えて泣きじゃくった。床に涙が音を立てて落ちていく。コンポからは相変わらず悲しげなメロディーが流れている。

ドアが開く音がしてカズミが拳銃を抜いて涙目を一生懸命に鋭くして振り返った。そこに買物袋を両手に下げた秋月リエが驚いた表情を浮かべて立っていた。雨の降る音が開けっ放しのドアからゆっくりと足を踏み入れてくる。

「……………」

リエが困惑した様子で立ち尽くしている。少し赤みのかかった長い髪が一瞬風に揺れて、香り立つシャンプーの匂いがカズミの鼻にやさしく触れる。

「……………」

カズミは拳銃をホルスターにしまうと、またうつむいて泣き出す。リエは買物袋をその場に置くとカズミの隣に腰掛け子供のよう泣いているカズミを抱きしめた。リエのやさしく芳しい香りがカズミを包み込む。

「また仕事だったのね……………」

「……………」

「あなたはやさしいから……………」

カズミはリエの胸の中で子どものように声をあげて泣いた。リエはそんなカズミの頭を撫でながら、泣きじゃくるカズミをやさしく



悲しげな瞳で見つめていた。

CDが三曲目に入ろうとしているときに、女神のようにやさしい眼差しのリエに抱かれているカズミが初めて言葉を発した。コンポからは切ない恋を唄った歌が流れてきていた。カズミは涙声で話し始めた。

「今日……、京都府警の署長を殺した……」

「……」

「その人は、俺が昔世話になった人だ……」

「そう……」

「昔、彼は俺が所属していた傭兵部隊の隊長だった。そのとき俺は彼の部下だった。彼は軍人にしてはやさしくて、俺が作戦を失敗しても『だいじょうぶ、また次がある』なんて明るく言って笑っていた。俺は、その人が好きだった。父親のように慕っていた。だが、俺は今日、その大切な人をこの手で殺したんだ……。最低だよ……俺って……」

カズミはまた思い出したかのように泣き出した。リエの胸に熱い感触が伝わる。リエはそんな泣いているカズミを強く抱きしめた。「彼は恨んではいけないわ……。だって、そうしなかったら、あなたが殺されていたんですもの……。あなたが大切に思っていたのなら彼だってそうよ。だから、彼だってわかってくれるわ……」カズミはその言葉を聞いたとたん、大声で泣き叫んだ。リエはそんな彼を強く抱きしめ、やさしく、それでいてどこか悲しげな瞳で見守った。

部屋の中には、雨の音と泣き声と音楽の音色が入り混じった複雑なメロディーが響いていた。

雨が上がって、天井の吹き抜けから月が覗いていた。月は煌々と輝き、月の周りには光の環がぼやっと出ていた。

リエはベッドに仰向けになって、時々、歯をくいしばり目を力強

く瞑っている、絶頂に達しそうなカズミの顔で隠れるその月を眺めていた。

ベッドのきしむ規則的な音、喘ぎ声とコンポから流れる愛を歌った曲が寝室いっぱいに甘く響いている。

カズミが腰を振るたびに、リエのあどけなさが残るその小さめの口から声もれる。

カズミが絶頂に達すると同時にリエも大きな叫び声にも似た声を上げた。

彼らは抱き合ったまま、互いにやさしく唇を交わしあった。長く甘いキスが終わるとリエがその花びらのような小さな唇を開いた。カズミは、リエの胸の内に顔を埋めている。

「ねえ、初めて会った日のこと、覚えてる？」

「ん？」

「確か、こんなきれいな月が出てる日だったわ。あの時の月は赤かったけど……」

カズミが仰向けになって、吹き抜けの窓から覗いている月に目をやった。確かにそこには真ん丸な月が出ている。

「ああ、あれは確か一年前のちょうど今時期だったな」

この日ちょうどあの事件から一年が過ぎていた。あの事件の後、武田組は組長自ら先頭に立って、弱体化した京極会を掌握し、京極会を事実上壊滅させたのだった。

この一年、京都では血で血を洗う抗争が続き、路上に死体の転がらない日はないといった状態が続いていたのだ。この京極会の壊滅は、西側の暴力団組織に多大な影響を与え、西側では武田組討伐の声が強くなっていった。事態を重く見た政府は、大阪を中心にして秘密特殊警察を非公開で発足した。これは、潜入捜査が中心で、その潜入捜査から情報を掴み、その情報を元に内部壊滅を図るのを主な仕事としている。

「あの日、あなたは、車に乗った私と目を合わせなかったのを覚えている？」

「うーん、そんなことあったかな？」

「そうよ。その前に店で一度目が合っているけど、あなたは赤い顔して俯いちゃったのよ。あの時のあなた、とてもあんなことするよ  
うな人には見えなかったわ。少なくとも私の目にはね」

「人間誰しも、いくつも仮面を持っているものさ。無意識のうちに  
ね。あの時、君に見せたのが本当の俺で、そして、銃を乱射して五  
十人近くの間人を殺したのが嘘の俺なのか、それとも逆なのか、そ  
れは自分でもわからない。自分は無意識だから気にしない。でも、  
他人は気になってしまう。だから、人間は互いに惹かれ合う。本当  
の部分が見てみたくなってるね。あの時、君もそう思ったんじゃない  
？俺の本性を知りたいって」

「そうかも知れないわね。でもあの時の、戦っている時のあなたは  
どこか悲しげな瞳をしていた。だからあれはあなたの本性じゃない  
って直感で思ったわ」

「さあ、それはどうかな？」

カズミは少年のような純粹で無垢な笑顔をリエに見せた。

リエはその顔を見て胸がときめくを感じた。・・・・私はこ  
の人が好き。好きで好きで仕方ない。今その言葉が胸の中をよぎる。  
・・・・そしてそれと同時に、こんな少年のように無垢な彼に、  
人殺しをさせるこの世の中と、自分の今置かれている立場を呪った。  
そう、彼女の今の立場こそ、この時代の荒んだ状況を象徴している  
といっても過言ではない。

（こんな時代じゃなかったら、私たち、もっと幸せになれるのに・・  
・・）

## 第二話 リエ・続き

西暦二〇三二年 十月三十日

武田組京都支部ビルの支部長室。そこは、美術品に囲まれた暗い部屋だった。よくわからない絵画に、石膏製の像が壁いっぱいに所狭しと陳列されていた。唯一光を放っていたのが、大きな書斎机に置かれたコンピュータのモニターだけだった。

若頭の山県はコンピュータから光ディスクを取り出して、彼の目の前で直立不動の姿勢をとっているカズミに手渡した。カズミはそのディスクを受け取るとすぐに上着のポケットにしまった。山県はそれを横目に、机の引き出しから封筒を取り出した。

「三日後に、大阪に向かってほしい」

「・・・・・・」

カズミは直立不動のまま訳も訊かずに山県を凝視している。山県はその視線が痛くて、彼の目から視線をそらして、引き出しの中の、細い葉巻に目をやった。それを指でつまんで火を点ける。長く煙を吐くとカズミのほうに目を戻す。相変わらず彼を凝視している。彼は居たたまれなくなつて短く溜め息をつく。

「そのディスクに作戦内容が入っている。それからこの封筒には新しい車のキーと、現場の詳しい地図が入っている。まあ、詳細はディスクを見てくれ。それから、そのディスクは秘密厳守のため、一度しか見られないようになっていいるから気をつけろ」

山県が椅子にどうと腰掛けて、長い溜め息をついた。咳払いが聞こえたのでカズミのほうに目をやった。このときようやく彼は口を開いた。この十五分ほど彼との会話はなく、ほとんど独り言に等しかった。

山県はこれが辛かった。カズミを山県指揮する特殊諜報部の諜報部員に起用したのは彼自身だが、彼自身、最も苦手な部類の人間を起用してしまったことに後悔していた。

仕事は確実にこなしてくれるが、それ以外何もない。何を考えているのかもわからない。そんな彼が今、起用してから五ヶ月、はじめて山県の目の前で、その口から返事以外の言葉らしい言葉を発した。

「一つ……、頼みがあります」

「……」

山県は驚きの余り、言葉が出ないでいた。カズミはそのまま続ける。

「女が……、女がいます。三丁目のフラワー・エンジェルという店で、花屋をやっています。その彼女を俺のいない間、護衛してもらえませんか？」

「お前に女とは、初耳だな。わかった、仕事に差し支えられたのは困るからな、心配するな」

「無理なお願いをしてすみません……」

「しかし、Solitary Wolf（孤独な狼）と異名をとるお前に女とはな」

「獣でも、人を好きになります……」

「……」

山県はカズミの意外な反論に一瞬返す言葉を失った。ここまでおしゃべりなカズミを初めて目の当たりにしたからではなく、彼が人を愛するということを知っていることに驚いたからだ。

彼のDNAには、殺人を助長する遺伝子が組み込まれていることを入部時の医療検査で知った。彼の身边を洗ってみても、今までやってきた経歴のほとんどが暗殺・殺戮・作戦による抹殺などであり、カズミ自体が筋金入りの“殺人機”だと思い込んでいた。だが、それは間違いだったのかもしれない。山県はここで彼の意外な一面を少し垣間見た気がした。

「そうか……、そうだな……」

山県がそう言うと、カズミは一礼をして踵を返してその場から去っていった。

ドアが開いた瞬間、まぶしい光が人一人分の隙間からまっすぐ山県のほうへ射していった。山県は目を細めながら光の中に消えていくカズミの後ろ姿を眺めていた。

そのとき山県はカズミの気持ちになって想像してみた。戦闘に参加するときのカズミの気持ちがどんなものか、何を思っただけなのか、何を守ろうとして戦うのか少しわかったような気がした。

（守るものがあるときの狼は、群れを裏切ることがあるという。奴も例外ではないかも知れない。手を打って置いて間違いあるまい・・・）

山県は書斎机の上においてある受話器をとって、一人の男に連絡をとった。山県の低く重々しい声がその広く暗い部屋にこだましていた。

いつも観光客で賑わっている京都駅前繁华街の一等地にカズミのマンションがあった。二十階建ての超高級マンションは、カズミにとっては京都にいる間の仮の住まいに過ぎなかった。だが、少なくとも、東京にある彼のワンルームのマンションに比べたら天と地の差であった。

このマンションは山県がカズミのために用意したものだ。そのため、常に山県の配下の監視の目が付きまとっていた。管理人から両隣、それに上下の部屋にもと、山県の諜報部に囲まれているのだ。カズミは山県から預かった光ディスクを見るために、居間のテーブルの上においてあるノートパソコンの電源を入れた。ディスプレイから光が放たれ、独特の、起動時に出るカリカリという音が聞こえてきた。

封筒を開け、地図と車のキーを確認する。

地図には大阪湾周辺の倉庫街が記されていた。その一部が赤で丸くマークされていた。B埠頭に位置する細川組御用達の武器密輸組織、表向きは、先物取引などが主な業務の相沢国際貿易株式会社の所持する倉庫だった。これを見るかぎり、どうやら武田組は武器が

ほしらしい。

パソコンの起動が終了し一瞬部屋の中が静かになった。カズミはおもむろに光ディスクをテーブルの上から取り、外付けのMOドライブに挿入した。巧みにマウスを動かしてファイルを開く。最初に醜く太った一人の男の写真が出てきた。そして、その下に文章が続いた。

本名：相沢賢治

職業：相沢国際貿易株式会社 代表取締役社長 元細川組幹部

詳細：細川組系列の企業で、おもに武器、麻薬などを関西を中心に各地に流す。本社もB埠頭倉庫街の中央に位置し、三十階建ての高層ビル。警備状況は、五十人近くの兵隊を保持。武装も我が組の特殊部隊並。細川組分裂の現在、独自に組を起こそうと計画中。そのため武装を強化してきている。

任務：相沢国際貿易株式会社本社及び倉庫の制圧、武器の搬出、社長相沢賢治の殺害

特殊部隊一個小隊による作戦行動、武器は組で全面支援以上

文章の後に五つの倉庫の写真、本社ビルの写真、それと使用可能な武器一覧があった。

使用可能な武器：非武装ヘリ三機、ワゴンタイプ装甲車五台、三十mm機関砲六機、その他特殊部隊用装備など

カズミは眉をひそめながらディスプレイに映っている任務内容を眺めていた。今回の任務は、いつもの任務に比べてかなりハードだった。この使用可能な装備からして、これはもうすでに戦争だ。ヤクザの争いとは言えない状況だった。武田組は一体何処に向かおうとしているのか、カズミには全く見当もつかなかった。

カズミは立ち上がってベランダに向かった。外ではもう、秋の紅葉が始まっていた。赤や黄色に色づいている木々が秋風に吹かれて、彩り豊かなグラデーションをおこしていた。

そしてその紅葉の木の下で、十代だろう男三人が一人のサラリー

マン風の男を殴ったり蹴ったりしている。おそらくかつ上げか、昔一世を風靡した親父狩りか何かだろう。どちらにせよ関係のないことだ。つい最近始まったことではない。いつもの光景で、飽きるほど見ている。日本の街のどこに行ってもよくある光景だ。誰かが、その脇を通っても一人も止めないし、見向きもしない。それが当たり前になっている。目を合わせればとばっちりを喰うだけだし、いいことは何もない。それはいわゆる一般常識だ。その一般常識に対しカズミはどうでもいいと感じている。そんなのは弱い奴の吐く台詞であって、一般常識だろうがなんだろうが気に障ればぶちのめす。それがカズミの考えだった。今は何も感じない。だから怒りもしないし、ここから怒鳴って助けようとも考えない。第一助けても礼も言わずにそそくさと逃げていかれるのが落ちだ。そんなのだったらまだ助けないほうが気持ちがいい。それほど人の心は荒み、そして必要以上の人間関係を拒んでいるのだ。だから、一般常識なのだ。裏を返せばマナーだ。なんとも恐ろしいマナーだが。

そんな荒んだ光景を横目にカズミは煙草をふかし、煙を胸いっぱい吸ってそれを長くゆっくり吐きながらいろいろなことに思いを巡らせた。

カズミにとってこの街は初めてではなかった。三年前にも彼はこの街に住んでいたことがあったのだ。彼はこの街に来るのが嫌だった。それは思い出したくもない過去を思い出してしまうからだ。三年前のある事件のことを。カズミにとってそれが憂鬱でならなかった。しかもそれは、どの光景、どの建物を見てもすべてを鮮明に思い出してしまうほど、眼球の奥か、それとも脳ミソの隅っこにでも強く焼き付いているのだ。いや、焼き付けられているのだ。

・・・もう何も失いたくない・・・それが三年前の事件で全てを失った彼の本当の気持ちだ。だから彼は二度と過ちを犯すことはできないと思い込んでいる。全て守り抜く。絶対に失わないと心に誓っている。

今また彼は過去を思い出していた。一人になると必ず、断片的に



思い出される。この忘れがたい過去、そして忌まわしい過去を。

数分そんな昔を思い出しながら外を眺めていると、携帯の着信音が耳に届いた。それがカズミを現実に戻してくれたのだ。カズミは携帯のディスプレイを見て眉をひそめた。深い溜め息が後に出る。

面倒くせえ奴からかかってきやがった……。

彼は面倒くさそうでやる気のない、怠惰な声でそれに応答した。

東京の武田組本部の評議委員会会議室。各席の前に日本地図を映し出した液晶のディスプレイのついた丸い机を囲んで、武田組の長老と呼ばれる者たちが座っていた。この長老たちの素性は国会議員や市議会議員などの政治家や、大企業の会長・社長たちであった。

長老たちは、資金を武田組に提供する代わりに、評議員となって組を自由に動かすことができたのだ。そうすることにより、武田組の権力を利用して、世界でも有数の大都市東京を裏で操ることができた。

この評議委員会による組の運営方は、先々代の代から行われた形で、今では組長の武田成明でも、彼らの決定は曲げられないほど強固な権力となっていた。だから、実質的に組を運営しているのは、この評議委員会なのであった。

今彼らは、東京どころか、この国までも裏で操ろうとしているのだ。今回の京都進出は、その第一歩だった。

武田組による京都制圧はこの一年でほとんど完成に等しかった。京極会系の組のほとんどが武田組の傘下に加わり、京都の市議会議員も抱き込んでいった。そして、それに従わない者は、次々と長老たちの決定で殺していったのだ。京都府警の署長がそのいい例である。

だが、京都で一つだけ制圧できなかったものがあつた。それは京極会系荒城組である。彼らは京都を離れて大阪に移り、細川組傘下だった組を吸収し、中国・四国・九州を抑えている毛利連合に組み、

大阪を中心に強大な勢力に発展していた。

ディスプレイの日本地図は、赤・青・黄の三色の色で区分けしてあった。赤は関東地方から中部・北陸、そして関西の一部を塗りつぶしている。これは武田組の領土を示している。青は東北・北海道、これは武田組の傘下に加わった南部組の領土。そして大阪から中国・四国・九州を黄色で示している。これは旧細川組・荒城組を吸収した毛利連合の領土である。

このディスプレイを見ながら評議員たちは頭を抱え、溜め息を漏らした。その中の一人で評議員長の中川広務官房長官が扉の所で頭を垂れている武田成明を鋭く睨んだ。

「君の話では、全国統一は一年でかたがつくと言っていたが、これでは話にならないか」

中川はディスプレイを指でコツコツ叩きながら、申し訳なさそうに小さくなっている武田成明を睨んでいる。

「まあいい、それで、毛利連合に勝ち目はあるのか？」

そこで初めて武田成明は顔を上げた。顔を上げたたん彼は、評議員の鋭い眼光が無数の矢のように自分を貫くを感じた。彼の頬を冷たい汗がつつ。

「え、ええ、まずは大阪を占拠し、その後、毛利連合の本拠地広島に攻め上って、毛利連合を傘下に加える予定です。はい……」

言い終えた後、武田が周りを見渡すと、相変わらず評議員たちは鋭い眼光を彼に浴びせていた。何の反応もなく、重い沈黙が澱のうにじわりと辺りに広がる。武田はその状況を目の当たりにし、良からぬ事が脳裏をよぎり、生唾を呑んだ。もしかしたら、ここで殺されるかもしれない。彼らからすれば、自分のような人形はいくらでもいる。

「簡単に言うが、その計画、成功するんだろうな？もう無益な金を出さんぞ。こっちも慈善事業ではないので、な」

中川が身を乗り出して武田に詰め寄った。年をとった貫禄のある鋭い眼光が武田の胸をえぐる。武田は高鳴る鼓動を抑えられず、胸

をぎゅつと手で抑えた。その手はひどく汗ばんでいる。

「は、はい、お任せください……。必ず、成功させます」

その言葉と同時に、評議員たちから溜め息が漏れた。それは、諦めの溜め息なのか、それとも、呆れて溜め息が漏れたのか、武田成明の頭はこの溜め息の意味を探そうと必死に回転していた。

## 第二話 リエ・続き2

六機の武装した大型輸送ヘリが広島湾の埠頭に向かって猛スピードで飛行していた。ヘリの向かって行く先には、表向きには製鉄会社の毛利連合の本部ビルがあった。

ヘリから伸びた空中はしごには左手に刀を持った荒城吉光と完全武装した弟の国光の姿があった。残りの五機のヘリから伸びた空中はしごにはサーマル・ゴーグルをつけ、ガスマスクをかぶり、防弾チョッキを着用した完全武装の荒城組特殊部隊員が二人ずつぶらさがっている。

地上部隊配置位置につきました！  
全部隊、降下準備完了！

右の耳につけている、インカムから特殊部隊隊長の声が聞こえた。それを聞いた荒城吉光が声を上げた。

「よし、作戦開始。抜かるな」

上空部隊、降下開始！

ヘリは部隊降下終了後、毛利連合本部ビル上層部に攻撃を開始せよ！

地上部隊、第二作戦位置で待機！

命令が飛び交い、各々が行動を開始する。

予定時刻だ、攻撃開始！！

本部ビルの庭に、おびただしい数の特殊部隊員がM16を構えながら突撃を開始した。それと同時に、空中はしごにぶらさがっていた上空部隊が、ビルの屋上に飛び移っていく。

一階の入り口に突然黒い影がどつと押し寄せてきた。その黒い影が自動ドアをこじ開け、中に突入してきた。一階ロビーにおびただしい靴音が響き渡り、一階にいた毛利連合の社員、兼、組員たちが慌てて拳銃を抜く。

ダダダダダダダダダダダダダダダダ

荒城組特殊部隊が一行に並んで盾を前に構えて、銃を掃射した。毛利連合の組員たちは慌てて逃げ惑った。しかし、隠れることができたのは、ほんの数人で、そのほとんどが黒い影が放った銃弾に倒れ、あたり一面に、悲鳴と血が飛び交った。

「こちら一階ロビー、こちら一階ロビー、現在攻撃を受けている！至急応援を請う！繰り返す！こちら・・・」

真ん中の受付のカウンターに隠れた組員が、そこから拳銃を発砲しながら、受付の内線電話で応援を要請した。その傍らには震える体を両手で必死に抑えてしゃがみこんでいる受付女性の姿があった。すぐに別の組員が銃を持って駆けつけ、中二階に並んで下の黒い影目掛けて発砲した。無数の銃弾が、一行に並んでいる荒城組特殊部隊に注がれた。

銃弾が盾に当たって火花を散らした。それが合図であるかのように、突然、整然と並んでいた特殊部隊が、ばらばらに散らばって、カウンターを挟んで、二つあるエスカレーターに急行した。

片方は下るほうなので、そこに向かった特殊部隊はものすごい勢いで発砲しながら走り込んできた。

もう一方の昇りエスカレーターのほうにいる特殊部隊は、ゆっくりと上昇しながらカウンターの中にいる組員そして受付女性、中二階にいる組員目掛けて銃を発砲した。その銃弾が次々と組員たちの体を貫いてゆき、組員たちは、悲鳴を上げてその場にばたきと血を流して倒れていく。女性にも発砲するほど彼らには容赦がなかった。

中二階に上がった特殊部隊が、二人ずつに分かれてそれぞれ命じられた場所に急行した。エレベーターで上を目指す者、非常階段で地下へ行く者、中二階の部屋を片端から襲う者など。

様々に行動する特殊部隊の通った後には、おびただしい数の血に染まった死体が転がった。

屋上に飛び移った上空部隊が、荒城吉光・国光兄弟を先頭に下に向かって突入を開始した。屋上にもものすごい数の靴音が地響きのように響き渡る。

最上階のフロアに差し掛かった上空部隊は荒城吉光の指示でばらに散らばった。上空部隊の靴音が最上階のフロアから各階に広がった。そして、彼らの通った後には、悲鳴と血に染まった無惨な骸が転がった。

非常を告げるサイレンが赤い光を交互に放ち、頭に響くブザーがフロア中に響き渡って、この混沌とした状態を痛いくらいに演出していた。毛利連合の組員たちが携帯している銃を持ってせわしなくビル内を駆け回っていた。

特殊部隊隊員たちは全く躊躇なく引き金を引いた。抵抗してくる者はもちろん、非武装で手を上げているものにも、泣きながら逃げ回る女性社員たちにも容赦なく銃弾を浴びせた。まるでビル内は虐殺が公然と行われる戦場だった。

ビル中層部の広い会議室の窓に、爆音と共に突如として前方にガトリングガンを取り付けたヘリが現れた。この時会議室の中では、毛利連合の幹部クラスの連中がこの非常事態にああでもないこうでもない議論を交わしていた。

彼らはそのとてつもない怪物の登場に肝をつぶして、急いで立ち上がると、どっと入り口に詰め寄った。どっと押し寄せたせいでドアが開かず、幹部連中たちは焦って怒鳴り合っていた。

そうこうしているうちにガトリングガンのモーターが急回転し、無数の弾丸がその部屋の大きな窓ガラスを砕き、壁いっぱい連続的に弾痕を残していき、会議室の折りたたみ式の机とパイプ椅子が穴だらけになって跳ね飛んだ。幹部連中はそれに恐怖してその場に一斉に屈んだ。そこに容赦なく弾丸がぶち込まれ、幹部連中の体をめちやくちやに貫いていく。

会議室前の廊下には叫ぶような、うめくようなの様々な悲鳴と、ガトリングガンの連続的な銃声が響き渡っていた。その脇を何事もないうちに淡々と歩く男が二人いた。荒城兄弟だ。彼らはもはや常人の精神構造を持ち合わせていないのだろう。彼らは感情がないかのように、来る途中途中で無差別に人を殺していつていたのだった。彼らが向かっている方向には、毛利連合の会長たちの部屋があった。この毛利連合は、中国地方の有力な三つの組が集結してできたものである。そのため、ここの主導権を握っているボスは三人いた。出雲尼子会会長尼子拓海、山口大内組組長大内宏一、そして一番の権力者で彼らの頂点にいる広島毛利組組長毛利翔、この三人はいつも、どんな時でも荒城兄弟が向かっている会議室の角の大きな部屋にいた。その部屋は二階分の高さがあり、中央には階段があつて踊り場から階段が二手に分かれて部屋を取り囲む手すりのついた中二階につながっていた。その両方に扉があり、そこは毛利連合のボス三人の直属の部下の控え室になっていた。非常時にはここから出てきてボスを守るのである。そのため常に彼らは完全武装をしていた。

そして部屋の内部は飛行場の管制室のようになっていて、数々のコンピュータ関係の機材で埋まっていた。これはあらゆる情報を、ここ一点で管理、統制するためである。

荒城兄弟がボス三人の部屋の扉の前に差し掛かった。この非常時だというのに、部屋の中は蛻の殻であるかのように静かだった。全く人の気配を感じることができないほど静かだった。

国光が扉を蹴破つて両手に構えていたUZIを昼間なのにもかかわらず薄暗い部屋の中に乱射した。  
ズガガガガガガガガガガッ！

銃声が滞りなく部屋中に響き渡った。所狭しと並べられていたコンピュータ関係の機材が、火花を噴きモニターを碎かれて一瞬にして鉄くずと化した。

弾を使い切るとむなしい葉莢の転がる音と、機材が崩れる音だけ

が辺りに響いた。部屋の中は硝煙と機材からの黒い煙でよく見えなくなっていた。吉光が中に入って様子を伺おうと一步踏み出した。国光はその隣りで低い姿勢になってUZIにマガジンを装填している。

吉光が目凝らして辺りを見回していると、突然部屋中のライトが点灯され、眩しいほどの光を放った。吉光は一瞬の虚をつかれて、手を目の前にかざしながら後ろにたじろいだ。

カチャッ！カチャッ！カチャッ！カチャッ！

複数の、銃を構える音が耳に届いた。かざした手の隙間から、目を凝らして状況を判断しようとした吉光は、その仰々しい体制に驚きを隠せないでいた。中二階にサブマシンガンを荒城兄弟向けに構えている男たちがずらっと並んでいたのだ。その男たちは荒城兄弟に銃口を向けたままピクリとも動かない。吉光もこのセキユリテイーがこれほどとは思わなかった。これは誤算であった。

階段の踊り場に毛利連合のボス三人が、向かって左から尼子拓海、毛利翔、大内宏一の順に、彼らを嘲笑しながら立っていた。吉光は小さく舌打ちをして、キツとボス三人を睨んだ。

「フンッ、とんだマネをしてくれたものだな」

「我々に齒向かって、ただで済むと思っっているのか」

「お前をここまでにしてやったのは誰のおかげだと思っている。お前のような男を組織においておいたのが間違いであった。いつかこうなることは目に見えていたのだからな」

踊り場にいるボス三人は右から順番にしゃべりだした。

「黙れ、古だぬき。何もできない屍の時代はもう終わった」

「言いたいことはそれだけか。屍だろうと、人徳があり、頭が生きていれば駒は動いてくれるんだよ」

「威勢だけではこの世界で生きてはいけんぞ」

「ふん、悪運も尽きたな。貴様はここで終わりだ」

吉光の頬を冷たい汗がつた。刀の鞘を握る掌が汗ばむ。久しぶりに訪れたこのなんとも言えない、死ぬか生きるかの緊張感。吉



光が最も好きな瞬間だった。

「それはどうかね！」

吉光がそう言い放つと、刀の柄に手をかけて、低い抜刀の姿勢になつて一気に床を蹴つて、踊り場目指して一直線に走り込んだ。

一瞬消えたように見えるほどの、神速の走り込みを見せた。それに呼応して、国光が両手に構えているUZIを中二階の男たち目掛けて乱射し、すぐさま両側から死角になる機材の裏に隠れた。男たちはその乱射に怯んですぐに吉光を撃つことができなかった。

「バカ！撃て！撃てえー！ー！！」

三人の真中に立っていた毛利翔が手をかざして叫んだ。両サイドの中二階の男たちは、慌てて吉光目掛けて引き金を引いた。

ダダダダダッ！ダダダダダッ！

中二階のサブマシンガンが一斉に火を噴いた。銃弾は吉光を間一髪のところまでとらえることができず、床に無数の火花を散らした。

吉光は黒のロングコートをマントのように翻し、風を切つて一直線にももの凄い速さで三人目掛けて突っ込んでいく。吉光を目の当たりにして恐くなった左端の尼子拓海が、情けない悲鳴のような叫び声を上げながら右手に握られていたコルトパイソン2・5インチの引き金を引いた。

バン！

吉光は紙一重で身を翻して弾をかわし、その反動を利用して回転をかけて刀を神速の速さで抜いた。

カチャン……

右手にぎゅつと握られていた拳銃が鋭い金属音を立てて床に落ちた。刃が、余りの速さに声もなく、口を開けたままの尼子拓海の腹部を横に裂き、そこから噴水のように血が吹き出て、尼子拓海はそのまま床に崩れ落ちた。

「き、き、貴様！！」

大内宏一が毛利翔の前に立ち、懷からグロック17を取り出し、震える手で、吉光向けて引き金を引いた。

バン！

彼の放った銃弾は吉光の頬をかすめた。吉光の頬に血がつたう。

吉光は頬を伝う血を舌で舐めとり、ニヤリと笑い掛けた。大内と毛利の二人は顔を引きつらせてあどずさった。

吉光は刀を鞘にしまうと大内目掛けて突進していった。

大内は恐怖でみつともない悲鳴を上げた。

吉光は右足をしっかり床について、低い姿勢になり、神速の速さで刀を抜いた。

一瞬、毛利翔の目の前が真っ赤に染まった。

はっと我に帰ったとき、大内の体が横に真二つになっていた。上半身が宙に浮き、下半身はその一瞬の速さを表しているかのごとく、血を噴出しながら少し前に歩いてそのままドシャツと音を立てて床に倒れた。その直後上半身が彼の目の前に落ちてきた。その大内の断末魔の表情を見たとき、彼は恐怖の余り大きな悲鳴を上げて頭を抱えながら階段を駆け下りた。

だがすぐに襟首を掴まれ、刃が目の前にたてられた。彼はごくりと生唾を飲んだ。体中から冷たい汗が、滝のように湧き出ていた。

「まだまだ、悪運は尽きてないようだぜ」

「こ、こ、殺すならさっさと殺せ」

「飼い犬にここまでされて悔しいか？」

「なに！？」

「よく悔しいときに血の涙を流すというが、俺は見たことがない。是非一度見てみたいな」

吉光は毛利翔の目の前に立てた刀を、深く押し当て一気にぐっと横に引いた。

「ギャアーーーーー！！！！！！！！！！」

壁を割らんばかりの悲鳴が轟いた。

毛利翔の目元から大量の血が噴出し、階段を転げ落ちていった。彼は床に転がり落ちてから数分、目を押さえて床をゴロゴロ転がりながら悶えた後、ピクリとも動かなくなった。彼は余りの出血に絶

命したのだ。

中二階の組員が騒ぎ始めた。突然のボスの死に動揺しているようだった。すっかり気を落として手に持っていた銃を床に落とす者もいた。

吉光は興奮冷めやらぬ様子で、両手を宙に浮かせて雄叫びを上げながらゆっくりと踊るような足取りで階段を降りていく。

吉光はその瞬く間に展開された惨劇に驚いて立ちすくんでいる国光とすれ違った時に、彼になにやら囁いた。国光の口元がほんの少し緩んだ。吉光は彼の表情を見て頷くと、コートを翻しながら意気揚揚と部屋から出て行った。

一瞬、静かになったこの部屋に、銃声と男たちの悲鳴が轟いた。

吉光はその様子を廊下で聞きながら、煙草をふかし、ニタニタ不気味な笑みを浮かべていた。

インカムを口元に近づけた。

終わったぜ。引き揚げの準備をしろ

了解

## 第二話 リエ・続き2（後書き）

第二話は、これでおしまいです。ちょっと、飛び飛びな場面展開に、読み疲れてしまうかもしれませんが、ここではテンポを重視し、よりアクション映画を観ているような感じを出したかったのです。ここまで、読んでいただけた方、お疲れ様です。そして、ありがとうございます。第三話以降も、どうぞ、よろしくお願いします。

### 第三話 今、この世界

第三話 今、この世界

西暦二〇三二年 十月三十日 深夜

バー“ドライフィールド”のカウンター席に腰掛けていたカズミは三杯目のスコッチに口をつけていた。

外は土砂降りらしく雨粒がひっきりなしに窓ガラスを叩いている。時計を見ると約束の時間をとくに二時間は過ぎていた。

カズミは苛立ちを抑えるために煙草を吸おうとした。だがカウンターの上面においた箱を開けて見ると一本も入っていない。

カズミは舌打ちをしてジッポライターを灰皿に投げつけ、グラスに入ったスコッチを一気に飲み干した。それを見ていた目の前にいる口髭を生やした四十半ばのバーテンが気を遣って彼の前にポケットのハイライトを差し出した。

「ほら、吸えよ」

「ああ、わりいな」

カズミはブランドにこだわらない方だが、どうしてもハイライトだけは好きになれなかった。口中に広がる独特のあの味。この味が胃を刺激して、吐きそうになるのだ。この男は知り合ったときからこの煙草をうまそうに吸っていた。カズミにはどうも彼の感覚が理解できなかった。しかし、イライラしているときは煙草が欲しくなる。背に腹は代えられずハイライトに手をつけた。火を点けたとたん独特の変な甘いのか苦いのかわからない味が口中に広がる。カズミは顔をしかめながら煙を吐き出した。胃がもたれてくる。

カウンターのの方に顔を向けた。バーテンがじつとカズミを見ている。おそらくいつもの台詞を待っているのだろう。バーの名前に合わないしつこいバーテンだとカズミは彼の顔を見て、そう昔から感じていた。

「相変わらず、それだけはだめか？」

「よくこんな不味いものを吸ってられるもんだな」

わかっていてもこの男はいつもこのハイライトを差し出す。このカズミの憎まれ口を期待しているのかもしれない。変わった趣味の持ち主だ。

「人を待つてるのか？」

「まあ、な・・・」

「女か？」

バーテンは小指を立ててニヤニヤしながらカズミに尋ねた。だがカズミは終始そっけない返事で返す。いつものことだ。彼もそれを十二分にわかつている。唯一取った行動はグラスを振っておかわりを頼んだことぐらいだ。だがバーテンは構わず続ける。これも昔からのことだ。彼は昔から、聞いていようがいまいが構わず続ける。「まあ、お前はいつもここで待ち合わせると、よく、すっぱかされていたよな」

グラスに丸くカットした氷を入れてスコッチを並々とついで差し出しながら話している。手元を見ずに器用に一滴もこぼさずにやっている。カズミはそこだけは感心して見ていた。だが、このしつこさはどうしても昔から許せなかった。

「俺も、なんだかんだいって、この仕事長いからな、それに、お前との付き合いも結構長い。だから、表情見てれば、なんとなくわかるんだよ」

「残念だけど、今日の読みは大はずれだな」

「ふん、趣味が変わったか？まあ、いい。それにしても、この街も随分と変わったもんだ。昔はよかったな。仲間とよくバカやったもんだ」

「あんだ、親父くさくなったな」

「久しぶりに会う奴によくそんなことが言えるもんだ。だけど、ここ三年来なかったのに、どうして急に現れたんだ？」

「俺もいろいろあるんだよ」

「風の噂で聞いたぜ。お前、またヤクザやってんだってな」

「今は、そんな古臭い言い方しないぜ。だが、まあ、そんなとこだ  
がな」

「三年前の事件で、もう懲りたかと思っただが、まだ、そんなこと続  
けているとはな」

「借りができた男がいてな、そいつにその借りを返すために  
やってるのさ」

「そういえば、今日は彼女の三度目の誕生日か」

「ここ来ると嫌でも思い出させられるな。あの日もちょうどこん  
な感じで雨が降っていたな。皮肉な話だ」

カズミは何かを考えているように、俯いて黙りこくってしまった。  
と、いうよりも、あの日のことを思い出している。バーテンもまた、  
そのことを知っているために、これ以上カズミが口を開くまで何か  
言うことはできない。しばらくの間重い沈黙が続いた。今まで意識  
していなかった、周りの客のバカ話や自慢話が耳に入ってくる。

カズミは煙草をバーテンに一本差し出し、そして自分も一本口に  
咥えて火を付け煙を深く長く吐き出した後、その沈黙を破った。客  
前で仕事中に失礼だと思ったバーテンは、周りの客にぺこぺこ頭を  
下げながら煙草をふかした。周りの客も馴染みばかりなのでそれを  
快く許した。

「もう昔の話だな」

グラスの中で溶けて崩れる氷の音が、その雰囲気を作するように  
二人の耳に届く。

「あのおきのお前の行動は別に間違いではなかった。男と女の間  
には常にトラブルがつきものさ。だから、もういいんだ。お前は、三  
年も悩んだんだろ？どちらにしろ、あのおき、お前とあいつは闘う  
運命だったんだ。そして、彼女とは結ばれない運命、むしろ、彼女  
自身がそれを望んでいたかどうか、あのおきからは微妙だからな  
ただ、それだけのことだ」

「……」

「ここに来たってことは、ふっきたってことだろ？じゃあ、もう

いいじゃねえか。若いうちはバカやって成長していくんだよ」

「だけど、俺は、偉そうなこと言ってたわりには、女一人守ることすらできなかった。それどころか、この手で・・・」

「彼女言つてたぜ。あのとき、カズミに会えて、うれしかったってな。」

「・・・」

「だから、もういいんだよ。彼女もまた、ヤクザの女だったんだ。そして、それも運命だったんだ」

「甘い、戯言だったんだ。彼女と一緒にになれるわけがなかった。だけど、それ以上に、彼女を愛してしまったんだ」

「おいおい、いつからここは懺悔室になったんだ？俺は牧師じゃねえぞ」

「・・・」

「もう、止そう。終わった話だ。悪かったな。嫌なこと思い出させちまって」

バーテンは分が悪そうに後頭部を掻き毟ると、煙草を床に投げつけて踏みにじった。

随分と昔のことを思い出してしまった。だが、ここに来たつてことは、何処か自分の中で思い出したかったのかもしれない。忘れてはいけないんだ。いや、忘れることなど、この先一生、できないのかもしれない。忘れてはいけなさと自分の中の何かが叫んでいる。

カズミはすっかり氷が溶けて薄くなったスコッチを一気に飲み干した。待っていた人間はとうとう現れなかった。

「まっ、人間、何かしら汚いことを背負って生きてるもんさ。だから、もう気にすることなんてないんだよ。俺も、お前ぐらいのときはそうだった。だがな、そうやって、背負い込むことも必要なんだよ。皮肉な話だがな。そうして、強くなっていくのさ」

バーテンは恥ずかしそうに鼻の頭をポリポリ掻いている。柄にもなく臭いこと言ってしまった。

「あんた、恥ずかしいこと言うようになったな」



カズミがすかさず、鋭く突っ込みを入れる。

「うるせえな。氣遣って、言ってやったてのによ」

バーテンは、顔を真っ赤にして、恥ずかしそうにこう頭部を掻き毟りながら言った。それを見たカズミは、にやりと笑った。

「さて、そろそろ帰るわ。いくらだ？」

カズミが立ち上がったてコートを羽織ながら訊いた。

「いいよ。今日は久しぶりに会ったんだ。そのスコッチは俺からのプレゼントだ。だがな、勘違いするなよ。それは、お前だけじゃなくて、彼女の分もだ。お前の中にしまい込まれた彼女とも、久しぶりに再会できたからな」

「そうか、すまないな。俺も、ここにきて、過去から逃げてばかりだったが、あんたのおかげで、なんか吹っ切れたような、すっきりしたような気分になったよ」

バーテンは悪戯っぽく笑うと、カズミの肩をぽんと叩いた。カズミは鼻で笑い返し、踵を返して出口に向かうと、振り返らずに手を上げて、さよならとありがとうの礼をした。バーテンはその素直じゃない、ぶっきらぼうな挨拶を笑顔で見送っていた。

あの三人でよく来ていた頃とちつとも変わっていなかった。容姿は少し大人びてきたが、言動は憎らしいが何処か憎めない性格もちつとも変わっていない。目の輝きもあのころのままだった。純粹でまっすぐな目をしている。

だが、バーテンはそこに危惧を感じていた。もし、また、あの頃と同じようなことが起きたなら、おそらく彼は二度と立ち上がることはできないのではないか。純粹ゆえに、それをこれ以上背負い込むことができないのではないか。おそらく、彼自身、以前の罪の意識から何かしらの落差を感じている。だが、もう三年も経ったんだ。そろそろ、開放されてもいい頃だろう。もう懺悔は終わりだ。うずくまって泣くのは誰でもできる。戦いに生きるものは、犯した罪を糧にして生きていかなくてはならない。たとえ、それがどんなにつらくて、残酷だとしてもだ。もっと強くなれ。そして、後ろを振り

返らず、お前の信じた道を、どんどん前に進んでいくんだ。それが  
お前が殺した彼女の願いでもあり、お前を信じている今の人たちの  
願いでもあるんだ。そうだろ？ゆき子。バーテンはそう心の中で呟  
きながら、閉まりかけの扉を眺めていた。扉についているベルが空  
しく店内に響いていた。

### 第三話 今、この世界 - 続き

外の雨は小降りになっていて、もうすぐ止む気配も見せていた。カズミはバーの入り口の雨よけのところ、先程もらったハイライトに火を点けた。顔を上げるとあちこちの店のネオンサイトが毒々しい光を放っているのが目に付く。

煙を吐き出すとき彼は眉をひそめる。眉間には三本のしわが入っている。不機嫌指数百パーセントと言ったところだ。かなりこの味が嫌いなようだった。それでも、愛煙家としては何か吸わないと寂しいものなのだ。

街は“花金”ということもあって、酔っぱらいで一杯だった。額にネクタイを巻いて、路上に吐きながらふらふら歩いている者もいた。またある者は水浸しの路上に大の字になって寝出す始末だった。この国の人間は相当まいっているようだとかズミは思った。

確かにこの国の人間はかなりまいっていた。

何年たっても景気は低迷するばかりだし、倒産、失業も相次いだ。それより何より治安が急激に悪化したことが一番の原因だ。それは二千年初頭に始まった上層部の相次ぐ汚職事件に端を発していた。それに伴って今まで国民の強い味方だった警察・検察が買収され始め、すでにその機能を失い、政治家は金以外に興味を示さなくなった。上層部の人間は国民を人間とは思わなくなってきたのである。

街の賑やかな表通りから一本移動すると、喧騒とは何万光年も離れた墓地のような場所に出るはずだった。だが今日は違った。ある労働団体だろう男女の集団がストライキを起こして、プラカード片手になにやら叫びながらデモ行進をしていたのだ。

彼らの行く先には警察の機動隊が列を作って待機していた。後ろには放水車まで用意されていた。こういう時だけ警察の対応は早か

った。

上空には無数のヘリが旋回していた。おそらく報道関係のヘリだろう。真っ直ぐに下ろされた無数のスポットライトが彼らを照らしていた。

カズミが物陰に隠れながらその様子を見てみると、とうとう労働団体と警察が衝突した。労働団体は石ころや用意していた火炎瓶を機動隊の列に投げつけたのだ。その火炎瓶の中には爆薬の入っているものもあつて機動隊が爆風で吹っ飛ぶということもあつた。

業を煮やした警察は彼ら目掛けて放水を開始した。たいていの団体はこれで逃げるのだが、今日の彼らは違った。それでも怯まず突っ込んでいくのだ。なんと銃を発砲する者まで現れた。

銃弾が当たって警察官の一人が地面に仰向けに倒れた。一瞬、時が止まった。警察官たちは驚いてしどろもどろしている。

「全員確保！！！！」

放水車の上にいる刑事らしき人物が叫んだ。機動隊が警棒を抜いて団体に突進していった。両者は入り乱れて衝突し、まるで戦国時代の合戦を見ているようだった。

労働団体は怯むことなく火炎瓶や石ころを投げつけたり、手持ちの銃を発砲した。

その中で機動隊員の一人が火だるまになった。獣のような呻き声を上げながら地面をゴロゴロ転がりそのまま動かなくなった。それを見た他の機動隊員が怯んであとずさる。

「第二部隊！発砲準備！！！」

放水車の刑事がもどかしくなつて、半ばやけになつて叫ぶような大声を張り上げて指し示した。すると後ろに待機していた機動隊がライフル銃のSG551を持って小走りに走ってきた。すぐさま整然と並ぶとSG551を団体狙つて構えた。

「第一部隊！退避！！！」

その声で一斉に労働団体と衝突していた機動隊が、第二部隊の後ろに逃げ込んだ。団体はもはやテロリスト扱いされているようだった。

た。通常、労働団体の沈静に銃は使われない。

「発砲開始！！！！！」

そのとき、物陰に隠れてみていたカズミの肩を叩く者がいた。カズミは焦って懐の銃を抜いて振り返った。不覚にも後ろを取られるほど熱中して見入っていたのだ。だが振り返ったとき見覚えのある顔に直面した。少し頬骨の張った色黒の顔だ。友人の刑事正木晃一だった。どちらかというと刑事よりホストの方が似合いそうなほど、女性受けする愛嬌のある顔立ちだ。

「遅くなつてすまない」

その声の直後、無数の連続的な銃声と悲鳴が耳に届いた。警察は団体に発砲したようだ。こんなことは以前の日本では考えられないことだが、これが現実、これが今の日本の現状だ。

「いつから警察は、一般市民まで殺すようになったんだ？」

そっけない声で正木に訊いた。それに対して正木は少し肩をすくめるぐらいだった。

「どこか店に入ろう」

そう言うと、正木はさつさと歩き出した。

「なあ、煙草、持っていないか？」

「ほら」

正木はポケットからマルボ口を取り出して肩越しに振り向いてカズミに放り投げた。カズミはうまくそれをキャッチすると口元だけで笑って見せた。正木もまたそれを見て鼻で笑い返す。

彼らはいつもこんな感じの、ドライかつクールな関係だった。お互いにプライベートなことはあまり干渉しないし、仲がいいといった感じもない。むしろ傍から見たら、仲が悪いように見えるほどだが、彼らにとってこれほど心地いい関係はなかった。言うなれば二酸化炭素と酸素のように自然な関係なのだ。一緒になつても何も起こらないし、はなれても別に問題はない。そんな関係だった。

カズミは嬉しそうにマルボ口の煙を楽しんだ。さっきのハイライトに比べたらカズミにとって月とスッポンの差だった。カズミはす

かさずポケットのハイライトを後ろに放り投げて、その場を後にした。

ハイライトが放物線を描いて落ちた路地の向こうでは、銃声が轟き、警察と団体が派手な衝突を繰り返していた。

すでに午前二時を回っていた。こんな時間に開いているのは、演歌のバリバリかった安い“朝まで居酒屋”だけだった。

こんな店にうまい酒と料理がないことを彼らは知っていたが、ないよりはましだと互いに珍しく意見が合って店の引き戸を開けた。普段なら意見が割れて、ケンカ状態になるところだ。

店内は焼き鳥の匂いに煙草の煙が立ち込めていて、空調はお世辞にもいいとはいえない。

二人とも店内に入ったとたん、のどの痛みを覚えた程だ。

二人は顔をしかめながら奥の小上がりにあがった。ここなら他の人間に話を聞かれることはないからだ。

周りは酔客で一杯で、自分たちの話に夢中になっていて、とてもじゃないが人の話を聞く余裕などはない様子だった。こういう状態が彼らにとってベストだった。

ビールと適当なつまみを頼んだ二人は、とりあえず儀式的に乾杯をすると本題に入ることにした。今回誘ったのは正木のほうだった。でも、いつも正木のほうから誘うのだが。

「今日、広島のマリ連合のビルが襲われた。無残にも全員惨殺されていた。死体の一部には鋭い刃物で斬った跡の残ったものもあった。奴らが本格的に動いたぞ」

カズミは話を聞いているのかいないのか、ビールのジョッキをずつと傾けていた。もう二杯目を頼む始末だ。ジョッキは洗いが少ないのか、側面にビッチリ泡が残っていた。この行動に、ちよつと腹が立った正木も一気にジョッキを傾けた。ごくごくのどを鳴らしながらビールを一気に胃に流し込む。

カズミはこんな調子でいつもマイペースだ。いちいち腹を立てて

いたら、それこそバ力を見るだけだった。そのことを一番よく知っているのがこの正木という男だった。

「カズミ、お前が京都府警の署長を暗殺しただろう？」

「ああ・・・」

「そのおかげで、上層部がようやく重い腰を上げた。まあ、俺だって西田署長が死んだことはうれしいわけではない・・・」

正木が少し俯いた。彼もまた、以前西田という男にかわいがられていた男の一人だったからだ。

「・・・」

「東京で、警視庁と国家公安委員会、それに防衛庁などの機関が治安維持隊を編成した。我々秘密特殊警察以外にな。これは異例のことだ。もちろん秘密裏にだ」

「それは、さっきのような過激な労働団体を潰すためか？」

「あれは労働団体ではない。彼らは革新党というテロ組織だ。政府を根底から覆そうとしている。右翼より恐ろしい奴らさ。さっき見た奴らは雑魚中の雑魚だ。お前のようなもつとすごい奴らが裏で暗躍している危険な組織なのだ。これもまだ公表されていないがな」

「その治安維持部隊が何かあるのか？」

「お前、今度どこで仕事することになったんだ？」

「大阪」

「それがまずいんだ」

「なんで？」

「東京に治安維持部隊が編成されたことにより、関西方面は我々秘密特殊警察が重点的に捜査することができるようになったからだ」

「・・・!!」

カズミと正木は俯いて考え込んだ。

秘密特殊警察はその迅速な行動力と特殊機動隊を独断で作戦に投入させることができるということで裏の業界では脅威となっていた。各地に潜入捜査官の諜報部員を紛れ込ませてあって、少しでもボロ口を出すような動きを見せたら即刻通報し即行動、そして軍隊並の怒

涛の強さでその組織を殲滅してしまう。これが秘密特殊警察だ。

カズミもこの潜入捜査官の一人である。何も問題がないと思われるが、この潜入捜査官同士、秘密裏に動いているのでお互いの顔を知らない。知っているのは正木のような少数の関係者だけだ。そうなる同士討ちが始まり、互いに今までの計画がすべて水の泡になる可能性が出てくる。現にこういった例は少なくない。

悪いことに第一課から第十課までと細かく部署が分かれている。それもまた互いに張り合って捜査をしているため、つながりが薄いし、どこで活動しているのか互いに知らない。要するに警察社会の馬の目を射抜くような蹴落とし合いが、この新しい機構でも未だに続いているのだ。特殊セクションを増やしても、この昔からの風潮が残っているため、その効果を最大限に発揮できないでいるのだ。しかも荒城組と武田組の件に関与しているのは正木たちの他に五つの部署が絡んでいる。そのため潜入捜査官が複数いて捜査がこんがらがってしまうわけなのだ。

という訳で、この警戒態勢が密な状態のまま大阪で事を起こすと、秘密警察の同士討ちが相次ぎ、壊滅的な打撃を受けて二度と立ち直れなくなる恐れもあるからだった。

「それはいつだ？」

正木はふと思いついたかのように口を開いた。唐突な質問にカズミは首をかしげた。

「それが何か関係あるのか？」

「ああ、大ありだ。一週間後に秘密警察緊急会議が開かれる。その時にそれぞれ独立している部署を一つにまとめて、捜査をスムーズにしようという計画が出ているのだ。おそらくこれは即実行されるだろう。今までの問題を一気に解決できるのだから」

「残念だが、仕事は明日だ」

「明日じゃまずい。何とか延ばせないのか？」

「無理だ・・・な」

カズミはまた俯いて考え込んでしまった。



大きく溜め息をついた正木はジョッキのビールを一気にのどに流し込んだ。

店員が空のジョッキに気づいておかわりの注文を訊きに来た。

正木はビールではなく今度はバーボンウィスキーのI・W・ハーバーを頼むことにした。こんな居酒屋にバーボンがあるのは珍しい。カズミもそれに気づいて「二つだ」と追加注文した。そして店員を待たせて一気にジョッキ一杯のビールをのどに流し込んだ。その速さわずかに三秒という驚異的な速さだった。

「相変わらず酒のペースと女に手を出すのは速いよな」

正木は秋月リエに関して嫌味を言うつもりでそれを口に出した。だがカズミは「まあな」と軽く流してしまった。正木はそのそっけない返事に後の言葉をつなぐことができずに咳払いをした。期待した答えが返ってこなかったので分が悪くなったからだ。こいつのマイペースにも拍車がかかってきたようだと思っただ。

「カズミ、女には気をつけるよ」

正木が急にまじめな顔をして囁くように言った。カズミが訝しげな表情を浮かべて正木を見つめた。正木がバツが悪くなって、何も聞いていないのに言い訳をし出した。

「いやな・・・、俺、またな女に逃げられたんだよ・・・」

カズミが思わず笑ってしまった。正木が女に逃げられるのはこれで三度目だった。正木は顔を真っ赤にして怒った。今回の女とは結婚していて子供までいたのだ。女の子だ。

「またかよ。何を悪いことしたんだ？」

「俺がいつも家にいないのが悪いんだとよ」

「ふーん、そんなもんか」

「ま、でも、子供とは一週間に一度会っているんだがな」

「ご苦労なこつて」

「お前はいいよな。結婚までいかないから」

「ま、それも一つの苦労だって・・・」

店員が彼らのテーブルにバーボンのグラスを二つ置いた。そのバ

ーボンを見て二人は、正木の不幸話の前に重要なことを話していたのに気づいた。彼らはいつもどんな重要な話をしていても話が脱線することがあるのだ。いつも話をはぐらかすのは正木のほうで、途中まで覚えているのにも関わらずその話にかズミは、面白半分でついてきてしまうのだった。

「何でこんな話になったんだっけ？」

完全に前の話を忘れてしまっていた正木がかズミに尋ねた。こんなときかズミは必ずと言っていいほど前の話を覚えているのだ。

「お前が女には気をつけるとか言うからだ」

「そうか……。で、その前に何か重要な話をしていたのだが……。なんだっけ？」

これで正木は、警視庁でも一目置かれている若手敏腕刑事なのだから驚きである。その証拠に二十代で警部補という異例のスピード出世を遂げている。

「秘密警察の話だ」

「ああ、そうだった」

正木は手をぽんと叩いて、オールクリアといった調子で思い出した。かズミはその様子を見て、頬杖をつきながら溜め息をついた。（よくまあ、こんな重要な問題を瞬時に忘れることができるものだ）ふとかズミが何かを思い出したかのように、急にコートのポケットをまさぐりだした。そしてデジカメとメモリーカードを正木の前に出した。

「この前の写真だ」

「お前がやった、クラブ襲撃事件のか」

正木はデジカメにメモリーカードを差し込んで内容をまじまじと見始めた。かズミはそこで初めてテーブルの上に置かれたーボンを手をつけた。一口飲んだだけでのどが熱くなって、「ああー」と大きく息を吐かされる。さすがストレートともあって、結構きつい。

正木が見ていたデジカメの内容は今となっては全く意味のない内

容だった。だが、唯一彼が惹かれたものは、左手に刀を持った銀のロングヘアーの男が写った写真だった。荒城吉光の写真だ。荒城吉光の写真は、警察にもほとんどなく、あったとしても曖昧なものばかりだったので、これはかなり貴重なものだった。

正木はデジカメからメモリーカードを抜き取ると、それをポケットにしまつて、カズミに空のデジカメを返した。カズミがむつとした顔になった。

「おい、メモリーカード、高いんだぜ」

金持ちほどケチなことを言うと言つたと正木は思った。実際カズミはこういう命をはった仕事をしているので、かなり金を貰っている。それに、武田組と警察から二重に金を受け取っている。何より、暗殺稼業なので、でかいボーナスも出る。これだけ儲かっているのに、たかがメモリーカードごときで怒っているのだ。

「わかつたよ！後で返すつて」

「よし！」

カズミは大きく頷いて見せた。正木は肩をすくめて首を左右に振つて溜め息をついた。昔からこういうケチな性分は変わっていないかったからだ。

「ところで、大阪の件はどうする」

カズミが話を最初に戻そうと正木にふつた。

「それなんだが、大阪の件は、先に俺たち警察で押さえてしまつてのはどうだ？」

「それはいいかも知れないが、俺が何するか知っているのか？」

「いや、知らん」

正木があつさりと答えた。いい考えなのはいいが、何を根拠にそんなこと思いついたのか、カズミには全く解からなかった。

「どっから出たんだ？その考えは？」

カズミが訝しげな表情で訊いた。

正木にはすでに見当がついていた。武田組の事は調べ尽くしてあったからだ。つまり、武田組の財政から内部構造、兵隊の数まで、

カズミよりも詳しく知っているのだ。今、武田組は、京都進出でかなり財政的に圧迫されている。そこで、大阪の武器庫を襲って、それを売って金を得ようという魂胆だろうと考えたのだ。

「おおかた、相沢国際貿易企業の武器庫でも襲おうとしたんだろ？考えれば解かる」

カズミが鼻で笑った。カズミはこの正木という男にはかなわないと思った。見た目はひょうひょうとした不真面目な男だが中身はまるで違った。見た目よりも遥かに厄介な男のようだ。もちろん、彼を敵に回した者の視点から見たらだが。

「ま、そんなとこだ」

「明日俺たちは、相沢賢治を逮捕する。容疑は武器密輸及び密売だ。こんな時代でも、法律では銃の所持は禁止だからな。ま、この時代にバカ正直にそんなこと守っていたら、街で犬つころのように、殺されちまうが、な」

「自分の身は自分で守れか。今の御時世にぴったりの教訓だな」

「そうだな」

二人は互いに顔を突き出してくすくすと笑い始めた。かなり酔いが回ってきているようだった。特にカズミのほうが。

無理もない、スコッチのロックを先程のバーで四杯、この店でビールを三杯にバーボンを今飲んでいいる。これだけ飲んで酔わないほうが不思議である。

正木が笑いを止めて、素に強制的にもどした。カズミはまだ肩を震わせて笑っている。

「この前、相沢の社員を銃刀法違反で逮捕したんだ。ま、でも、そいつが殺されそうなところを偶然通りかかって助けた形だったがな。そいつをだしに、相沢を逮捕するんだ」

「俺は、どうしたらいい？」

「そうだな、女のどこでも行ったらどうだ？」

正木が皮肉っぽく言った。カズミはそれに対して「そうだな」と笑って答えた。嫌味も判断できない程酔っていて、カズミの子供の

部分が剥き出しになっていた。

いつも目を鋭くして睨むような顔をしているカズミだが、笑うと女の子のようにかわいかった。

カズミが相当秋月リエに惚れ込んでいるのだなと正木は直感した。三年前の事件の二の舞にならないようにと祈りながら、子供のように笑っているカズミを眺めていた。

ふと、時計を見ると、もうすでに朝の四時を回っていた。正木は今日もとうとう一睡もできなかった。これからまたハードな仕事が続いている。だが、なぜか気持ちはずれていて、昔からそうだった。正木はカズミと知り合ってから、彼といると気持ちが晴れやかになってくるのを感じていた。それはカズミの内心の、決して、心を許した者にしか見せないやさしさ、純真さなどが心を洗ってくれるのだろうと思っていた。

（お前にこんな仕事をさせて、悪いな……。だが、これもこの腐った国の未来のためなんだ。解かってくれ、カズミ……）

## 第四話 残酷な空

### 第四話 残酷な空

西暦二〇三二年 十月三十一日

カーテンもかかってない窓から、眩しい陽射しが入ってきていた。今日は、雲一つない、快晴とはこのことだと言わんばかりの天気だった。

だが人は時にこんな快晴にも、文句をつけたくなるときがある。今のカズミがそれである。朝起きてからかなり機嫌が悪い。その理由は、至極簡潔明朗だ。ただ単に二日酔いになって、頭が痛いし吐き気が止まらなかったからだ。

煙草をくわえて、ソファにだらしく座りながら頭痛と、胃のムカツキを必死に忘れようと、その素晴らしい快晴を呆然と眺めていた。もうすでに十一時を回っているのに、顔も洗わず、歯も磨かず、テレビもつけず、新聞も取りに行かずにずっとそうしていた。

こんな時ほど、外界の人間は容赦ない。携帯の着信音が頭をガンガン打ち鳴らす。悪いことにその携帯は、彼の今座っているソファの前のテーブルの上においてあった。見ないことにしておけば出なくてもよかったのかもしれないが、生憎、彼はそのディスプレイを見てしまっていた。最悪なことに相手は山県だった。これは出ないわけにはいかない。

カズミはやつとのこととで身を乗り出して、右手で重い頭を押さえながら携帯を取り、誰が聞いても不機嫌純度百パーセントだと解かるような、どうしようもないやる気のないくぐもった声で電話に出た。

「はあい・・・」

「カズミ、まずいいことになった。相沢のビルが警察に検挙された！  
！」

電話の相手の山県は、かなり焦った様子だった。

この電話の二時間前。

大阪湾には物々しいパトカーのサイレンの音が、波の音に混じって港に響き渡っていた。

相沢国際貿易株式会社のビル入り口付近の植込みに、ジュラルミンの盾を擁した特殊機動隊が、隠れるように身を屈めて、所狭しとひしめき合っていた。そのビル入り口の前には、トレンチコートを着た男が一人立っていた。今回の全指揮を取る正木晃一刑事である。正木は無線になにやら呟くと、ビルの中に入っていた。

エントランスホールでは、社員兼構成員が数人、受付カウンターのおしゃべりをしていた。正木が咳払いをすると構成員の一人が、眉間にしわを寄せて、正木のほうに向かってきた。

目の前にいる、よく見ると顔中傷だらけの男は正木を上から下までたつぷり舐めるように睨みつけた後ようやく口を開いた。

「よお、にーちゃん、何の用じゃ？」

正木はトレンチコートの内ポケットに手を突っ込んだ。その行動に、目の前にいた男が拳銃を出すのではないかと思つてあどずさつた。

カウンターの所にいた構成員たちも、おしゃべりを止めて、スーツの内ポケットに手を入れた。トレンチコートを着た正木が拳銃を出したら、すぐに拳銃を取り出せるように準備しているのだ。

だが、正木が見せたものは黒い手帳だった。よく見ると金の文字で警視庁特課と書いてあり、その字の上に桜の紋様があつた。目の前の男はギョツとした。

「警察だ。武器密輸及び密売容疑でこのビルを検挙する」

その声と同時に、無数の特殊機動隊が突入してきた。「警察だ」のセリフが合図だったようだ。地響きのような足音が、エントランスホール中に広がる。

構成員たちは訳も解からないうちに、床に叩きつけられて取り押さえられていった。

「全員確保しました」

「よし」

正木は彼の足元で取り押さえられている、顔中傷だらけの男と視線を合わせるようにしゃがみこんだ。男はずっと正木を睨みつけている。

「おい、社長はどこだ？」

「知らねえよ！」

正木は腰のホルスターからM19コンバットマグナム6インチを抜き取って、銃口をその男の頬に押し付けた。男の傷だらけの顔からじわっと脂汗が滲んできた。

「もう一度訊く。社長はどこだ？」

「知らねえって言っただろうがよー!!」

男は強がって怒声を上げた。

正木は鼻から息を大きく抜いて立ち上がると拳銃のハンマーを下げた。

「仏の顔も三度までつてな。仏も三度で怒るんだよ！」

「……。」

「もう一度訊く。社長はどこにいるんだ？」

「し、知らねえよ」

「ふーん」

ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！

正木は男の頭すれすれの所を狙って、六発全弾その付近にぶち込んだ。マグナム独特の轟音が、フロア中に響き渡った。

男は悲鳴を上げて震え上がった。まさか撃つとは思わなかったのだろう。余りの恐怖に気絶しそうになったくらいだ。

「さっ、社長はどこかな？」

正木はリボルバーのシリンダーに弾を一発一発込めながら、この状況では不気味な、満面の笑みを浮かべて、その男に、子供に接するようにやさしく尋ねた。男は震えながら、人差し指で上を指した。

「どうも」



笑顔でそう言うと正木は男の脇腹に一発おもいつき蹴りを入れてエレベーターに向かった。骨の折れる鈍い音が耳に届き、男は口から泡を噴いてピクリとも動かなくなってしまった。

正木の後にはM16を持った二人の特殊機動隊員が付いて行った。

正木たち三人は、エレベーターに乗って、相沢のいる最上階に向かった。

最上階の天井から側面の壁まで全面防弾ガラス張りの社長室。夜にはプラネタリウムになり社長の女たちが大喜びするその部屋は、ビルのフロア一個分の広さがあり、二十階からのエレベーターが直通している。そのため一階から行くなら、途中で乗り換えなければならない。

その部屋にいる社長相沢賢治は、眉間に拳銃の銃口を押し付けられていた。部屋のあちこちには、もうすでに肉の塊と化した無数の死体が転がっていた。

その死体の中には、鋭い刃物で斬った跡のあるものもあった。

側面の窓ガラスや白いじゅうたんには飛び散った血がこびりついている。

一部の天井のガラスは砕かれていた。どうやら、この無惨な殺戮を繰り広げた犯人はそこから侵入したようだ。

相沢は社長専用の机の椅子に座らされていた。彼のズボンの股間には今さっきできた大きなシミがあった。椅子の下のじゅうたんは黄色く湿っている。彼は余りの恐怖に失禁したのだ。

その相沢に銃を突きつけているのは、お世辞にも芳しいとは言えない臭いに眉をひそめている荒城国光だった。当然彼がいるということ、兄の吉光もいる。

吉光は、机の向かいに設置してあるソファにどかと深く腰をおろして、血に染まった刀を布で拭いていた。

喧騒の後のなんとも言えない静けさが、このフロア一帯に漂っている。

この重く暗い沈黙を破ったのは、この空気に耐えられなくなった社長相沢の声だった。

「な、何が望みだ？」

震える声で、吉光に問い掛ける。吉光は全く動かずソファに座ったまま感情のこもらない声音で答えた。

「アメリカドルの原版」

「・・・」

「もう、今となっては、知っているのはお前だけだ。知ってるんだろ？」

「知らん・・・。知っていても、組織を裏切ったお前には教えん」

その言葉に、目の前で銃口を押し付けている国光が、銃のハンマーを力チリと静かに下ろした。その行動に相沢は、手を小さく上げて殺さないでくれと態度で訴えかけた。組織にいた相沢だから、彼らの恐さを百も承知だ。彼らは、ハツタリではなく本気でやる人間だと。

吉光がソファから腰を上げた。相沢は「ひい」と裏返った小さな悲鳴をあげた。相沢の瞳が恐怖で揺れだし、額には脂汗が滲んでいる。

吉光はゆつくりと、確実に相沢の方へ歩み寄ってきた。

醜く太った体は、威厳を出すには絶好かも知れないが、こういう非常時にはかなり使えないということが今わかった気がした。重い腰をゆつくり上げて、手をかざして後ろにあとずさっていく。

「ま、ま、待ってくれ！殺さないでくれ！！頼む・・・殺さないで・・・」

相沢の目は涙目になっていった。泣きそうで、うまく言葉がつかからない。

「俺たちもここから早く出たいんだよ。警察がすぐそこまで来てるし、それに、ここは臭せえしな。早く教えろ」

吉光の冗談なのかそれとも本気なのかわからない言動に国光がぷつと吹き出した。

吉光は相沢の胸倉を掴んで、その細い腕のどこにそんな力があるのかと思わせるほど、相沢の太った体を高々と片手で持ち上げている。つた。

刀の切っ先を顎に押し付ける。相沢の体が宙に浮いた状態でがたがた震えだす。

「相沢、原版の在りかを教えろ」

「わ、わかった。教える。だから、殺さないで・・・」

死の淵に立たされた相沢が、懇願するような声と涙目でそう訴えかけた。

目元に不気味な笑みを浮かべた吉光が乱暴にその巨体を床に叩きつけた。

どさつと腰から一気に転落した相沢は、腰を強打して動けなくなった。そこに刀の切っ先が突きつけられる。

「原版は何処だ・・・」

場所を言おうとした瞬間、彼らの正面にあるエレベーターが動く音が聞こえた。正木たち秘密特殊警察がすぐそこまで迫っていた。

国光は手に持っていた拳銃を床に捨て、肩に下げていたUZIをエレベーターを狙って構えた。

吉光は相沢を乱暴に荷物のように抱えて、机の下にしゃがみこんだ。

チンという音とともに、国光の構えたUZIが火を噴いた。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ

放たれた無数の銃弾が、エレベーターの扉に穴をあけた。

銃弾は扉を貫通して、中にいた特殊機動隊員の体を蜂の巣にした。防弾チョッキをも貫通しており、この銃弾を放った銃が改造されているのを物語っていた。

エレベーター内の壁に血が吹き飛び、弾をくらった特殊機動隊員は声もなく膝から崩れ落ちようとしていた。正木ともう一人の特殊機動隊員は、左右に分かれて壁の側面に必死に張り付いた。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ

銃声とほぼ同時に扉が開き、今にも前のめりに倒れそうな血塗れの特務機動隊員が、弾かれるように撥ね返った。エレベーター内の壁に無数の穴があき、服の切れ端や血が飛び交う。

彼の体はもはや原形を留めていない。彼はそのまま膝を折って仰向けに倒れて、ピクリとも動かなくなった。

銃声が止むと、今度は正木たちが反撃にでた。銃口だけを出して、そこら中に乱射した。確認していないのでどこに当たっているかわからない。だが、彼らにはこれしかできなかった。何人いるかわからないのに顔を出すわけにはいかない。こういう場合は耳で判断するしかない。

ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！ドギョーン！  
ババババババババババババババババババババババババババババ

彼らは弾を使い切るまで撃ちまくった。

弾を使い切ると、とたんに静かになって、薬莢が床で撥ねる音だけが変に強調された感じで不気味に耳に届いていた。

訝しく思った正木がリボルバーに弾を込めながら顔を少し出した。誰もいない。床に目をやると、死体が転がっていた。だが、自分たちがやったものではないとすぐにわかった。床に転がっている死体には、明らかに斬られた跡があったからだ。

（間違いない。奴だ）

正木は顔を強張らせて、エレベーターから一步を踏み出した。その行動に気づいた特務機動隊員が止めようとしたが、その時にはもうすでに遅かった。かなり前方まで出ていて、手が届かなかった。

「荒城！！いるんだろ！！出てこい！！！」

正木が部屋を見回しながら怒声を上げた。すると、彼の目の前の机の下から、相沢の首元に刀の刃を押し付けている荒城吉光とその隣りでUZIを構えている国光が出てきた。

正木は持っていた拳銃を両手で構え直した。吉光と国光は不気味な笑みを浮かべている。

「とんだ邪魔が入ったな」

吉光が左手にデザートイーグル・50AEを構えて口を開いた。  
その声音は変に落ち着いていて、どこか不気味な感じがするものだった。

「相沢を放せ！そいつには訊きたいことが山ほどある！」

「それは無理だ」

「いいから、よこせ！」

「こいつに余計なことを話されては、俺たちの商売、上がったりな  
んでな」

「・・・！！」

その言葉とともにヘリの音が聞こえてきて、正木の大きく見開かれた目が驚愕を表した。機関砲を前面に取り付けたヘリが荒城たちの後ろの窓越しに現れたのだ。

「お前の負けだ！正木刑事！」

吉光がそう言い放つと、相沢の首元に押し付けていた刀をぐつと横に引いた。スパツと切れた切り口から血が噴き出し、正木の視界を塞いだ。正木は目を覆ってあとずさった。

「うぐっ・・・」

ドギョーン！

「ごはっ！」

吉光の放った銃弾が、正木の腹部に当たって、正木は口から血を吐いて床に仰向けに倒れた。そのままピクリとも動かない。

吉光は反動を全く感じていないのか、すぐさま机の下に潜り込んだ。国光もそれに倣う。

普通の人間なら片手でしかも左手で五十口径を撃ったら肩が外れるじゃすまない。それなのに吉光は平然としているのだ。

荒城兄弟が隠れると同時に、ヘリの機関砲が火を噴いた。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

放たれたもの凄いや威力の無数の銃弾が、一気にガラスを三枚ほど砕き、机に手を付いて血の滴る首を一生懸命押さえている相沢の頭を吹き飛ばし、壁とエレベーターの扉に無数の穴をあけ、じゅうた

んの上に転がっている死体を跳ね飛ばし、ソファの綿を散らし、エレベーターの 中にいる特殊機動隊員をミンチにした。

部屋の中はもはや血の海と化していた。白いじゅうたんが深紅に染め変わるほどだった。

機関砲の耳を劈く連続音がやむと吉光と国光は机の下から出てきて、砕いた窓のサンに横付けしているへりに乗り込んでいく。

「じゃあな、刑事さん。おやすみ」

吉光は振り返り際にそう言い残して、へりは西に向かって猛スピードで飛び去っていった。

一階にまで響いていたこの尋常じゃない連続音を聞いて、下にいた救護班や特殊機動隊の面々が、部屋の入り口エレベーターから左端の壁際に位置する緊急用のエレベーターに乗って駆けつけたのは荒城たちのへりが飛び去って三分ほど経過した頃だった。

この部屋の異常な様子に戸惑いと恐怖を覚えた彼らの中には、その場に今朝食べたものを吐く者もいたくらいだ。慣れているはずの彼らが吐くほど凄まじい状態なのだ。まずは鼻にくる。血の臭いがすでに生臭い臭いに変わっている。それにそこら辺に転がっている身元確認不可能なほどにぐしゃぐしゃの死体。腸をはみ出させて横たわっているのや脳髓をぶちまけて机に倒れ込んでいるものもある。いくら慣れているとはいえ、これは酷すぎる。残酷を通り越して、グロテスクと表現したほうが合っているかも知れない程だ。

M16を慎重に構えた特殊機動隊を先頭に彼らは一団となって、硝煙で見通しの悪い部屋に恐る恐る足を踏み入れる。じゃりじゃりと細かいガラス片が靴に踏まれてじゅうたんの中で鳴る。

部屋の中央に差し掛かったとき彼らは我が目を疑った。足元に、目元に血をべったりつけて、唇から一筋の血を流した正木が横たわっていたからだ。

## 第四話 残酷な空続き

### 第四話 残酷な空 続き

西暦二〇三二年 十月三十一日 午後

京都武田組支部の会議室。秘密保持のため窓がなく厚い鉄筋コンクリートの壁に囲まれていて、お世辞にも居心地がいいとは言えない。中央にある丸い円卓には、山県をはじめつい最近まで京極会の人間だった関西方面の幹部らが顔を連ねていた。その中にカズミの姿もあった。

今回の緊急会議は、武田組の行く末を握る大事な会議だった。財政的に危機に瀕してきている武田組が、大阪攻略に失敗し、今度は何処を奪って財源にするかが課題となっていた。東京の本部でもすでに同じ事が議題となっており、今回のこの事態に対する評議員たちの顰蹙を武田成明が一身に受けていた。

忠誠と仁義を重んじるヤクザ社会では、自分たちの頭ばかりが叩かれているのは我慢できない。いや、むしろ仇を取りたいという気持ちが大きくなっていく。こうなると、彼らの心の中では評議員を見返してやろうという気持ちが強くなっていった。

だが、カズミには全く興味の無い話だった。この組がどうなるうが関係ない。むしろ潰そうとしているカズミにとってこの会議は、かなりの時間と労力の無駄と言えた。三時間ほどここにこうして座っているが、何の話をしていたのか全く覚えていなかった。ただ、頭が痛くて吐き気がするのを抑えるために、備え付けの麦茶をひたすら飲み続けているだけだった。

「とりあえず、今回の計画を邪魔したのは、他でもない警察の人間だ」

山県が話をまとめに入ったようだ。今の今まで一時間たつぷりごちゃごちゃ文句ばかり言っていた幹部たちが、山県のこの一声でと

たんに静かになった。結局、ここの人間は自分たちでは何もできないのだ。

この京都での全権を武田成明がこの若き山県に任せているのは、こうした文句をたれることしかできない頼り無い日和見主義たちをまとめる力を持っているからだ。この学歴の關係ないヤクザ社会では珍しい大学卒というところもその要因ではある。しかもその大学も東大である。

「そいつに我々の恐さを知らしめる」

その言葉と同時に、天上からゆっくり映写機が下りてきて、部屋の明かりが消えた。映写機から一筋の光が出てきて白い壁を照らす。カシャという音とともに一人の男の写真が映し出された。その写真を見てカズミは驚いた。そこには正木晃一の顔が映し出されていたのだ。

「この男には最高のもてなしをしてやる」

目を開けると見慣れない天井が眼前に広がった。開けっ放しの窓からは秋の冷たい風が白いカーテンを揺らしていた。周りを見るとどうやらそこが病院の一室であるということが、一面の白い壁に、ベッドの傍らに置かれている安っぽいスチール製の棚で分かった。

正木は目の前で掌を閉じたり開いたりして、とりあえず生きていることを実感した。だが体を起こそうとしても腹部に走る激痛ですぐに頭を枕に静めてしまう。

トントン

ノックの音に扉の方に首を動かすと、初老の男が顔を出していた。いかにも好々爺といった感じの痩せていて背の低い男だ。彼の上司の佐々木警部である。とても警察の人間とは思えない風貌だ。手には果物の入ったバスケットをぶら下げていた。

「どうだ、具合の方は？」

佐々木警部は果物のバスケットを棚の上に置いて、備え付けの椅子におもむろに座りながら正木に尋ねた。



「いい気分ではないのは確かだな」

正木は気丈に憎まれ口を叩いて見せた。それに対し警部は鼻で笑う程度だった。

普通の上司ならかなり怒っているはずだ。ましてや縦の関係が厳しい警察の機構ならなおさらなことだ。だが彼らの場合はそれ以上のつながりがあるからこのようなことが許されるのだ。この佐々木警部は正木にとっての育ての親であるからだ。

二十年前、創建電気という大手企業本社ビルでビルジャック事件が起きた。そのビルジャックの犯人は十代の少年たちであり、麻薬をやっていた様で犯行はかなり狂気に満ちていた。彼らは警察に犯行声明も要求も出さず、ビル内で殺人ゲームを楽しんでいた。彼ら犯人たちは、全員殺した後ビルの外で警戒態勢をとっていた警察の前に自首してきた。彼らの証言によると、薬が切れて我に返ったとき、この状況が恐くなつて自首したという。当然彼らは無期懲役で、今でも刑務所にて服役中である。

その電気会社で働いていたのが、正木の両親だった。そしてその事件を担当したのが、佐々木警部だった。この事件の被害者は、百名近くに上り、日本中が言い知れぬ悲しみと、壊れやすくキレやすい少年たちとドラッグの効果の恐怖に包まれた。

この事件の後の合同葬儀の時、佐々木はぼつんと一人で悲しそうに立ち尽くしている、一人の子供を見かけた。この子供が正木晃一である。この子が両親を亡くしたということを知ると、佐々木は躊躇なくこの三歳の子供を引き取ったのだった。

「まあ、防弾チョッキを二重に着てたとはいえ、五十口径の弾をくらってるんだ。しばらく安静にしてな・・・と言いたところだが、そうも言つてられなくなつたぜ」

「どういうことだ？」

正木が訝しげな表情を浮かべた。佐々木警部は鼻を思いつきり啜ると大きく息を抜いて続けた。

「俺の抱えてる潜入捜査官の報告によると、武田組がお前に報復を

仕掛けるらしい。おそらく、今回の大阪の件の腹いせだろう。これ以上邪魔されたくないんだろうよ」

「チッ、クソッ・・・」

「お前の娘とかみさんは俺に任せな。俺がしっかり守ってやる」

「すまない」

「だが、自分の身は自分で守れ。俺もそこまでは面倒見切れんな」

「・・・」

その言葉に正木は目を天井に向けて大きく溜め息をついた。

晃一はかなり不安になっっているようだ。佐々木は煙草を箱からつまみ出しながらそう感じていた。いつも憎まれ口ばかり叩いている生意気な息子が、今日はなんだか弱々しく感じた。いつもの息子はかなり無理をしているということはわかっていた。だがこんな不安がった息子の姿は初めてだった。いついかなるときでも正木は堂々と気丈に振舞っていたからだ。

立ち込める煙草の紫煙の合間から正木の横顔が覗いている。

いつも見せることのない不安に歪んだ顔がそこにあった。

佐々木はフンツと鼻で笑うと煙草を床に投げ捨てて足で踏み蹴った。

「憶えてるか？まだお前が小さい頃、よく近所の悪ガキにいじめられていたっけな。それで俺に泣き付いてきてよ」

佐々木が切り出した、突拍子もない話に正木が訝しげな表情を浮かべて顔を向けた。

「何の話だ」

「その時、俺がいつも言っていた言葉・・・」

「テメエのケツは、テメエで拭え」

二人同時にこの言葉が口からついて出た。そして二人は顔を見合わせて大笑いした。こんな汚い言葉を子供に教えていた親と、それを狂信的に信じてこれまでやってきた晃一。今考えるとおかしくて仕方なかった。

「まあ、自分の始末は自分でつけろってことだ。後は自分で何とかしな。心配すんな。今までもそれで乗り越えてきたんだろ？この言葉教えた俺に感謝しろよ」

「随分な親だな」

「今始まったことじゃねえだろ」

「それもそうだ」

「さて、お前の元気な顔も見れたところで、そろそろ帰るわ」

佐々木はそう言うと、腕に力を入れてゆっくりと体を持ち上げて立ち上がり、ドアの方に向いた。

「果物、早く食っちまえよ。腐るから」

そう言い残すと、ドアを開けて立ち去った。そのドアが閉まるまでの一連の動作を正木は黙って見つめていた。これが最後になるかも知れないと思ったからだ。

棚の上に置いてあるバスケットを見ると、その方に黒い何かが覗いていた。正木は激痛の走る体を、必死に起こしてバスケットを手にとった。桃やバナナ、メロンの間に挟まれて、自動拳銃シグザウエルP228が夕日を反射して鈍い光を放っていた。

なかなか素直に見せることがない親父のやさしさがそこに形となって示されていた。バスケットの中の拳銃のグリップを握ると目頭が熱くなってくるのを覚えた。

バスケットの上にかかっているフィルムに涙の粒が次々と落ちて滑っていった。

「この男の名は、正木晃一。警視庁のエリート刑事で、諜報部の調べによると、秘密特殊警察に所属しているかなり厄介な男だ」

山県は角をホッチキスで止めてある資料に目を通しながら、出席している全員の顔を見回して説明した。そして最後にカズミの顔をじつと見た。

カズミは悪寒を感じた。どうやら正木との関係がばれてしまったようだと言った痛感したからだ。最悪の場合この場で殺される危険性もある

る。カズミは恐怖から来る手の震えを必死に抑えようと、両の腕をぎゅっと握ってうずくまった。こんなことは二年前のあの日以来のことだった。

山県は目を机に落としているカズミの顔をじつと見ながら、パンパンと手を叩いた。その後すぐにドアが開いて一人の初老の男が会議室に足を踏み入れた。

「この男は私の直属の諜報部員だ。こいつに、ここにいる同じ諜報部員のカズミ・ランカスター・サイトウの動向を探ってもらった。そして興味深い結果が返ってきたよ」

山県はカズミを見つめたままだった。その表情には一切の変化も見られない。全く無表情なのだ。これがカズミの鼓動をより高めていった。自分はどうなってしまうのかわからない恐怖に全身が包まれていく。

「彼はどうやら、この正木刑事とつながりを持っているらしい。そうだろ？カズミ？」

「……」

カズミは返す言葉が出なかった。むしろそれで正解だった。もしここで余計なことを言ったら殺されかねないからだ。

山県はそんなカズミをただただ無表情で見つめているだけだった。だが、周りの幹部たちの目は厳しいものがあつた。全員が全員眉間にしわを寄せ、口を半開きにしてカズミを睨みつけているのだ。カズミは背中が冷たい汗でじわっと湿るのを感じた。なんとも言えない嫌な感じた。

「まだ話に続きがある。彼が我々を裏切るわけがない。毎日酒浸りだったチンピラをここまでしてやった恩を忘れているはずがない」

「……」

「そこで私は考えた。もしかしたら、カズミは先の先をついて、正木刑事に近づき彼を殺そうと画策していたのかも知れないと」

山県は初めからそうではないことを知っていながら、わざとこのようなことを口に並べた。ただ単にカズミをここで処分するのはも

つたいない。それならば正木を殺させて、それからカズミをその場で始末すればいいと考えたからだ。

元々山県は、カズミがいつかは自分たちの脅威になることを予感していた。だからはじめから、彼の身边に諜報部員を張り巡らせていたのだ。

「カズミ。正木晃一は今、大阪市内のある病院にいる。今回の件でどうやら撃たれたようだ。そして今は身動きを取るのが困難な状態だそうだ。これなら簡単だろう？彼を殺してくれるな？」

カズミに険しい視線が集中する。ここでどう回答するかで、カズミの命運が分かれてくる。ここで死ぬか、それとも正木を殺しに行くか。今のカズミにはこの二つの選択肢しか用意されていなかった。カズミは生唾をこくりと飲んだ。鳥肌が全身を覆い、背中に悪寒が走る。だが迷ってはもらえない。少しでも生きていられる方を選んで、一縷の望みに賭けようと決心を固めた。

唇が微かに開き、カズミのちぢみ上がって出口の狭くなった喉から声が漏れる。

「……ええ、引き受けます……」

掠れた弱々しいこの声を聞いた山県の唇が少し歪んだのを、この時カズミは見落とさなかった。

## 第五話 野狼

### 第五話 野狼

十月三十一日 夜

夕日がビルの合間に入り、埃っぽい一筋の光を差していた。辺りは暗くなりつつあり、夜の闇がもうそこまで迫っていた。

街の一角にひっそりと存在する小さな教会。

ステンドグラスから沈みかけた光の濃い夕日が差し込んで、祭壇は神秘的な光に包まれていた。その中央にある聖母マリア像はその光を浴びて、より神々しい姿でそこにあった。

そのマリア像の前に身を屈め、目を瞑って一心に祈りを捧げている一人の女性の姿があった。赤みのかかった長い髪が、合掌した手に垂れかかっている。

何処からともなく響くパイプオルガンの調べに賛美歌が、彼女の姿をより美しい信仰者として演出しているようだった。

京都から大阪までは電車で一時間ほどで着く。“正木刑事暗殺計画”は彼が満足に動けない内にということで、すぐに実行に移された。すでに山県は会議の間に他の者を使って準備を進めていたのだ。大阪駅についたカズミは、二人の男に連れられて車のある所まで誘導されていた。この電車の中での一時間、カズミはこの二人の男にずっと監視されていて、自由に動くことができなかった。そのため、今回のこの経緯を正木に連絡することもできなかったのだ。車は、黒いセドリック。前後に二台停まっていた。前列の車の後部座席のドアが開くと、そこには山県の姿があった。細い葉巻をくわえ腕組みをし、カズミの方には一切首を動かさずに口を開いた。開かれた口から言葉と同時に濃く白い煙がゆらゆらと立ち込める。『いいから早く乗れ。今回は俺が見届けてやる』

その言葉の後すぐに、カズミは乱暴に車に押し込められた。そしてその隣に二人の男のうちの一人が拳銃をカズミに突きつけながら座って乱暴に ドアを閉めた。もう一人の男は後ろに止めてあった車に乗り込んだ。

二台のセドリックは正木のいる病院に向けて発進した。すでに陽は落ちていて、うつすらと月が顔を出していた。

教会の祭壇はもうすでに暗くなっていて、代わりに一筋の月明かりが天井の窓からスポットライトのように彼女を照らしていた。黄色いスポットライトの下で、彼女はこの一時間程ずっと、マリア像の前に身を屈めて祈りを捧げていたのだ。パイプオルガンの調べと賛美歌はもうすでに止んでいた。それでも彼女はずっとこうして祈りを捧げているのだ。

愛する彼とずっと一緒に居られる道を示して下さい。その道は茨の道でもいい。彼といつまでもこのまま一緒に居られるなら、どんなうなつても構わない。たとえ、この世界がどうなるうとも。お願いします。聖母マリア様。罪深い私にどうか御加護を

彼女はずっとこの言葉を小さな声で繰り返し口にしていた。

彼女の頬に一筋の涙の跡が、長い髪の間から覗いていた。その姿は月明かりを浴び、まるで聖母マリアのように愛に満ちた美しい女神のようだった。

病院に着いた頃には面会時間ぎりぎりの時間帯だった。待合室で待つ人の数は疎らで、暗殺を実行するには絶好の時間帯だった。

車から降りたカズミの後ろには、二人の黒いスーツ姿の男が睨みを利かせて付いて来ていた。

カズミはそのまま押されるように、三階の正木のいる病室へ向かう恰好となった。

その同時期、山県は病院の向かいの高層ビルの屋上に移動してい

た。彼は暗視装置付き双眼鏡で、三階の正木の病室を覗いていた。

緑色で表示されるその病室の内部にベッドに横たわる正木だろう人影があった。ここから見ている限り、正木は眠っているようだ。

その山県の足元に、伏射の姿勢でナイトビジョンスコープとサイレンサー付きのPSG-1で部屋の中を覗いている、武田組特殊部隊の狙撃手の姿があった。もしカズミが裏切るかしくじった場合即座に彼ら进行处理できるようにと山県が用意したものだ。その他に山県の指示一つで、病院内に突入できる人員も病院入り口前に待機させてあった。この好機を逃す手はなかった。カズミと正木を同時に始末できる二度とないチャンスである。

山県はカズミを諜報部に入れた時から恐れていた。彼はとてつもなく強いからだ。

カズミは傭兵時代に単独で、敵小隊のキャンプを襲いそして十分ほどで全滅させたという経歴を持っているほどだ。その他にも、ほとんど単独で複数を相手にする作戦ばかりを行っていた。要するに彼一人で百人力といったところなのだ。一年前のキャバレー襲撃事件もそのいい例である。

狼を野に放したら厄介だ。今度はこっちが報復を受け、全滅させられかねない。山県はこれを恐れていたのだ。このカズミ一人で、今までの計画が水の泡になる危険性だつて出てくる。下手したら組を壊滅にまで持ち込まれてしまう。それだけは絶対にあつてはならない。山県はなんとしてでも、カズミをここで始末しようとしていた。

三階の正木の病室は一番奥の角にあつた。完全な個室である。カズミは音がしないように慎重にドアを引いた。中は殺風景で、スチール製の棚に果物の入ったバスケットが置かれている。上にかかっていたのだろうフィルムが床に落ちていた。

カズミはつかつかと正木の眠るベッドに近づき、脇の所に着けているホルスターから、サイレンサー付きソーコムピストルを抜いて



スライドを引いた。弾が薬室に装填される音が静かな病室に響く。カズミの後ろには相変わらず、睨みを利かせた男が二人立っていた。この二人もすでに腰のホルスターからグロック１７を抜いていた。カズミが仕事を終えるか、もしくは失敗した場合即座に撃てるように。

向かいのビルで伏射の姿勢になってスコープを覗いている狙撃手。緑色の映像で映し出される病室に人が三人入って来たのが映し出された。その内の一人がベッドに近づいて行った。狙撃手はおそらくカズミであろうと判断し、その標的にポインターを合わせた。

目に見えているスコープの映像には距離とポインターが表示される。距離はおよそ三百メートル。決して遠くはない。これなら外さないという自信があった。

その時、狙撃手は目を見張った。突然カズミだろう人物がベッドを蹴り上げたからだ。すぐ側で、双眼鏡で見ていた山県も驚きの余り声を上げた。

カズミはベッドを蹴り上げた。この突然の行動に後ろにいた二人の男は呆気にとられていた。ベッドは跳ね上がり、中で眠っていた正木は窓際に吹っ飛んでいった。布団の下に隠していたのだろうシグザウエルP228が床を滑っていく。

正木はこの突然の出来事に声一つ上げることができなかった。

カズミはベッドを蹴り上げた瞬間、体を反転させて二人の男に二発ずつソーコムを発砲した。サイレンサーのこもった銃声と共に二人の男はその場に倒れた。

窓の下の壁に頭を強打した正木は、頭を抱えてその場で転がり回っていた。

双眼鏡で事の全てを見ていた山県が突然狂った様な声を上げて狙撃手に撃てと命じた。狙撃手は慌てて標的にポインターを合わせよ

うとした。しかし、すでにカズミの姿はそこになかった。どうやら壁際に隠れたらしかった。

「ダメです。標的を見失いました」

狙撃手は山県に報告した。だが、これが山県の機嫌をかなり損ねた。この報告を受けた直後、山県はこの狙撃手に自動拳銃を向けて、無言で頭に三発ほどぶち込んだ。狙撃手は頭から血を噴出してピクリとも動かなくなり、伏射の姿勢のまま絶命した。

山県は狙撃手の死体を冷酷な目で見つめながら、トランシーバーを口元に持っていくと突入班に命令を伝えた。

「すぐに突入しろ！なんとしても、あの二人の首を取ってこい！」  
トランシーバーをコンクリートの地面に投げつけ、舌打ちをした山県は、カズミをもっと早くに始末しておくべきだったと後悔していた。このぶつけようのない怒りを、山県はその傍らに転がっている遺体に何発も蹴りを入れるという形で発散しようとした。

約束の時間になった。幻想的な月明かりのみの教会に、外界の電灯の光が入り、ロングコートを着て、銀の長髪を後ろで束ねている男が入って来た。靴音と共に刀の鏗鳴りが聞こえる。男は、時間きつちに現れた。

男は祈りを捧げている彼女に近づくと、その傍らに並んでいるベンチタイプの椅子に腰掛けた。内ポケットからウルサーP99を取り出し、彼女の前に放り投げた。ウルサーはカチャンという大きな金属音を立てて、祭壇の方へと滑っていった。静かな教会にその音はエコーがかかった様に響き渡った。

だが、彼女は動じず、祈りを捧げ続けた。合掌した手に力がこもっているのが、傍から見てもわかるほど腕が震えていた。男はその様子をじつと見ながら、煙草を取り出すとオイルライターで火を点けた。蓋の開くカチンという音と、石のすれるシュボツという音がいやに響く。

彼は紫煙を長く吐き出しながら、聖母マリアの方に向き直って言

葉を発した。冷徹な少し低めの声が、エコーがかかった様に教会内に響く。

「それで奴を殺せ。いい加減、目障りだ」

その言葉に彼女は立ち上がって、男をキッと睨んだ。彼女の鋭い双眸に涙が溜まっている。男はくわえ煙草のまま彼女をじっと見つめた。

「情が移ったか。だが、お前の兄を殺したのはあいつだということを忘れてないだろう」

「でも・・・」

「お前は、兄の仇を取りたいと俺の所を訪ねて来た。そうだろう？」

男は彼女の言葉をかき消すように、少し早口で言葉を被せた。彼女の目に溜まっていた涙が、一筋の流れとなって頬をつたう。

「でも・・・、それでも・・・私は・・・」

「あの時、お前は確実に奴に近づいた。それは紛れもない事実だ。

お前は最初から奴を殺すために近づいた」

「・・・」

「あの瞬間から、お前は奴を殺すしか、道はないんだよ。簡単な話だ」

彼女の肩が小刻みに震えていた。大粒の涙の滴が、大理石の床に音を立ててはじける。男はそれを見て鼻で笑うと、刀を杖のようにして立ち上がり、煙草の紫煙をたなびかせながら扉の方に歩いていた。

扉の取っ手に手をかけたとき、突然後ろから叫び声にも似た彼女の声がした。

「仕方ないじゃない！あの時はああするしかなかったんだから！何か兄さんの面影を追いかけてなかったら、壊れてしまいそうだった！ただ、支えが欲しかったのよ！！」

「その支えが兄から、あいつになっただってわけか？」

「そうよ！！」

突然、彼女は祭壇の所に転がっていたワルサーを拾い上げて、扉

の所の男に向けて引き金を引いた。銃声が轟き、彼女の腕が反動で跳ね上がった。薬莢の転がる音が、銃声の後にむなしく響く。弾は発射されなかった。

「残念だな。そいつは空砲だ」

男は肩越しに後ろを向くと、口元だけで笑って見せた。彼女はそれを見て、気が狂った様にワルサーの引き金を引きまくった。複数の銃声が、教会内に響き渡る。

「あなたは最低よ!!」

男は扉を開けて外に足を踏み出したときに、マガジンを一つ後ろに放り投げた。鉄製のマガジンが、床でカチャンと音を立てて撥ねる。

「これが、実包だ。大事に使えよ」

ボタンと扉が閉まり、また教会内は静まり返った。彼女はそこに膝から泣き崩れた。

静かな教会に女の泣く声が響く。その様子を祭壇の赤い月の光を浴びた聖母マリアは、どこか悲しげなやさしい眼差しでじっと見守っていた。

壁にはり付いていたカズミは窓枠からそつと外の様子を見た。今まであった赤いレーザーポインターが消えている。どうやら狙撃手からの攻撃は免れたようだ。

カズミは足元に落ちている自動拳銃を手にとると、頭を抱えてしやがみこんでいる正木を引っ張り起こして、今のうちだと思い一目散に病室を抜けて廊下に飛び出した。その間正木はずるずると引っ張られる恰好になっていた。

「おい！俺はけが人なんだぞ！もっとやさしく扱えよ！」

カズミの手を振り解いて、正木が怒りを露わにした。無理もない。まず気持ちよく寝ているところに、突然ベッドごと跳ね飛ばされ、あまつさえ、頭まで強打したのだ。正木とて、まさかこんな形で手荒い見舞いを受けるなんて夢にも思っていなかった。

「文句を言つな！これが精一杯だ。もたもたしてたら、追っ手に殺されるぞ」

病院の一階は、入り口からすぐのところ以待合室がある。受付時間をとつくに過ぎているため患者の数は疎らだ。その奥に受付があり、夜勤の看護婦たちが事務仕事をしていた。

突然バンツという扉が乱暴に開けられる音がして、背広姿で自動拳銃を持った強面の男たちがどつと押しかけてきた。今まで静かだった病院が、急激に賑やかになる。病院内は患者と看護婦たちの悲鳴と強面の男たちの怒声が入り乱れた。

「なんですか！あなたたちは！？」

婦長らしき四十代後半の看護婦が、男たちの前に仁王立ちになって、こめかみに青筋立てて怒鳴り散らした。

バンツ

突然、男たちのうちの一人が婦長に向けて銃を発砲した。銃弾は婦長の眉間を撃ち抜き、婦長は眉間から血を噴出しながらその場に声も無く仰向けに倒れた。一階フロアにいる患者や看護婦たちは、右往左往して逃げ惑った。

「おらおら！！こうなりたくなかったら、さつさどこから失せる！！」

サングラスをかけた口髭を生やした男が、天井に弾を何発か発砲して怒鳴り散らした。突然の事に一階フロアはパニック状態になった。

突然の銃声に二人の口喧嘩がぴたりと止んだ。今まで病室の前で胸倉を掴み合つて、眉間に皺を寄せて怒鳴り合っていた二人が顔を見合わせた。

「まずい、追っ手が来やがった」カズミが言った。  
「どうする？」

カズミは周りを見回した。

廊下の突き当たりは、サンのない大きな窓になっている。取っ手がないところから、どうやら開かないようだ。反対側は階段が直結している。廊下は結構長くて広い。隣の病室の前には、急病人を運ぶ車輪付きの担架式ベッドが置いてある。

カズミは突然何かを思いついた様にぽんと手を打った。

「これを使って、その窓から外に飛び降りるぞ」

カズミが隣の病室の前に置かれている担架を指さした。正木が仰天して目を丸くした。

「お前、正気か！？ここは三階なんだぞ！むちゃだ！！」

「やらなきゃわかんないだろ！それに今から下に行つてたら、それこそ命がいくつあつても足りねえよ！つべこべ言わずに、早く乗れ！！」

「くつそおー！！死んだら化けて出てやる！！」

「そりゃ、お互い様だ」

正木を先端に乗せて、カズミは担架に手をついて全力で走って押して前に進めた。押された勢いで担架はどんどん加速していく。

後ろから無数の靴音が響いてきて、後ろを肩越しに見ると強面の男たちがここに上がってきた。

「野郎！逃がすな！撃て！撃てええええ！！！」

サングラスが叫んだとほぼ同時に無数の銃声が轟いた。

カズミは担架に飛び乗ると、後ろを向いて両手に持ったソーコムとシグを交互に連射して応戦した。銃声ともった銃声が交互に響く。

追つて来た男たちはカズミの銃撃に次々と倒れていった。だが、男たちの放つ銃弾は全然カズミたちを捉えることができない。いくら引き金を引くだけといつても、慣れていないと全く銃弾は当たらない。慣れという点でプロと素人の差が出るのだ。それに彼らは走りながら撃っている。かなりの慣れがなければ、走り撃ちで確実に仕留めるのは不可能に近い。

この時に武田組の特殊部隊を出しておけば確実に彼らを仕留めら

れたかも知れない。これが山県の詰めの甘いところでもあるが、彼自身に本当にカズミを殺す気があったのかどうかも大きな疑問点である。もし確実に仕留める気ならば、わざわざこんな手の込んだことはしないはずだ。

「おい！窓にぶつかるぞ！」

正木が肩越しにカズミの方を見て叫んだ。担架はかなりスピードが出ていて今にも窓に激突しそうになっていた。その声を聞いたカズミが前に向き直って窓に向けてソーコムとシグを連射した。自動小銃の様に弾が発射される。窓に無数の弾痕ができて蜘蛛の巣のようなひびが入った。強化ガラスにひびを入れることによって脆く割れやすくなったのだ。

「伏せろ！」

カズミは正木の頭を担架に押し付けるように押さえつけた。そしてカズミも正木に抱きつく様に頭を低くした。男たちは躍起になって拳銃を発砲しながら追いかけてきていた。

今日はやけに病院が賑やかだなパーティーか何かかかな。パンパンとクラッカーのような音も聞こえる。退院か新米の医師の着任式か何かやってるんだろ。そう思いながらも自分には関係ないと、左手にだらしなく持ったゴミ袋に火バサミで挟んだゴミを無造作に入れていく。

そろそろ閉業の時間だと思いつと上を見た初老の清掃員の目にもの凄い光景が飛び込んできた。突然三階の窓ガラスが割れ砕け、そこからガラス片に混じって担架が飛び出してきたのだ。清掃員は目を見張って口をあぐりと開けて担架の落ちる軌道を首で追った。

「なんてこった・・・」

驚愕の表情と共に清掃員の口を突いて出た。ここに勤めて三十年間、こんなことは一度としてなかった。病院はいつも静かで穏やか、喧騒が訪れるのは急患の搬入の時と長く入院していた患者の退院式のときだけだ。しかし、今日は人の人生でもまれなことではなかる

うか。突然担架が窓ガラスを割って出てきたんだ、超常現象といつても過言ではない。窓は強化ガラスでできているし、その前に担架が勝手に動く時点でおかしい。超常現象意外に思いつかない。超常現象を目撃した男。これはもしかしたら新聞に載って、ワイドショーのインタビューも受けて俺は有名になるんじゃないか。そう思い有頂天になりながらも一度三階の窓を見上げると、今度は背広を着た複数の男たちが拳銃をこっちに向けて立っていた。

「なんだありや・・・？」

清掃員がまたまた驚愕の表情を表して呟いたとき、拳銃を発砲してきた。銃声が轟き、それとほぼ同時に、複数の銃弾が彼の体を貫き、彼はもんどりうって仰向けに倒れた。彼のちよつとした、ささやかな幸せは終わった。新聞に載り、ワイドショーに出て有名になるという夢はここで違う形で叶うことになったが。

「チツ！」

三階にいたサングラスの男がサングラスを乱暴にはずして舌打ちをした。男の蛇の様に鋭い目が露わになる。男たちは決して清掃員を狙って撃ったわけではない。彼の後ろにあった担架を狙っていたのだ。

目を凝らして見てみると、担架にはすでに人影がない。窓枠から身を乗り出して周囲を見回してもカズミと正木の姿は見当たらない。どうやら見失ってしまったようだ。サングラスをしていた男の額に脂汗が滲んできた。彼の耳にはサイレンの音が届いていた。

二人はすでに病院の敷地の外に出て暗い路地に入っていた。そこには住宅街が広がっている。カズミは正木に肩を貸しながら、二人はゆっくりと歩き出していた。窓ガラスをぶち破ったせいで二人とも傷だらけだった。

さっきの事態はほとんど奇跡に等しかった。担架がアスファルトの地面に落ちたとき、反動で二人とも奥の茂みに跳ね飛ばされたのだ。もしもそこが同じようにアスファルトの地面だったら、もうと



つくに頭を打って脳髓をはみ出させて死んでいるところだった。

「おい、これからどこに行くんだ？」正木がカズミに尋ねた。

「俺の知ってる人のところに行く。しばらくそこで厄介になろうと思っ  
っている」

「そこは遠いのか？体のあちこちが痛くて、もう歩くのつらいんだ  
けど」

「ほら、そこだ」

カズミが指さした先に小さな工場があった。シャッターが降りて  
いて、そこに汐見モーターズと書かれていた。二階は居住空間らし  
くオレンジ色の明かりが窓から漏れていた。

二人は赤茶色に錆びた鉄製の階段を上がると入り口前に立った。  
チタン製のいかにも分譲住宅のドアといった感じの扉をカズミがリ  
ズミカルに叩いた。何かの合図のようだった。しばらくして、玄関  
に明かりが灯りドアの鍵が開いた。カズミがドアノブに手をかけて  
ドアを開けたとき、無精髭を生やした口に細い煙草をくわえた、四  
十代半ばの恰幅のいいランニングシャツにトランクス姿の男が眠そ  
うな顔をして壁に手をついて立っていた。

山県はビルの屋上から病院を見下ろしていた。

病院入り口前にはパトカーが何台か止まっていて、制服姿の警官  
たちが男たちを引っ張ってきているのが見える。この男たち先程山  
県が送り込んだ刺客である。最も刺客といっても全く意味もなく暴  
れていたただけだ。

山県は上着の内ポケットに手を入れて携帯電話を取り出した。す  
ばやくキーを打ち込むと「迎えにこい」と言っただけですぐに切っ  
た。山県は思わず額に手を使った。頭が痛い。これで完全に我々の  
情報を掴んでいる狼を野に放したことになった。これからの自分た  
ちの活動に確実に支障をきたすだろう。何とかしなければ全国制覇  
どころかこつちが壊滅する危険性だって出てくる。それを思うとま  
すます頭が痛くなってきた。

しかし、また、カズミを殺すのも惜しかった。カズミは優秀な諜報部員だ。彼を殺せば、組員百人を失ったに等しい損害が出る。この矛盾した問題に苦悩し、苦渋の思いで出した計画が全く無駄に終わり、今、山県は武田になんて詫びを入れようかとそればかりを考えていた。それと、これから野に放った狼をどのように、自分の下に戻そうかとも考えていた。どちらも難しい問題だ。考えても始まらない。彼女に相談しよう。いつもそうしてきた。そしてこれからもそうするつもりだ。彼女は裏切らないし、俺にいい提案をしてくれる良く出来た女だ。

ヘリの爆音が耳に飛び込んできて、山県の周囲の風が舞い上がった。山県のきちつとしたオールバックの髪形が少し乱れる。ヘリは屋上に着陸するとすぐに扉を開けた。山県はそこから中に入ると「支部に帰るぞ」と機長に命じた。

ヘリはホバリングしながら方向転換をし、京都方面に向けて飛び立っていった。眼下に広がる大阪の夜景が、今の山県の気持ちとは裏腹に、美しい光のグラデーションにより奇妙なまでに幻想的な輝きを放っていた。山県の気持ちはそれを見ても晴れることはない。その逆に、ただ、重い澱のような塊が心に引っかかるだけだった。唯一の希望の光は彼女に会うことだけだった。

## 第五話 野狼 続き

### 第五話 野狼 続き

「久しぶりねえ！元気してた？」

無精髭の男は、顔に似合わない甲高い声で、コーヒーを二人に差し出しながらカズミに満面の笑みを浮かべて話し掛けた。コーヒーカップの取っ手を持つ両手の小指がピンと立っている。

二人は家の中に通されて、リビングのソファに座されていた。

正木はカズミの隣で青い顔をしていた。無精髭の男を見る目が、何か汚い物でも見る様な明らかに嫌悪感に満たされた目になっている。

「ちょっと待っててね。今、お薬箱持ってくるから」

無精髭の男は、体に似合わない軽い足取りで台所に向かった。キッチンの下の棚をこそそこそあさっている。

「おい、どうなってんだ？まさかあいつホモか？」

正木はカズミに寄りかかるようにして耳打ちした。カズミは差し出されたコーヒーを、平気な顔して啜っている。

「いや、あの人はおかま、さ」

「おかまとホモがどう違うんだよ！あいつ、どう見ても普通じゃないぜ」

「おい、会ったばかりでいいかげんなこと言うな！失礼だぞ！」

「あらあ？何こそこそ話てるのよ？」

突然後ろから甲高い声がして、正木がギョツとした。背筋をピンと伸ばして、顔を引きつらせていた。無精髭は薬箱を正木の前に差し出すと、彼らの向かいにある一人がけ用のソファに腰を下ろした。脛毛の濃い太い足を恥ずかしそうに窄めて座っていた。正木の頬を冷たい汗がつたった。

「ありがとうございます」

カズミが無精髭の方に向いて頭を深々と下げた。その行動が正木には理解できなかった。カズミはなぜこんなおかま野郎に頭を下げて、しかもほとんど使ったところを見たことがない敬語まで使っているのか、正木はそれが不思議で仕方なかった。

「いいのよ。そんな他人行儀な。私とカズちゃんの仲じゃない」

正木の背中に悪寒が走った。カズちゃんって何だ。一体こいつら、どういう関係なんだ。それより、この無精髭は何者なんだ。正木の頭の中を数々の疑問が、走馬灯の様にぐるぐる回っていた。

「それよりカズちゃん、そっちのかっこいいお兄さん、紹介してよ」  
無精髭は正木に目配せして言った。正木は全身に鳥肌が立つのを感じた。

「正木晃一、まあ、ただの腐れ縁ですよ」

「まあ、晃一ちゃんね。よろしく」

「よ、よ、よろしく」

正木の声が震えていた。こんな無精髭を生やした四十代半ばのオヤジに、ちゃん付けで呼ばれて嬉しい奴はいないだろう。むしろ気持ち悪くなる。正木はそう思いながら、引きつった笑みを無精髭に向けて答えた。

「あら、私ったら、自己紹介してなかったわね。私は汐見祐二っていうの。祐ちゃんって呼んでね」

汐見と名乗った無精髭の生えたおかまは満面の笑みを正木に向けた。正木はぞっとした。もろに笑い顔を見たら吐き気がしそうだった。しかも、自分までもちゃん付けで呼べと言う。カズミがしばらく厄介になると言っていたのを思い出す。正木の脳裏に想像しうる明日からの生活が浮かぶ。まず、あの男の虫唾が走る甲高い声で起こされ、あいつの手作り料理を食べさせられ、そして一日中あいつと顔を突き合わせていなければならない。しかもそれが、下手したら何日も続く。それを考えると全身に鳥肌が立ち、顔はどんどん青ざめていった。

チラッと隣を見ると、カズミが楽しそうにおかまの汐見と会話を

している。しかもカズミは汐見の顔を真正面から見て平気な顔をしている。それを見ていると、カズミという人間をよく知っていたはずなのに、全くわからなくなってしまった。

こんな奴と当分一緒に暮らすぐらいなら、あそこで死んだ方がマシだった。これが今の率直な気持ちだ。正木は頭を抱えてその場にうなだれた。隣には正木をそっちのけで、相変わらず楽しそうに汐見と会話をしているカズミの姿があった。

同時刻、荒城吉光と国光は、大きな書斎机に地図を広げて向かい合って議論を交わしていた。部屋は薄暗く、窓は一個もない。壁は塗装もしてないコンクリートで、部屋中ひんやりとしている。どうやら地下室のようだ。

部屋の中にがたがたという音が木霊している。机の奥に吉光が、その前に国光がいる。その国光の後ろに椅子に座らされている男がいる。体は椅子の背もたれにロープで縛られて、手は後ろ手に、足は椅子の足にロープでがつちり縛られている。口にはガムテープがしっかりと貼られている。がたがたという音は男がいて椅子を一生懸命に動かしている音だった。足元に携帯電話が繋がったままのモバイルコンピュータが落ちている。そのディスプレイには『送信準備完了』というウインドウが出ている。

地図は大阪の市街地の地図のようだ。地図の所々に赤い丸がしてある。どうやら銀行のある場所らしい。それも、貸し金庫のある大きな銀行だ。

大阪の市街地には、貸し金庫のある大きな銀行は三つ在った。一つは倉沢銀行。関西圏を中心に、主に大企業を相手にしている銀行である。二つ目は松田銀行。この銀行は新興銀行で、去年できたばかりである。そして三つ目は吉永銀行。主に中小企業支援型の地元の地場産業的な銀行である。

この三つの銀行の中に、細川組が所有していた、他の組も喉から手が出るほど欲しいアメリカドルの原版があるのだ。だが、これは

片方しかない。表側のみだ。この、もう一つの裏側の原版は京都にあり、今は武田組の若頭山県がどこかに保管している。

去年の細川組と京極会との提携の際に、細川組が京極会との完全提携の印として京極会に預けたのだ。それを京都に進出した武田組が発見して山県が保管している。

「松田銀行はまず無い。あそこはできたばかりだし、それに暴力団追放を掲げていたからな」

吉光が上着の内ポケットからキヤメルを取り出して、一本口にくわえながら言った。

「そうだな、そしたら吉永銀行かな？」

国光が吉光にライターの火を差し出しながら訊いた。吉光は火に顔を傾けて煙草をふかした。そして目一杯肺に煙を溜め込むとしゃべりながら紫煙を吐き出した。声を発するたびに紫煙がもわもわと立ち込める。相変わらず、がたがたとうるさい音が耳障りだ。

「いや、吉永も違う。奴らはヤクザとわかったら相手にしない。表向き大企業でも細川組は相手にしてもらえないはず」

「だとしたら・・・」

「そうだこしかないはずだ」

吉光は地図の倉沢銀行を指さしながら言った。

倉沢銀行。それは今では世界有数のメガバンクで、本店はここ大阪に在った。外資系の企業や日本の大企業を相手取り、資金は一兆を超えると言われる。そして、本店の貸し金庫には、各界の官僚や大企業の社長クラスの間人が保有する財産が眠っていた。その中に細川組の隠し資金及び最大の儲けを生むアメリカドルの原版が保管されていると吉光は考えた。その根拠は、倉沢銀行はメガバンクになるために審査もせずどんな企業とも取引をしているからだ。もちろん、裏社会では利用しやすい銀行として評判がよかった。

「ところで、そのうるさい男は何だ？」

吉光は地図に落としていた視線を上げて国光に訊いた。国光はその男の方に向き直ると、薄笑いを浮かべた。その顔を見た男がより

いつそうがたがた動き出した。

「警察の潜入捜査官さ。身体検査をしたところ、ご丁寧に手帳を持ってやがった。それで、そいつが、そこで盗み聞きしていたのを捕まえたって訳さ」

国光は顎をしゃくってドアを示した。

「そうか、そいつは、歓迎しないと、な」

吉光は腰のホルスターからコルトガバメントを取り出した。ニヤリと薄笑いを浮かべながら銃のスライドを静かに引き下ろす。銃を男の足目掛けて構えた。引き金を引く。銃声が響き渡り、男の太股から血が霧の様に吹き出た。男はくぐもった情けない悲鳴を上げた。目には涙が溜まっている。

吉光はそれを何度も繰り返した。足、肩、腕、など直接死に至らない所ばかりを狙って撃った。銃声が鳴り響くたびに男のくぐもった悲鳴が部屋中に轟いた。吉光と国光はおもちゃで遊ぶ子供のように無邪気な顔で、この残酷な遊戯を楽しんでいた。

西暦二〇三二年 十一月一日 午前

京都市街地から離れた郊外に位置する、高級リゾートホテル。“ホテル翔宴”ここは武田組が経営しているホテルである。薄暗いその一室で山県はベッドの中で細い葉巻をくわえて、天井をぼんやりと眺めていた。くわえた煙草の紫煙がゆらゆらと天井に向かって立ち込めている。

彼の隣には、片岡里奈が彼に寄り添いながら、気持ち良さそうに眠っていた。すでに朝から五度の情事で、二人とも頭がぼんやりして脳が溶け出しそうになっていた。今日一日中こうして二人で寝ている。

彼女とは大学時代からの付き合いだ。大学では同じサークルだった。サークルは射撃部だった。彼も彼女も射撃の腕はかなりのもので、全国大会で一・二位を争うほどだった。彼女はその射撃の腕を使ってあるバイトをしていた。一気に金になり、仕事をこなせばそ

こそこ善くしてくれる。彼女の仕事はヤクザのヒットマンだった。

山県がこの世界に身を置くようになったのは、彼女の斡旋によるものだった。最初、山県も武田組の狙撃班の人間だった。だが、一度ある事件の時に前総長に助言したのをきっかけにして前総長に気に入られ、どんどん地位を上げて行き、今では組織のNo.2にまでの上がつている。

その山県が、自分の地位と武田組の存亡で相当悩んでいる。まずカズミという狼を野に放してしまったこと。しかも、依然行方知れずだ。それに正木も殺し損ねている。これに対し評議員が騒ぎ出しているということ。そして何より、敵対する荒城組がどんどん勢力を伸ばしている。それに呼応して武田組傘下の南部組が今揺れているという事実。山県の悩みは尽きなかった。

山県は何か悩みがある時は決まって彼女と寝た。こんな時、彼女は必ずと言っていいほど山県にとってベストなアドバイスをくれる。そして、それで一度も失敗したことが無かった。山県は彼女を心から信頼していた。

「なあ、里奈。カズミのこと、これからどうしたらいいと思う？」

山県は煙草を、枕もとに置いてある灰皿に後ろに手を回して押し付けながら彼女に訊いた。彼女はその言葉に身を乗り出して、彼の顔の前に自分の顔を近づけた。

彼女の少し茶色がかった、澄んだ黒の双眸が、山県の顔を覗き込む。山県はこの瞳を見ると安らかな気持ちになるのを、付き合い始めた頃から感じていた。悩みがある時に必ず寝るのは、本当は彼女のこの瞳を見たいからなのかもしれない。

「以前、カズミから、彼の女の家の住所を訊いたわよね。その女をだしに彼を誘き出したら？」

「それも考えたが、奴のDNAには冷徹な要素ばかりが組み込まれている。罠だとわかっていておずおずと来ると思うか？現に奴は、父親同然に慕っていた元傭兵部隊の上官を、何のためらいもなしに殺している。そんな男が、女一人のために命を投げ出すとは思えん」



「でも、以前、彼はその女を守って欲しいと言った。それは紛れもない事実。男は総じて女に弱いものよ。どんな男でも、自分の愛する女のためなら、命を投げ出す覚悟はできているはずよ。たとえばそんなに冷酷な男だとしてもね」

「そんなもんか？」

「あら、あなたは違うの？」

「・・・いや、違いねえな。俺もお前のためなら命を投げ出す覚悟はできてるさ」

「へえー、あなたの口からそんな言葉が出るなんて思わなかった」

二人は顔を見合わせたままくすくすと笑った。そして、その愛を確かめるように、互いにやさしく唇を交わした。

「だが、その前にもう一つ厄介なことがある。荒城組だ。奴らを何とかしないと」

「そうね、荒城組の場合は、情報を集めてからじゃないと何とも言えないわ」

「それじゃ、とりあえずカズミを誘き出すか」

「じゃあ、私は、荒城組の方を調べておくわ」

山県は彼女のその言葉と同時に、腹に力を入れて身を起こして上に乗っていた彼女を押し倒すと、朝から数えて六度目の情事へと向かった。山県の唇が、次第に彼女の秘部へと這うように動いていった。彼女の小さなその口から次第に激しい声が出てきた。だが、その声に反して彼女の顔は無表情そのものだった。

## 第六話 想い

### 第六話 想い

西暦二〇三二年 十一月一日 午後

思い立ったらすぐ行動。それが荒城組のやり方だった。

一機の武装ヘリが倉沢銀行に向けてエンジンの爆音を上げながら、猛スピードで飛行している。機長の目には倉沢銀行のビルはすぐ目の前にまで迫っていた。三階建ての正三角形の建物で、広い敷地には手入れされた庭、兼駐車場があった。車の数は疎らで、従業員と小数の客しかいないことを示していた。

時間は午後二時五十分。後、十分で銀行は閉業を迎える。銀行が狙われやすい時間帯だ。ヘリが飛行している下には大型運搬トラックが一台疾走していた。ヘリと並行して走っているため、かなりのスピードを出している。

上空部隊、降下準備。もうすぐ目標エリアに着く

ヘリのスピーカーから荒城吉光の声が聞こえた。彼は下のトラックに乗っていた。

了解

銀行の外門が閉まりかけていた。トラックはそこに猛スピードで突っ込んだ。急ブレーキをかけたためタイヤが音を立てながら横に滑っている。

トラックが少し傾いてから横向きに止まると、荷台から完全武装した荒城組特殊部隊が足早に降りてきた。M16を肩掛けし、左手には人一人がしゃがんだ状態ですっぽり納まるぐらいの大きさの黒い盾を持っている。目出し帽をかぶりフラックジャケットを着ている。何から何まで黒づくめだ。

助手席に座っていた吉光はすでにシャッターが折りかけている入り口に走り込んでいた。それに倣って黒づくめの特殊部隊が後に続

く。

へりは屋上空十メートルの所でホバリングをしていた。開かれたハッチから次々とロープに繋がれた黒ずくめの荒城組特殊部隊員が降りてくる。そこには国光の姿もあった。

屋上に降り立った国光は手で合図を送って、隊員たちを引き連れて下の階へと向かった。防犯カメラの映像のチェックをしたり、警察に通報、情報提供などをする管制室を制圧するためだ。管制室は二階に在った。国光以下特殊部隊員たちは一気に階段を駆け降りていった。

吉光は滑り込む様にシャッターの下を潜り抜け、立ち様に右手に持っていたUZIを乱射した。銃弾は目の前にいた警備員の体を貫き、警備員は突然の出来事に声も無くその場に仰向けに倒れた。倒れた警備員の体から血が滲み出ている。カウンターの向こう側にいる行員たちは、咄嗟にしゃがみこんで頭を抱えて悲鳴を上げていた。その直後、後ろから黒ずくめの特殊部隊員たちが滑り込んできて走りながら銃を乱射した。カウンターの後ろのパソコンやコピー機などの機材が火花を散らして、一瞬にして鉄くずと化していく。それと同時に悲鳴も大きくなっていった。

コーヒークップの割れる音がした。

防犯カメラのモニターをチェックしていた、太った警備員は驚きの余り画面に文字通り噛り付いた。口にくわえていたドーナツがキーボードの上に落ちて、付いていた砂糖が散る。コーヒークップを落としたことにも気づいていないようだ。他の警備員たちもそのモニターを見て呆気にとられた。モニターの向こうで、まるでハリウッド映画で見るように簡単に次々と行員たちが撃ち殺されていっているのだ。

警備員たちは右往左往した。何しろこんな淡々とした強盗は初め

てのことだった。普通の強盗ならば、情緒不安定な様子で包丁か何かを銀行員に突きつけて「金を出せ」などと叫んでいるはずだ。しかし、この強盗団はそんな様子は全くなく、淡々と人を殺している。しかも完全武装だ。この、管制室兼、警備員室にある武器と言えは警棒ぐらいだ。こんなものでは到底奴らには太刀打ちできない。

モニターの前にいた警備員は受話器を取って警察に連絡しようとした。ここの緊急回線は受話器を取るだけですぐに警察につながる。受話器の奥で女性の声で応答があった。太った男はとりあえず気持ちを落ち着かせようと、大きく息を吐くと言葉を発しようとした。彼の後ろでは仲間の警備員が、警棒やヘルメットを持って右往左往している。

言葉を発しようとしても喉がうまく動かない。焦りと恐怖で額にはべっとりと脂汗が滲んでいる。電話の向こうでは女性の声で「どうしました？」としきりに訊いている。

「た、た、大変です・・・ご、ご、強盗が・・・」

ようやく本題を切り出したとたん、後ろで扉が蹴破られる音がした。

彼が恐る恐る振り返ると、そこには目出し帽をかぶった男が三人立っていた。何れもフラックジャケットに身を包み、自動小銃をこちらに向けて構えている。モニターで見た強盗団と同じ恰好だ。太った男は恐怖でその場にへたり込んだ。受話器がコードに繋がれてぶら下がっている。そこから女性の声が聞こえる。さっきまで右往左往していた警備員たちも驚きの余り呆然と立ち尽くしたまま、扉のところにいる三人を見ていた。

ズガガガガガガガガガガガガガガガ

目出し帽の三人は躊躇無く引き金を引いた。三つの銃口からほぼ同時に火が噴き、放たれた銃弾が警備員たちの体を貫き、血飛沫を上げた。太った男の前で次々と仲間が倒れていく。男は恐怖で叫びながら頭を抱えて、縮こまって震えていた。男の頭の上のモニター

などの機材が、火花を散らして鉄くずと化していった。

目出し帽の一人が男に近づいた。靴音が近づいたたびに、太った男は体をより強張らせた。目出し帽は彼の横でぶら下がっている受話器を取ると「すいません、警備訓練なんです」と言って受話器を置いた。男はその言葉に顔を上げた。訓練だとしたらこれは演出なのでは。もしそうならみんな俺を驚かそうと騙していたんだ。そうに違いない。それにしても派手な演出だ。本部の方針が変わったんだな。全く一言も言わないで。

男はいかにもしてやられたという顔をして、目出し帽に近づいて、目出し帽の肩を叩いて大声で笑った。

「なんだ、訓練だったのか。最近の訓練は凝ってるんだな。ハハハ・・・」

バンツ

銃弾が腹部を貫いた。警備の制服に血が滲んでいる。男はその場に膝から崩れ落ちた。

「訓練じゃねえよ。バカ」

目出し帽は吐き捨てる様に言うと、目の前で腹を抑えて跪いている男の頭に銃口を突きつけ引き金を引いた。

二階、及び三階、制圧完了

耳につけているインカムから国光の声が聞こえた。吉光の傍らには胸に主任と書かれたワッペンをつけている四十代だろっ細身の男がいた。背中には銃を突きつけられている。彼らの目の前には大きな分厚い鉄製の扉があった。金庫の入り口だ。取っ手がどこにも見当たらないところから電子ロックのようだ。

「よし、早く開ける！」

主任は頷くと胸ポケットからカードを取り出し、扉の真中についているカードリーダーに滑らせた。そしてすばやく暗証番号を入力し、番号キーの下についているモニターのようなものに親指を添えた。どうやら、指紋照合キーも掛かっているようだ。当たり前だが、

かなり嚴重なシステムだ。

軋む音がして扉が横にスライドしていった。中には引き出しのたくさんついた棚が壁際に整然と陳列しており、奥には棚に入りきらないくらい大きなものが、シートに包まれて並べてあった。シートには名札が安全ピンで留められてある。

吉光は舌なめずりをして、唇を緩めた。ここにはかなりの財宝が眠っている。これだけあれば、当分組の運営費用にも困らない。これだけあれば、何でもやりたい放題だ。全国制覇も夢ではなくなる。そして、ドルの原版があれば、世界制覇も夢ではない。笑わずにはいられなかった。

今日、午後三時過ぎ、大阪市竹中町の倉沢銀行で、大規模な強盗事件がありました。通報を受けて駆けつけた警察と銃撃戦を展開し、犯人の強盗団は、トラックとヘリコプターで強行突破をして逃走し、銀行ビルを爆破しました。この事件での警官の死傷者の数は、三十名近くに及び、歴史上稀に見る大事件へと発展しました。

爆発の被害はかなりのもので付近にも影響を及ぼし、竹中町では、爆風でガラスが割れてケガをする、家の壁が爆風で崩れる、爆発で電線が切れて停電に見舞われるなど、かなりの混乱に包まれています。警察では広域捜査を展開し、この強盗団を全力で壊滅すると発表しています。以上、臨時ニュースを終わります。

最近ではテレビを落ち着いて観ることができない。すぐに臨時ニュースが入るからだ。今もクイズ番組を観ていたのだが、突然の臨時ニュースで訳が解からなくなってしまった。すでに先の質問は終わっていて、次の質問の解答に入っている。番組は録画番組のため、いちいち臨時ニュースが入る前からやってくれるということはない。テレビ局も、最近では娯楽番組よりもただ詰め込んだ知識をさらけ出す、どこだか大学の教授をゲストに迎える報道番組に力を入れているようで、このクイズ番組もしらけた質問が飛び交っている。出演者にもやる気が感じられない。

テレビの前に座っていたカズミは、深く溜め息を吐いてテレビのスイッチを切った。側に置いてあった新聞を広げた。いいニュースは載ってない。どのページにも武田組と荒城組の抗争に関する記事に、日本国内で起きている、信じられないテロ活動と、それに対する政治家の前向きなのか後ろ向きなのかわからない曖昧なコメントが載っているだけだ。カズミは舌打ちをして、新聞を後ろに放り投げた。ばさつと新聞の束が、ばらけて、紙面が床に広がった。

汐見の家にはカズミ一人だった。汐見は買物に、正木は銀行襲撃事件で、携帯電話に着信が入り、臨時ニュースを報道する二十分前にこの家を飛び出していった。

正木は自分の生存を、自分の所属する秘密特殊警察に報告を入れていた。生存と無事を報告しておかないと、極秘裏に存在を処分され、初めから存在していないとされてしまうからだ。

秘密特殊警察は完全に極秘に活動している。これは国家のトップシークレットだ。だから、この組織の構成員は全ての経歴を抹消されている。そして、構成員が殉職した場合、あるいは行方不明になった場合、情報の漏洩を抑えるために存在自体を抹消するのだ。こうすることにより、初めから彼らは存在していないことにでき、誰も不思議に思えない。

行方不明になった場合、二日以内に当事者からの報告が無いと、存在を抹消されてしまうらしい。正木の場合は時間からして報告がぎりぎりだったと言う。ここに着いて二日目の夜に、時計を見て急に顔を青ざめ、かなり焦った様子で突然携帯電話を取って、電話し始めたのだ。時間は夜中の十一時五十三分だった。

カズミはラッキーストライクのソフトケースをしきりに縦に小刻みに振っている。買ったばかりのソフトケースは、煙草が取り出しにくい。ようやく一本取り出して、オイルライターで火を点けた。煙を胸いっぱい吸い込み、ゆっくりと吐き出す。紫煙が天井に立ち込める。

煙草を吸うと、リエのことを思い出した。カズミが煙草を吸うのを

見てよく怒っていた。『煙草は体によくないからやめなさい。煙草にはニコチン、タール、なんかの発癌性物質が入っていて、吸ったら早死にするのよ』と、いつも言っていた。その他にも、アルコールと煙草を一緒に口にすると身体によくないなど、常に口うるさかった。おそらくテレビでやっていたのをそのまま引用したのだろう。

彼女にはまだ何も知らせていない。自分がここにいても、今の自分の立場がどうなのかも、何も教えていない。教えていないのではなく、伝えることができないのだ。今は、武田組にも追われる身で、もし、リエが襲われていて、メールや電話の内容が武田組に知れたら、命はないだろう。今は、無事を祈るしかなかった。だが、武田組が彼女を放っておくとは思えない。最近、彼女からの連絡は一切ない。メールすら来ていない。まさか、何かあったのでは。そう思うと居ても立ってもいられなかった。

だが、今ここを動くわけにはいかなかった。ここは大阪だ。うかつに動けば荒城組の人間に命を奪われかねない。おそらく、この前のキャバレーでの戦いで吉光は躍起になって俺を殺そうとしているはずだ。賞金まで懸けているだろう。ああいったタイプの人間は異常にプライドが高い。一度でも負けは認められないのだ。だからカズミの命を奪おうとする。それに京都まで行く足がない。今は、どうすることもできない。

カズミが色々と自分に言い訳しながら煙草をふかしていると、突然、携帯電話の着信音が鳴った。リエからだろうかと思い、急いでポケットからそれを取り出し、折りたたみ式の携帯電話の上蓋を開ける。ディスプレイには『メール受信完了』と記されている。キーを操作する。差出人がリエになっている。だが、その文面を見たとき彼は驚愕した。リエが何者かに誘拐されたのだ。

差出人はリエになっているが、文面は乱暴な文章で綴られていた。おそらく、リエの携帯電話から他の人がメールを打ってきたのだろう。内容は、『女を返して欲しかったら、今日の午後六時までに、



フラワー・エンジェルまで来い』だけだ。だが、このリエの経営する花屋を知っているのは山県だ。前に、護衛を頼むのにこの場所を教えたことがある。

「くそっ!!」

カズミはテレビに蹴りを入れた。テレビはひっくり返って内部のブラウン管を剥き出しにし、見るも無惨な姿に変わった。

カズミは余計なことを言った過去の自分への嫌悪と、どうしてもならない今の自分に憤りと焦りを同時に感じた。時計の針はすでに四時半を指している。それには自分には武器もない。おそらく、自分を殺そうと待ち受けているに違いない。そんな所に丸腰で行けば、到底、リエを助ける前に自分が殺されてしまう。しかし、早く行かなければリエが危ない。カズミの額から、言いようのない冷や汗が滲む。どうしても落ち着かなくて、立ったり座ったり、オイルライターの蓋を開けたり閉めたりしている。

ドアの開く音がした。妙に甲高い声が聞こえる。汐見が買物から帰ってきたのだ。カズミはすぐに玄関に向かった。玄関にはベージュのジャケットにジーンズ姿の汐見が買物袋を下げながら靴を脱いでいる途中だった。

「あら、お出迎え?うれしいわ」

「汐見さん・・・、すみませんが、銃と車を貸して下さい」

「何よ、急に。どうしたの?」

汐見は突然の申し出に驚いて目を丸くしていた。

「京都に残してきた女が、誘拐されたんです。助けに行きたいんです」

「そう・・・、わかったわ。心配しなくても銃は一杯あるわよ。それに、今は整備工場なんだから車だって、ね。」

「すみません・・・」

「いいのよ、気にしないで。その代わり、全てかたを付けておいで。もう、これ以上彼女を悲しませることがないように、これが最後になるように、徹底的にやっておいで」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、ついてらっしゃい」

汐見はその場に買物袋を置くと、玄関を開けて外に出た。階段を下りていき、汐見モーターズと書かれたシャッターを開けた。暗いガレージに夕日が差し込んでいく。電動式のシャッターは、舞台の幕開けのようにゆっくりと開かれていく。その光の差す方向に、黒いスカイラインGT-Rが姿を現した。磨き上げられた漆黒のボディが夕日に反射して、鏡の様に輝いている。

「どう、すごいでしょ？これが、私がGTレース仕様に特別にカスタマイズした車よ。九十七年の骨董品だけど、まだまだいけるわよ」  
「ありがとうございます・・・」

「じゃあ、次は銃、ね」

汐見はガレージの中に入っていくと、奥にあるマンホールを開けた。マンホールの中にはしごがかけてある。一見、下水道のマンホールにしか見えないが、実は地下室の入り口になっている。

汐見は暗いマンホールに手を入れて手探りで電気のスイッチを入れた。電気が点いたとたん、奥に鉄製の扉が見えた。ドアノブのところに電子ロックのカードリーダーが取り付けられている。昔とは打って変わって嚴重になっている。

カズミがここにはじめて来たとき、ここは三階建てのごく普通の民家だった。このガレージは元々、居間だったのだ。そして、このマンホールも昔は台所の納戸だった。いつからかはわからないが、今は車いじりをしているようだ。だが、今も昔も変わらないことが一つある。それは、この事務所が傭兵の斡旋施設兼、訓練所であることだ。しかし、今は隊員が一人もいないが。

カズミがここに初めて来たのは、今から八年も前だ。中学を卒業してすぐに孤児院を出て、高校にも行かずにこの事務所の扉を叩いた。その当時のこの施設の所長が、カズミが暗殺した西田前京都府警署長だった。そして、汐見は新人の訓練兼、世話役を担当していた。両親や身寄りのいないカズミにとってここが全てだった。そし

て、同じ隊のメンバーを実の兄弟のように思い、西田や汐見を実の親のように慕っていた。

いつから歯車が狂い始めたのか、カズミは、いつのまにかこの地獄のような世界に身を投じている。父親同然だった西田を殺し、その上、自分が愛する女までも守れないでいる。戦場ではいつもトツプの成績を修めていた男が、今では裏社会の組織から追われる身だ。マンホールを降りていき、鉄製の扉を開けると、そこには所狭しと銃火器が並べられていた。対戦車ライフルからデリンジャー拳銃まで、色々な種類の銃火器がある。これだけある中で、カズミが心惹かれたものは、昔自分が使っていたM92Fカスタムだった。西田がカスタマイズしたものだ。ここにある銃火器も全て西田が集めたものだ。西田は銃が好きだった。もし日本でなく、他の欧米の国に生まれていれば、もっと多種多様な銃火器をそろえていただろう。カズミはM92Fカスタムを手にとった。銃身にレーザーポインターが付いていて、M92Fの特徴のある銃口の先の内側に螺旋状の切込みが入っていて、サイレンサーを付けることができるようになっていて。もちろん、取り付けることができるサイレンサーは西田が作った手製のものだけだ。

レーザーポインターのスイッチを入れて、目の前にあるターゲットに向けて銃を構えてみる。八年も放っておきっぱなしだったのに、ポインターの照準には寸分の狂いもない。安全装置を外して、引き金を絞る。銃声とほぼ同時に弾が発射され、見事に的の真中に弾痕ができた。ポインターの当たっている場所だ。カズミはニヤリと唇を緩めた。西田のことを思い出したからだ。この銃をくれたとき、「この拳銃はそこの拳銃とモノが違う。なんたって俺がカスタマイズしたんだ。お前が死ぬまで使える代物だろうよ」と言っていた。本当にその通りだ。この銃は他の銃とは違う。魂のこもった銃なのだ。

「汐見さん。これをもらっていきます」

「それはあなたのなんだから、そんなにかしこまらなくていいわよ。」

他にもいるでしょ。何でも好きなだけ持っていきなさい」

後ろで、腕組をしながらカズミを見ていた汐見が笑いながら言った。

カズミはその他にも、拳銃や自動小銃を何丁か手に取った。大体、身につけられる大きさのものばかり選んだ。中には、手榴弾や片手で使えるM-79グレネードランチャーまでもがあった。大半の銃は身に付けているホルスターに納めたが、身につけられない、ショットガンや狙撃用ライフルなどは大きなボストンバックにしまい込んだ。

マンホールから外に出ると、車のトランクにボストンバックを入れ、車に乗り込んだ。ルームミラーに汐見の姿が映っている。カズミは窓を開けると汐見に軽く会釈した。汐見もまた顔に満面の笑みを浮かべて小さく手を振った。汐見の精一杯のやさしさだった。悲しい顔や涙を見せては、これから戦いに行くものにとって重荷にしかない。笑顔で、それもそっけなく見送ることが戦いに行く者を見送る最低限のルールなのだ。少なくとも、傭兵時代の彼ら自身がそうだったのだ。

ガレージから出た漆黒のGT-Rは、沈みかけた夕日に向かって、タイヤの滑る音を鳴らし、マフラーから白い煙を上げながら疾走していった。汐見はそれが見えなくなってもなおぼんやりと眺めていた。汐見の目には何も映っていない。見ようという意識がない。脳裏に浮かぶのは、傭兵時代の家族同然に暮らした頃の思い出ばかりだった。彼の目に涙が溢れていた。

## 第六話 想い 続き

### 第六話 想い 続き

正木刑事は、強盗爆破事件のあった倉沢銀行のカウンターに肘をかけてうなだれていた。正木刑事が真剣に推理をするときの格好だ。店内には死体ばかりが転がっているだけで、全く手がかりがない。管制室にも行ったが、ビデオテープは全て持ち出されていた。検視の結果も全員が銃殺されているという報告しかない。

ただ、この全員殺すというやり方はかなり残忍な犯人の犯行だろう。それに、警察が駆けつけた頃には、もうすでに犯人たちは外に出ていて、逃走用のトラックに乗り込む最中だったそうだった。警察は電話での通報を受けてから十分程度で着いたそうだった。そのことから仕事もかなり計画的で、行動が速いということが推測できる。おそらく、プロの犯行だろう。それも、軍隊並の訓練を受けた団体の犯行だ。

だが、誰が何の目的でこの犯行をしたのかは、はっきりとはわからない。最近世間を賑わせているテロ組織革新党という考えも出るが、彼らの幹部には軍隊訓練を積んだ者もいるが、団体ではとてもじゃないけど、こんなスピーディーな犯行はできない。ほとんどの参加者が一般の市民だからだ。

このスピーディーという観点から、もつと特殊な団体のような気がする。この躊躇もなく殺している辺りから、彼らは殺しに慣れているということだ。それに、壁に弾痕があまりないことから、銃の扱いにも慣れているに違いない。検出された銃弾から、銃はM16自動小銃と推測された。こういった軍隊で使うような銃は、今の日本でも一個人ではとてもじゃないけど手に入らない。大半は、上海経由でこの大阪にこれらの銃火器が来るが、その裏取引を取り仕切っていたのは相沢国際貿易株式会社だった。この会社から、関西方面を中心に銃が流されていた。

この相沢国際貿易株式会社は、現在では社長の死により活動を停止している。元々、相沢国際貿易株式会社は細川組の系列だ。その細川組もまた、一年前のカズミがやったキャバレー襲撃事件で、組長が死に、事実上壊滅という形になった。だが、今この細川組に代わって大阪どこるか中国地方をも手中におさめているところがある。それが、荒城兄弟率いる荒城組だ。今では、相沢国際貿易株式会社がつくりあげた武器輸入ルートを、荒城組がそっくりそのまま使っているという情報もある。

この銀行にはかなりの数の資産が預けられている。現金に換算すると、国家予算の何倍もの金だ。この犯行の手口に、そして、この銀行に預けられていた巨額の資産。これらを照らし合わせると、やはり犯人は荒城組以外に考えられない。日本の裏社会の制覇をたくらむ彼らにとつて、金は喉から手が出るほど欲しいはずだ。潜入捜査官の情報では、荒城組は特殊部隊を編成していると聞く。他の組も特殊部隊を編成しているが、ここまでできるのは荒城組の特殊部隊以外に考えられない。それは、広島毛利連合ビル襲撃事件で立証済みだ。広島的事件では、キャバレー襲撃事件のときに細川貴一を殺した太刀筋と、ボス三人を切り殺した太刀筋が一致している。それが、荒城吉光の犯行だという証拠だ。それに、ここは大阪だ。わざわざ危険を冒して武田組がちよっかい出すとは考えにくい。今回は刀の痕はないがやはり犯人は荒城吉光だ。

だが、検挙するだけの証拠が揃っていない。刀の痕と死体に残された太刀筋だけで犯人を逮捕できるほど世の中甘くない。ここで、一斉検挙のための決定的な証拠が欲しいところだ。

奴らの犯行のすごいところは、全くぼろを出さないということだ。犯行は大胆なのに、ほとんど決定的な証拠を残さない。そこが、正木の頭を悩ませる原因なのだ。

もし、検挙に踏み込むことができたとしても、奴らの所在が全くつかめない。奴らは本拠地を持たないのだ。潜入捜査官の報告では、時々、組で経営している大阪中のバーやクラブ、カジノそれに風俗

店などの地下に集まって集会を開くらしい。そのバーやクラブなどの集会場所はランダムで全くサイクルがつかめないという。組員のほとんどが一般市民に紛れて生活をしているし、武器や資金は他の場所に保管している。その場所は、荒城兄弟以外知らない。もはや、組ではなくゲリラ集団のテロリストに近いものがある。

荒城組に関しての報告はここまでだ。潜入捜査官からの連絡は、この事件の一日前に途絶えてしまった。彼の所在もつかめない状態だ。

正木は大きな溜め息を吐いた。上着の内ポケットからマルボ口を取り出し、火を点ける。煙を一杯肺に溜め込むと、ゆっくりと煙を吐いた。ニコチンが体内を駆け回り、頭がぼんやりとしてくる。擬似的なりラックス気分を楽しむ。考えても始まらない。もう、なるようになるさ。頭の中をこの言葉が駆け巡る。正木は煙草を咥えたまま、より一層カウンターにうなだれた。視線は虚ろになっている。彼の周囲では、鑑識がせわしなく走り回っていた。

## 第七話 笑顔の奥に

### 第七話 笑顔の奥に

西暦二〇三二年 十一月一日 午後 五時四十七分 京都吉安三丁目商店街

小ぢんまりとしているのにどこか整っているリエの部屋。だが、今はビールの空き缶や安いウイスキーのボトル、煙草の吸殻が床やテーブルに雑然と散らばっている。部屋の中には男たちが五人いた。その他に、一人トイレに入っている。すでに飲み始めてから一時間以上経っている。トイレに入っている男は飲みすぎで腹が痛くなり、汚い音を立てながら一生懸命踏ん張っている最中だった。そのトイレの前でイライラしながら行ったり来たりしているよく肥えた男がいる。腹がズボンのベルトからみつともなくはみ出している。もう十分近く尿意を我慢している。額には脂汗が浮かんでいた。

「おい、まだか！？小便もれちまうよ！！」

男はいきり立ってトイレのドアを叩きながら叫んだ。周りの男たちは、くすくすと笑っている。トイレの中からは相変わらず汚い音が聞こえる。

「ああ、もういい！！外でして来る！！」

「そのほうが早い。あいつはまだ当分出てこないぜ」

イカの燻製を喰えた、鼻に大きなニキビのある男が言った。燻製を喰えている男の口元が笑っている。他の男たちも太った男の方を見て同じような表情を浮かべている。太った男はなぜ笑われているのかわからなかった。だが、太った男の様相は明らかにおかしいのだ。太い足を一生懸命内股にして、手で股間をぎゅっと抑えている格好だからだ。男たちはこれを見て笑わずにはいられなかった。

男はそそくさと内股で玄関を飛び出した。男が飛び出した後、後ろから全員が爆笑しているのが耳に届いた。太った男はすぐさま殴りかかるうかと思っただが、我慢も限界に達していて、ここで巨大な



世界地図を描いて、恥をかくよりはマシだと店先の電柱の所に向かった。玄関の所でしても良かったが、どうしても立小便は電柱なしには考えられなかった。小便がしたくなったら電柱を探すのは、子供の時から癖だった。

電柱の前に立った男は、急いでズボンのジッパーを下ろした。いざするとなると、尿意はどんどん強くなっていく。何とか我慢しようと腰をくねくねと、前後左右に動かしている。トランクスの際間からナニを取り出す。かなり我慢していたのでナニは肥大していて、しかもべたべた汗ばんでいる。その感触の悪いナニを、顔をしかめながらつまみ出し、今まで掛かっていた下腹部の力を抜く。なんともいえない解放感が彼を包み込む。眉間によった皺がほぐれ、顔には安堵の表情が浮かんでいる。

昼間の賑わいとは打って変わって、今では犬の遠吠えが聞こえるほど静まり返っている。この商店街は店を閉めるのが総じて早い。午後五時にはほとんどの店が閉まってしまふのだ。この街は元々小さな街だったため、未だにその古い風習が残っている。五時を過ぎれば店は終わり。これがこの街の常識だった。

男はこの地元の出身者だった。この街の常識が太った男の念頭にあるため、誰もいないと信じ込み、全く警戒しないで放尿していた。歌を口ずさむ始末だ。彼は完全に無防備だった。

突然、後頭部に冷たく硬い金属質のものが当てられたのに気づいた。男は咄嗟に手を上げた。手を離れたがためにナニがだらんとして、尿があちこちにびちゃびちゃ飛び散っている。男のズボンや靴にまで飛び散っている。

「声を出すな。少しでも悲鳴を上げれば撃つ」

少し低めの澄んだ声が耳に届く。男は首を少し後ろに傾けた。見覚えのある顔が目隅に映る。山県の手ってきた写真に写っていた男だった。見覚えのある男は、ズボンに挟んであった自動拳銃M645を抜き取った。男のナニからは相変わらず小便が垂れ流しになっている。

「あんた、カズミだろ？」

「しゃべるな！殺すぞ！」

カズミは低い声で言った。拳銃の撃鉄が下りる音が耳に届いた。男は前に向き直り体を強張らせた。小便が出なくなった。ようやく終わったのだろう。

「玄関に向かって歩け。そのまま、だ」

「おい、前をしまわせてくれてもいいだろ？」

「ダメだ。死にたいのか？」

「わかったよ」

案外と気の小さい男だった。だが、体がでかくて気が小さいのはカズミにとって好都合だった。男の体はカズミをすっぽりと隠してくれた。それに言うことを良く聞いてくれる。玄関へ向かう途中、キッチンの小窓の前を通るが、男の向きを変えながら進むことによつてカズミの存在を知られることなく入り口に近づくことができた。「ドアを開ける」カズミが静かに言う。

「このままでか？」男もカズミと同じトーンで訊く。

カズミは無言で、突きつけた拳銃で後頭部を小突いた。男の体がびくついた。

「くそ……」

男は震える手でドアのノブに手をかけ、ドアを押し開けた。開けたとたんの中男たちが一斉に振り向いた。カズミは男の背後から少し顔を出して中を窺った。酒臭い匂いが漂っている。中には黒っぽい背広姿の男たちが四人いた。ソファに二人、テレビの前に一人、パソコンデスクの椅子に一人腰掛けている。リエの部屋はワンルームで、トイレとバスルーム以外は全てつながっている。トイレの電気がついていて、男のうなる声が聞こえる。リエの姿はない。この部屋にはロフトがある。そのロフトにも人影がない。あそこはベツドになっている。山県が送り込んだ男は、この、今、恥をさらしている男を合わせて計六人。バスルームの電気が点いていないが、もしかしたらあそこにリエがいるかも知れない。それに、リエの見

張りがあるとすれば男は少なくとも七人以上いるということになる。中にいた男たちはドアを開け放った、太った男を指さして大笑いした。太った男は手を上げたままで、しかもナニを出したままだ。

「どうしたんだお前？ 新手のギャグか！？」

「汚えもん見せんじゃねえよ！！」

「早くしまえよ。何やってるんだ！」

男たちは口々に言いながら、腹を抱えて大笑いした。笑われている男は、ただ、額に脂汗を滲ませながら苦笑を浮かべている。相手はこの突拍子もない、太った男の行為にかなり油断している。これはカズミにとって絶好の好機だった。

内ポケットから先程男から取り上げたM645を左手に取り出した。撃鉄が下りている。スライドは引いてある。親指で安全装置を外し、人差し指を引き金に掛ける。そして、右手に握られているM92Fカスタムの引き金を絞った。銃口は男の後頭部に押し当てたままだ。

ズバン！

銃声と共に男の頭が消し飛んだ。男たちの笑いがぴたりと止まった。醜く太った体が重い音を立てて前のめりに倒れる。突然の出来事に、今まで笑っていた男たちは目を丸くして呆然としていた。彼らの視線の方には、今にも二挺の拳銃を連射しようとしているカズミの姿があった。

「野郎！！」

ソファに座っていた男の一人が叫びながら立ち上がり、腰に挿していた拳銃を抜き取って構えようとした。他の男たちもそれに倣う。だが、彼らが引き金に指を掛けようとした瞬間、それより先にカズミの構える両手の二挺拳銃が火を噴いた。カズミは、両手に持った拳銃を自動小銃のような速さで連射した。

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！

部屋中に血飛沫が舞い、男たちは次々とカズミの放つ銃弾に倒れていった。食器棚に突っ込む者、ソファからひっくり返る者、テ-

ブルに倒れこむ者、テレビに突っ込む者など、整然としていたリエの部屋は一瞬にして廃屋と化した。白い壁紙に鮮血が飛び散り、きれいに掃除されていた床には男たちから流れた血液と、彼らが壊した物の破片が入り乱れている。

トイレに入っている男は、最近少しずつ出始めた腹を一生懸命に抑えながら、痛みに必死で耐えていた。もうトイレに入ってから二十分経過している。半ば脱水症状になりながら、非情にも肛門からは相変わらず止まらずにケロイド状のモノが出続けている。腹はゴロゴロなり、痛みは一向に良くなならない。今回の仕事が初めてだというのに、幸先が悪い。

トイレの扉の向こうからは爆笑が聞こえる。何が可笑しいののかと頭の片隅で思いながら踏ん張っていると、突然、一発の銃声が轟いた。その直後仲間の叫ぶ声が聞こえたが、今度は連射的な銃声が轟いた。男は思わずその場で頭を抱えた。扉の向こうはまるで戦場のように、男たちの呻き声とガラスの割れるような音が聞こえる。

銃声が止んで、頭を抱えていた男は顔を上げた。見ると、扉には複数の風穴が開いていて、その全てが自分を掠めている。彼の後ろのタンクは跡形もなく壊れ、水が噴水の様に天井に噴き上げられている。彼は恐怖の余り、指一本動かすことができなかった。

靴音が近づいてくる。だが、彼は腰を抜かしてしまって、全く動くことができなかった。靴音は確実に男の方に近づいている。男は恐怖で目に涙を溜めていた。足がガクガク震えている。ドアのノブに手を掛けられた。ドアのノブがゆっくりと回される。だが、鍵が掛かっているのですんなりとは開かない。男は少し安心した。相手は容易に入って来れないだろうと思った。よく考えれば、バカな思い違いだ。

バン！バン！

銃声が二発轟き、ドアのノブがあっさりと外れた。そして、次の瞬間、扉が蹴破られた。眼前に現れたのは、黒いコートに身を包ん

だ、自分たちがここで殺すはずだったカズミの姿だった。二個の銃口は男の頭に突きつけられている。男は口をぽかんと開けて、目を大きく見開いてカズミの顔を呆然と見ていた。

「おい！リエを何処へやった！？」

カズミは鋭く睨みながら、便器に座っている男に訊いた。男はただ黙って呆然とした顔で、カズミを見ているだけだった。ただ自分の顔を見つめているだけの男に腹が立つたカズミは、左手に持っている銃を男の太股に近づけて引き金を引いた。

バン！

銃弾は太股を貫通し、鮮血がほとばしった。男は太股を両手で強く抑えながら、情けない悲鳴を上げた。

「これで意識がはつきりしたか？あ？早く言えよ！お前と遊んでる暇はない！」

「……」

「もう一発くらいてえのか！？ああ！？」

今度は右手に持っている拳銃を彼の太股に押し付けた。男は、涙目でカズミを見つめたまま首を大きく左右に振った。男の口から涙声漏れる。

「勘弁してください……。知らないんです。本当です」

「……」カズミは黙って太股に押し当てた拳銃の引き金を引いた。

バン！

「ギヤアアアアアアー！！！！」

男は大声で叫んだ。血が飛び散って男の顔にも数滴付いている。

男は必死になりながら左右の手で両の太股を抑えた。余りの痛さに息が荒くなっていた。血がだらだらと足元に流れて赤い血溜りになっている。

「さあ、言えよ。リエは何処だ！？」

「本当に知らないんです。僕は今回の事に関しては、何も聞かされてないんです。勘弁してください。お願いだから、殺さないで……」

・  
」

男は声を上げて泣き出した。大粒の涙が、太股をぎゅっと握っている手に落ちて弾ける。何度も何度も、念仏のように小さく「殺さないで」と言っているのが耳に届く。カズミは舌打ちして、銃口を彼の頭に突きつけた。男は尚も「殺さないで」と念仏のように唱えている。

「うるせえよ」カズミは引き金を絞った。  
バン！

男の体が撥ね返り、便座の背もたれにもたれ掛かったまま動かなくなつた。腕が力なく、だらんと投げ出されている。トイレの白い壁には多量の鮮血が飛び散っていた。

カズミがトイレから出ると苦しそうな呻き声が聞こえた。カズミが周りを見渡すと、ソファからひっくり返っている男がまだ生きているのに気が付いた。男は下腹部を必死に抑えていた。抑えている手にはどす黒い血がべっとりと付いている。どうやら、銃弾は肝臓を貫通したようだった。男の鼻には大きなニキビがあった。

カズミは苦しそうな表情を浮かべて悶えているニキビ面に近づいて、手で抑えられている下腹部に踵を埋めた。下腹部からどす黒い血が飛び散る。急激に走る激痛に男は大きな口を開けて叫んだ。目には涙が一杯溜まっている。

「どうだ？今の気分は」

「ふん、最高だね・・・」男は口元に笑いを浮かべて必死に悪態をついた。

「リエは何処だ？」カズミは思いつきり抑揚のない声で訊いた。顔に表情は全くない。

「ククク・・・今頃、山県さんにおもちやにされてんじゃねえの。いい女だったもんな」

カズミはキツと睨むと彼の下腹部に突き立てている踵により一層力を込めた。彼の口からは情けない悲鳴が突き出て、どす黒い血が

飛び出した。彼の口には血が溜まっていて、口を開くたびに真っ赤な歯が剥き出しになった。

「今頃はよ、山県さんに薬漬けにされて、ケツの穴舐めてでも薬を欲しがるようになってんじゃねえの。もう、お前のところには戻れねえよ」

「その山県は何処にいる？」

「ぎ、祇園のディープ・スロットってクラブにいる。俺たちが失敗した場合、山県自らがそこに誘き出す手はずだった。メールか何かでな。そのベランダから見える塀の奥にワゴンが止まっているだろ。そこから中の様子を窺っているんだよ。当然、俺たちがやられたのも見えているはずだ。情けねえ話さ」

男がしゃべり終わると、突然、パソコンの電源が入り、メール受信完了のウィンドウが現れた。カズミがパソコンに近づくと、外に止まっていたワゴンが発進した。

マウスを操作して受信メールを確認する。相手は山県からだった。あのニキビ面が言った通り、山県はディープ・スロットってクラブにいるようだ。時間指定は午後七時。住所もしっかり書いてある。ここから祇園まではそう遠くはない。だが、もしあの男の話が全て本当ならば、一刻をも争うことになる。ゆっくりしている時間はない。

カズミはすぐに玄関に向かった。ドアのノブに手を掛けたとき、後ろから呼び止められた。呼び止めたのはニキビ面だ。もうすでに顔面は蒼白、多量の出血で体から体温が奪われているのか小刻みに震えている。

「おい、待てよ」

「なんだ？」

「ディープ・スロットは武田組が経営するクラブだ。山県さんはそこであんたを確実に葬る気なんだろう」

「どういうことだ？」カズミは肩越しに後ろを窺いながら訊いた。

「あそこは完全会員制なんだ。だから、あそこに入っている若

い奴らは、武田組組員予備軍つてところだ。気をつける数が半端じゃない。最近、京都で流行っていてな、まあ、そこに集まっているのはクズばかりだな」

「・・・・・・」

「クズだけに、何をしでかすかわからない。あそこじゃ、受付で銃を預ける仕組みになっているんだ。そうしないと中に入れない。あんたの銃は全部預けることになるはずだ。だが、中で待ち構えている奴らが銃を持っていないという保障はない。下手したら、そのクズども全員に銃を渡しているかもしれないぜ」

「なぜ、そこまで教えてくれる？」カズミは怪訝そうな表情を浮かべて訊いた。

「あんたのファンだから、さ・・・・」男は口元だけで笑って見せた。

カズミは鼻で笑い返すだけで、そのまま何も言わずに扉を開けた。すでに外は薄っすらと暗くなっている。カズミは外に出ると、車を止めてある、向かいの八百屋の店の裏に走った。



## 第七話 笑顔の奥に 続き2

笑顔の奥に 続き2

漆黒のGT-Rは祇園の街をもの凄いスピードで走り抜けていた。漆黒のボディには、毒々しいネオンサイトと街頭の光がもの凄い勢いで後部へと滑っていく。

最近ではこの国には車が少ない。世界中で環境問題などが深刻に騒がれてから、企業が車を作らなくなり、車が希少になって車の値段がどんどん上がり、ほとんどの人が車よりも、公共機関を使うようになってから、道路が混むということもなくなった。今では、車は金持ちの道楽か、警察や自衛隊などの専用車両または政治家やお偉方の送迎用車、もしくはヤクザの乗り物になってしまったのだ。

今まで、車大国日本だったのに、急激な変わりようだ。それもこれも世界情勢が変わったからだ。アメリカを始めとして全世界が、深刻な環境問題に対処すべく、新環境法の元、車の断固たる規制を行ったのだ。どんなに頑張ろうとも、ガソリンに変わる動力源は開発できず、最初は電気とガソリンを交互に使うエコ・カーが認められて製造されたが、値段が高くて一般人には手が出せない代物だった。買うのは一部の金持ちや物好きぐらいで、需要はどんどん減っていった。普通の車は需要があるけど供給できないし、エコ・カーは供給できるが需要がほとんどない。そうなると企業は相次いで潰れていき、従来のガソリンを動力源としていた車は希少なものになってしまったのだ。

周りを見回しても、以前は路上駐車でひどかったこの街が、今ではほとんど車がない状態だ。店の前にぼつんぼつんと車が止まっている程度だ。こういう所で見かける車はほとんどがヤクザの車だ。

屋上に巨大なサメの置物が置いてある建物を発見した。看板にはデープ・スロートという文字が刻まれている。建物は三階建てで、幅の広い建物だった。

車を店の前に止める。カズミの車の前には、山県の愛車の青いBMWが止まっている。それを見てここで間違いないと確信した。車から降りると、入り口に向かった。入り口の周りには、髪を派手に染めた十代だろう若者が屯<sup>たむろ</sup>していた。若者たちはカズミの姿を見ると睨みをきかせながら近づいてきた。

「退けよ。邪魔だ」カズミも睨みながら言った。

「何だデメエは？」若者のうちの金髪の男が口を開いた。ライオンの鬣<sup>たてがみ</sup>のような髪型だ。

「うるせえよ！邪魔だつて言つてんだろ。退<sup>ど</sup>けよ」

「デメエ！！」

金髪の男はカズミに殴りかかってきた。拳が顔の前まで迫ってくる。カズミは拳を出してきた腕を掴んで手前に引っぱり、その腕を掴むと肩に掛け、腰を落として彼を投げ飛ばした。彼の身体が宙を舞い、コンクリートの地面に叩き落された。背中を強打して息がでないのか、必死に悶えている。それを見ていた仲間の男たちはたじろいだ。

「退けよ。こいつみたいになりたくないだろ？」

男たちは何も言わずに道をあけた。最近ではこういう口だけの奴らが多い。髪を染めて、諸肌を出して粹<sup>じゆん</sup>がったところで、所詮、実戦をくぐりぬけた者には勝てないのだ。それに、こういった類の間は弱い奴ばかり選んで相手にする。当然、軍隊経験と武術の修行を積んでいる男にはかなわない。

入り口のドアを開けると、小さな受付カウンターがあつた。そこに一人の若い男が立っていた。髪は紫色のさらさらで白いワイシャツに紫のネクタイ、黒いベストを着用し黒のスラックスをはいている。一見すると女性と間違えるほど端整な顔立ちだった。

「カズミ・ランカスター・サイトウさんですね。案内役の瀬良圭一です。山県さんが中でお待ちです」

瀬良圭一と名乗った男はニッコリしながらカズミに近づいてきた。「銃を預からせていただきます」

カズミは無言で腰のホルスターからM92Fカスタムを取り出すと瀬良に投げてよこした。瀬良はそれをうまく受け取ると、カウンスターの裏にしまい込んだ。その後簡単にボディーチェックをして、中に通した。

店内はスロットにルーレット、ポーカーテーブルなどが置いてあるカジノ領域と、ミラーボールにスポットライト、そして、異様に大きなステージが設置されているダンスホール領域、簡単なカウンスターが設けてあり、複数の丸いテーブルが並んでいるバー領域、そこに隣接されているビリヤード台。そして、『LOVEジューズ』と書かれた毒々しい光を放つ看板のある地下への入り口。先程から同じ様な装いの互いに抱き合った男女が出たり入ったりしている。いずれにも十代後半から二十代前半の男女が所狭しと入り乱れていた。店内はダンスミュージックの大音響に、DJの叫び声にも似た声とブラックライトの光が満ち溢れていた。

通されたのはバー領域だった。その一番奥の席に複数の男たちに囲まれた山県の姿があった。山県の隣に女がいて、山県は口元に笑いを浮かべながら女の耳元になにやら囁いていた。女は見たところ十代後半のようだった。肩を組んでいる右の手が、開かれた胸元に滑り込んでいく。それに対し女は、くすくすと笑っているだけだ。耳元で囁いている言葉は口説き文句なのだろう。

「山県さん。カズミさんをお連れしました」

瀬良の言葉に山県はようやく顔を上げた。山県はカズミの顔を見ても、表情を変えることはなかった。むしろ、カズミの方が山県を見る目が違った。目をナイフのように鋭く尖らせていた。

「よう、久しぶりだな。まあ、座れよ」

カズミは山県を睨みながら、山県の目の前に座った。相変わらず周りに男たちが取り巻いている。いずれもネクタイはばらばらだが黒のスーツに身を包んでいた。瀬良は山県とカズミに一礼するとその場を去っていった。山県はその瀬良の後ろ姿を目で追っていた。

「リエは何処だ？」

「楽しませてもらったよ」山県はニタリと不気味な笑みを浮かべた。  
「ああ!？」

「楽しませてもらったって言ったんだ。いい女だったぜ」山県は隣に座る女にキスをした。

「デメエ、リエに何をした!？」

「ちよつと薬をやりやあ、俺の股間をしゃぶりまくつてよ。今は、俺の組員のおもちやになつてんじゃねえのかな」

山県はいやらしい下卑た笑みを浮かべて、親指で『LOVEジュース』と書かれた毒々しい光を放つ看板のある地下への入り口を指し示した。

「デメエ!」カズミは身を乗り出して、山県の胸倉を掴み、右の拳を振り上げた。

「まあ、待て。取引きといこうじゃないか？」山県は右手をかざしてカズミをなだめた。

「・・・」カズミは座つてポケットから取り出したラッキーストライクに火を点けた。

「お前がうちに戻ってくれば、俺も女を返してやる」

「戻らなければ・・・？」

「ここでお前もろとも殺す!」

「断る。戻る義理はない。自力で取り戻してやる」

「そうか・・・残念だな。ここで死んでもらうしかないな」

山県は内ポケットからリボルバー式拳銃を取り出して、銃口をカズミの眉間に向けた。引き金に掛かっている指に明らかに力が入る。撃鉄が下りようとしているその瞬間カズミは立ち上がり、山県の腕を強く掴んで銃口を天井に向けた。驚いた山県は銃の引き金を引きまくった。女の悲鳴が同時に響く。八発の銃声が轟いて、天井の照明が粉々になった。拳銃は撃鉄の下りるむなしい音だけがしている。もう弾は入っていない。女は山県の隣でうずくまって震えていた。  
「ふざけるよ!!デメエ!!」

カズミは吐き捨てるように言うと、山県の腕を引っ張り上げ、そ

の腕を肩に掛けて投げ飛ばした。山県の身体が宙に浮き、そのまま向かいのテーブルに覆い被さった。テーブルの足が折れ、山県は惨めな格好で床に滑るように仰向けに倒れこんだ。その胸元に黒い革靴が強く振り下ろされる。胸元をえぐられて咽る。顔を上げると啞え煙草の紫煙の隙間から鋭い目を光らせているカズミの姿があった。「リエをここに連れて来い」カズミは静かに言った。

その時後ろから肩を捕まれた。取り巻きの男の一人だ。だが、カズミは無言でその男に裏拳をお見舞いした。男の鼻のひしゃげる音が耳に届き、男はくぐもった呻き声を上げながらその場に仰向けに倒れた。倒れた男の鼻から血が大量に噴出している。

それを見た取り巻きの男たちは一斉に拳振り上げてカズミに飛び掛った。周りの客も立ち上がりカズミに近づいてきた。カズミはその場を切り抜くため、バツク転して離れ、間合いを取り、カンフーの構えをした。男たちは手をポキポキ鳴らしながら、じりじり間合いを詰めてきた。よく見ると、このバー領域の客は山県の隣にいた女以外みんな男ばかりだった。しかも、表にいたような若い奴ばかりだ。みんなあのライオンのような同じ恰好をしていた。

取り巻きの男の一人が拳を上げて飛び掛ってきた。カズミはその男が出した拳を左手で払うと、右の拳を思いつき鳩尾みぞおちに入れた。男はそのまま吹っ飛んでいき、テーブルに突っ込んだ。男がもう一人、拳を上げて突っ込んできた。今度は筋肉質でがっちりした体系の男だった。カズミはその拳をかわすと、かわし際に鳩尾に膝を入れた。男の身体がくの字に曲がる。そこに、今度は首筋に肘を入れ、男をその場に叩き伏せた。

今度は同時に二人きた。カズミは十分に引き付けると、飛び上がり回し蹴りをくわえた。爪先が男たちの頬をえぐり、口から血を噴出して二人ともほぼ同時に床に倒れこんだ。

それを見た男の一人が、胸ポケットからサバイバルナイフを取り出した。刃先を水平に構えてカズミ目掛けて突っ込んできた。カズミはそれを寸前でかわすと、男のナイフを持つ手を蹴り上げた。ナ

イフはくるくる回りながら宙を舞った。男は腕を蹴られた反動で仰け反っていた。その男の胸に踵を水平に埋め込んだ。男は身体をくの字に曲げながら、ボトルやグラスがたくさん並んでいるテーブル席に突っ込んだ。ガラス片が、ガシャンという音と共に宙を舞った。カズミは宙に舞ったナイフをテーブルに足を掛けてジャンプしてキャッチすると、テーブルの上でナイフを逆手に構えた。ナイフを逆手に構えるのは順手で構えるよりも素早く振ることができるからだ。

カズミの一連の動きはダンスホールから流れるヒップホップと妙に合致していた。彼のカンフー自体が踊っているようなスピード感とキレを持っていたからだ。

横から殺気を感じた。振り向くと赤い髪の方がビリヤードの棒を振り上げながら迫って来ていた。カズミは素早くテーブルから下りると、その男目掛けてテーブルを蹴った。テーブルは床を滑って、がむしゃらに突っ込んできた男の腹に命中し、男はその場に膝から崩れ落ちた。次は後ろからだった。今度は背広姿の男が椅子を振りかざしてきた。カズミは身を反らしてそれをよけると身体を反らした状態のまま男の脛すねに蹴りを入れた。男はそのまま膝から崩れ落ちようとしていた。そこにカズミは体を起こして、男の喉元にナイフを突き立てた。男は白目を向いて、口からは血泡を噴いていた。カズミがナイフを抜くと男の喉がぱっくりと開けて、そこから多量の鮮血が噴き出した。男はそのまま床に倒れこんだ。

その様子を見ていた男たちは一瞬怯んだとさうさった。カズミはそこを見落とさなかった。今度はカズミの方から男たちに突っ込んで行った。男の一人にナイフをかざして首に素早く振って、踵落しで蹴り倒した。こんな感じでカズミは次々と周りの男たちを倒していった。顎下にナイフを突き立ててその後に蹴り上げたり、ナイフを首に刺して引き抜くと同時に後ろ回し蹴りを食らわしたりと。とにかく残酷で派手な殺し方に徹した。こうすることにより、残りの奴らの戦意を削ぐと考えていたからだ。案の定彼の思惑は的中し

た。特に、この店に出入りしている若い奴に効果的で、一人殺すたびに三人は逃げていった。

とうとうカズミの周りには複数の死体が転がっているだけとなり、誰一人周りにいなかった。カズミは血塗れのナイフをかざしたまま山県に近づいた。

ズギューン！

その時、突然銃声が轟いてカズミの後ろの壁に立てかけてある絵が、床に派手な音を立てて落ちた。視線の先には、黒い背広姿の男たちがUZIやMP5A5などの自動小銃やその他に自動拳銃を構えた男たちが立っていた。その黒づくめの男たちの後ろには、相変わらず笑顔の、瀬良の姿があった。右の手に持った自動拳銃の銃口を口元に近づけて、立ち昇る硝煙に息を吹きかけていた。西部劇でよく見るようなシーンだ。

「カズミさん。そろそろあなたも年貢の納め時ですね」若い男は顔をより一層ニツコリとした表情にした。カズミはその顔がとてつもなくむかついた。

「ふん、ガキは家に帰ってママのオツパイでも吸ってな！！」

カズミは急に身を低くして、体のばねを利用してナイフをもの凄い勢いでまっすぐに投げ飛ばした。ナイフは風を切って瀬良目掛けて飛んできた。瀬良は間一髪で身体を反らしてそれを避けると、またカズミに笑いかけてきた。ナイフは彼の後ろの壁に突き刺さっている。瀬良のその表情は、もうむかつくというよりも、不気味に思えてならなかった。

「まだまだ甘いですね。カズミさんは」瀬良は銃口をカズミに向けた。

「ふん、ムナクソわりい」カズミは悪態をついて見せた。

「往生際が悪いんですね」

「昔からだ」

瀬良はそれ以上何も言わずに、カズミに向けていた銃の引き金を引いた。カズミはその銃声とほぼ同時に、一気に横に飛び退いて倒

れているテーブルの後ろに身を低くして隠れると側に落ちていた椅子を手にした。その銃声の後に複数の銃声が轟いた。銃弾は全弾、カズミのいる方に飛んできて、カズミの頭上の照明を粉々に粉碎し、壁には複数の弾痕を残し、テーブルの端の弱い部分が砕け散った。

銃声が一瞬止んだ。弾を使い切った男たちはマガジンを取り替えている最中だった。カズミに好機が到来した。カズミは立ち上がり手に持っていた椅子を足元に持つてくると、それを思いっきり蹴り飛ばした。椅子は真っ直ぐマガジンを交換している男たちに向かって飛んでいった。カズミはその後すぐに男たちに突っ込んで行った。先に飛ばした椅子は自動拳銃のマガジンを詰め終わってスライドを引こうとしていた男にヒットした。男は椅子がぶつかった衝撃でそのまま仰向けに倒れた。周りの男たちはそれを横目に見ていたためにマガジンの装填に一瞬の遅れを生じさせた。そこにカズミの飛び蹴りが入った。飛び蹴りは男の顔にヒットし男は倒れようとしていた。そこにカズミはもう一踏ん張りし、隣の男に空中後ろ回し蹴りを喰らわせた。強烈な蹴りを喰らった二人の男は、ほぼ同時に倒れた。間合いに入ればこっちのものだった。カズミは一瞬にして次々と男たちを叩き伏せていった。

全員を叩き伏せたカズミは、足元のハードボラーを蹴り上げて手に取るとスライドを素早く引いて構えた。構えている先には、こんな状態になっても相変わらずニコニコしている瀬良がいた。瀬良も連射機能付き自動拳銃M93Rをカズミ目掛けて構えていた。左手はホルスターに入っているCZ75のグリップに掛かっている。あっけらかんとした感じの割に抜け目のない男だった。

「さすがですね。一瞬にして大の男を六人も倒すなんて」

「次はお前の番だ」カズミはキッと瀬良を睨んだ。だが、瀬良は相変わらずニコニコしている。

「粹がないで下さい。その気になれば僕だってできますよ。あなたを殺すこともね！」

「・・・・！！」



ズガガガガガ！バン！バン！ズガガガガガ！バン！バン！

一瞬だけ感じた殺気。本当に一瞬だった。カズミはそれを間一髪で感じ取り、何とか身を翻してテーブルの立ち並ぶ中に転がり込んだ。カズミの黒いコートに穴が開いていた。瀬良はM93RとCZ75を両手に構えて乱射してきたのだ。

ズギューン！ズギューン！ズギューン！ズギューン！ズギューン！

カズミは立ち上がると同時にハードボラーを、硝煙でぼんやりとしか見えない瀬良目掛けて連射した。スライドが後退するたびに薬莢が飛び出し、銃口が火を噴くと共に銃弾が瀬良目掛けて硝煙を掻き分けながら飛んでいく。

だが、瀬良は身を翻してそれをかわすと、横に走りこみながら両手の銃をカズミ目掛けて乱射してきた。

ズガガガガガガガ！バン！バン！バン！ズガガガガガガガ！

カズミの隠れている所に複数の銃弾が飛んできた。テーブルには複数の弾痕ができ、周りのテーブルに置いてあったボトルやコップが弾け飛んだ。カズミは身を低くしてフロア中央のボックス席の仕切りに走り込む。その時、仕切りの上の曇りガラスが粉々に弾け飛んだ。カズミが仕切りの端から顔を出したとき、瀬良は大きなコンクリート製の四角い柱の後ろに隠れるところだった。

「どうです？ 僕の二挺拳銃の腕は？」 瀬良は銃にマガジンを装填しながら訊いた。

「ふん、そろそろかたをつけてやる」 カズミはマガジンを抜いて装弾数を確かめた。まだ多少の余裕はある。

二人はほぼ同時に立ち上がると、同時に隠れていた場所から出て銃を構えた。もう、こうなると早撃ちの勝負となった。だが、二人が引き金に指を掛けたのも同時だった。

ズギューン！

ズガガガガガ！

## 第七話 笑顔の奥に 続き3

第七話 笑顔の奥に 続き3

多数の長机がずらつと並ぶ大阪府警察署の大会議室。

この一連の事件に対して三日早めて秘密警察緊急会議が開かれた。大阪府警の大会議室には第一課から第十課までの全国の秘密警察所属のほぼ全ての警察官が集まった。秋も終わりに近づきもうすぐ冬だというのに、これだけ人が集まったおかげで会議室はムシムシとした熱気に包まれ暑苦しかった。

正木は長机の一番前の窓際の席で、窓の外に目をやりながら呆然と煙草をふかしていた。正木の隣には部下の平山巡查長が座っていた。巡查長は煙草が大の嫌いだつた。巡查長は顔をしかめながら仕切りに咳払いをしていた。

「何だ？風邪か？」正木がその咳払いに気づいてわざとらしく訊いた。正木は平山が煙草嫌いだということを知っていた。

「正木さん。ここ禁煙じゃないんですか？」平山は入り口のドアの所に貼つてある禁煙のステッカーを指さして言った。

「お前なあ、そんなのばかり気にしてるから髪が薄くなるんだぞ。俺より若いくせして」

「そんなの関係ないでしょ。とにかく、ここは禁煙なんですから煙草は止めてください！」

「わかつたよ。たくつ、女みたいにうるさい男だ。だから、ハゲるんだよ」

「うるさいな！だから、関係ないでしょ！それは！」

確かに平山はまだ二十四なのに髪が薄かつた。それに悪いことに旋毛つむじの所から来ている。しかも、最近正木によくからかわれて、それを気にしてストレスが溜まっているのか、ますますハゲてきた。もうすでに地肌が顔を出している。

入り口の扉が開かれた。そこから秘密警察幹部会のお偉方が顔を

出した。そのとたん、今までざわざわと騒がしかった会議室が緊迫した空気に変わった。正木は煙草を窓から捨てると、ネクタイを締めなおして椅子に座りなおした。お偉方の正体は警視庁のエリートや以前の事件での英雄たちだ。

お偉方は正木たちが座っている長机の向かいの長机に腰掛けた。

椅子は正木たちが座っているようなパイプ椅子ではなく、革張りの背もたれの高い椅子だった。お偉方の席の前には、それぞれ半紙に墨で役職名と名前が書いてあった。大した役職じゃなくても、そうされるとかなり威厳が感じられた。そのお偉方の中には正木の育ての親である佐々木警部の姿もあった。かつての創建電気ビルジャック事件での功労者ということでの秘密警察幹部会に参加している。お偉方の座る机の後ろにスクリーンがあり、そこにパソコンでつないだ映像が映し出されている。パソコンを操作しているのはお偉方ではなく、若手の警察官だった。

「えー、それでは、会議を始めたいと思います」

佐々木警部が立ち上がり、始めの挨拶をした。そのまま、スクリーンに近づくと胸ポケットからボールペンを取り出してスクリーンを指した。現在スクリーンには十個の色で分かれている日本地図が映し出されている。

「今まで我々は、ばらばらに行動し、情報の共有もなかったが、今回を機に、我々は一つに統合することになりました。これは、本庁からのお達しです。最近では、毛利連合ビル襲撃事件、相沢国際貿易企業株式会社社長殺害事件、大阪市立第三市立病院での警察官暗殺未遂及び、無差別発砲事件、倉沢銀行強盗殺人事件など、目に余る凶悪な犯罪が増えてきています。こうした犯罪に対処すべく、我々は情報を共有し、そして、協力し合って捜査に当たりたいと考え、この会議を開催した次第であります」

佐々木警部の演説が終わると、十個の色に分かれていた日本地図が一つの色になった。それを見てここに集まった警察官たちは拍手喝采を送った。だが、正木にはそれがやらせのように思えてならな

かった。やはり、今までの警察の伝統である、管轄外地区非協力主義、そして、手柄の独占を狙うエリート同士の蹴落とし合いなど、この会議で、警察社会において長年続けてきたことが一気に解消されるとはとても思えなかったのだ。

スクリーンの画面が変わった。今度は今回起きた事件の写真が映し出された。どれもこれも血塗れの死体の写真ばかりだ。そのスクリーンの前に本庁のエリート特別捜査官の新山仁司が現れた。びしっとした身なりで、髪はこてこてに固めたオールバックだ。彼は典型的なエリートで、三十そこそこで、秘密警察幹部会の会長になっているほどだ。彼の父親が警視總監で、いわゆる親の七光りだった。「えー、この写真は毛利連合ビル襲撃事件の写真だ。この写真を見てわかる通り、犯人はかなり残忍な性格の持ち主だ。ビルの会議室にあったいくつもの死体は、ほとんど原型がないほどぐちゃぐちゃだった」

またスクリーンの画面が変わった。彼が説明したシーンの写真がアップで映し出された。だが、アップにしても、ほとんど何がなんだかわからない。ただ、赤黒く血の滲んだ肉の塊が転がっているようにしか見えなかった。

そして、また画面が切り替わった。今度は毛利連合のボスたちの死体の写真が映し出された。一つは腹を切り裂かれて内臓をはみ出させているもの、もう一つは横に真っ二つに切り裂かれているもの、さらに最後の一つは目を切り裂かれているものだった。いずれも、あまり見たくない写真だった。

「これらの死体の特徴は、全てが鋭い刃物で斬られているということだ。しかも、全で一刀のもとに斬り捨てられている。これについて、第三課代表正木晃一刑事より説明がある」

その言葉に正木は立ち上がると、胸ポケットから警察手帳を取り出した。そして、後ろを向いて一礼すると、警察手帳を開き説明に入った。

「このような、刀による斬殺体は、一年前に私が担当しました、祇

園のキャバレー“花園”襲撃事件のときにも出ました。被害者は、暴力団組織細川組組長細川貴一であります。この時、細川組と同じく暴力団組織の京都京極会が会談をしていたところを、武田組の組員が襲撃しました。その組員は、私が放った潜入捜査官で、名前はカズミ・ランカスター・サイトウ、現在二十二歳です」

スクリーンにカズミの写真が映し出された。黒のコートに身を包み、鋭い眼差しを会議室の全員に送っているような写真だ。

「彼はそこで、この犯人と闘っています。その犯人の名は、荒城吉光。荒城組の組長で京極会の傘下に加わっていた組です。おそらく、この男がここの連の事件の犯人ではないかと、私は推測しています」

またスクリーンの表示が変わった。今度は、カズミが撮ってきた荒城吉光の写真が映し出された。その写真に会議室がざわついた。荒城を追いかけている課は多いが、こんな鮮明な写真を手に入れている課はなかったからだ。

「そこで問題なのは、この写真ではありません。彼がなぜ、その会合襲撃のどさくさに紛れて、細川貴一を殺したかにあります。そして、その後毛利連合の傘下に加わっていないながら、一年後にはそこを襲撃して、その後、相沢国際貿易企業株式会社を襲撃しその会社の機能を吸収、今や荒城組は事実上、西日本の裏社会を制覇したことになります」

画面は三つの色で分けられた日本地図に変わった。関西から西日本側が赤で荒城組の領土を、関東を中心に奈良方面までが青で武田組の領土を、東北から北海道まで黄色で、武田組傘下の南部組を表している。

「私は相沢国際貿易企業のビルで彼と対峙したことがあります、その時彼はビルを襲った理由をアメリカドルの原版が狙いだと言っていました。西日本を制覇し、密輸関係の支配権も獲得し、金には困らないはずの彼が、なぜアメリカドルの原版などを欲しがるのでしょうか。これで私の話は以上です」

正木は一礼すると、前に向き直って座った。それを確認した新山

は立ち上がるとマイクを手にとった。

「そのアメリカドルについて、第五課の笹山刑事から説明があります」

その言葉に笹山は立ち上がった。一番後ろの席だった。でっぴりと太った身体で、トレンチコートによれよれの帽子をかぶっていた。帽子からはみ出た髪はぼさぼさで、無精髭面のその表情にやる気が感じられない。いかにも刑事という感じの人だった。

「えー、そのアメリカドルの原版は一九七〇年に日本に入ってきたという記録があり、それ以降の記録はなしです。その頃は円安ドル高の時代で、それはかなりの利益を産んだと言われていますが、この組織が所有していたのかも不明です。警察にあつた資料は、おそらく匿名の垂れ込みか何かでしょう。その後、バブル景気で円高ドル安になり、そのドルの原版は裏社会から姿を消しました。しかし、二〇二五年度以降日本の停滞的不景気で円はどんどん下落し、今また円安ドル高の時代となりました。しかもドルは紙の質も絵柄も当時と全く変わっていない。そこに目をつけて、これからのことも考えた上で、もっと莫大な資金を稼ごうと画策したのではないかと我々は見ています」

確かにそれも一理ある。今の技術を駆使すれば、ドル札を精巧に作ることなんて容易だ。しかも、外資系の企業や銀行が増えたおかげでドルが日本にも出回っていて、今ではコンビニでもドルを使える時代だ。だが円安でドルを所持している人は年々少なくなっているのが現状だ。

日本人がドルに手を出しだしたのが、二〇〇九年以降のことだ。これから円は下落すると銀行や証券会社が挙ってドルを人々に勧めた。その頃はまだ、ドルより日本円がまだ高いぐらいで、すぐにドル札に換金できた。そして、彼らが言う通りに日本の円は大幅に下落し、ドルが急激に高くなった。これが二〇一九年のことである。

そして、二〇二五年以降日本の景気は地に落ち、犯罪の急激な増加と、この日本の現状に絶えられなくなった人々が革命を目的とし

た革新党というテロ組織を誕生させた。これに対しての日本政府の対応は国家権力による制圧だった。日本政府は警察機構に秘密警察と特殊警察機動隊を加え、それに軍隊的な力を持たせた。日本は明らかに逆走しだしたのだ。ここから日本の銃社会化と、政治の迷走が始まることになる。

こうなると世界は日本を見放した。そして、毎年開かれるサミットのG8から外され、せつかく常任理事国になった国際連合からも外されることになった。しかし、それでもアメリカだけは日本の基地が惜しいために援助を続けている。だが、その援助も何だかんだと文句をつけて、毎年少しずつ減っている。今まで景気のいいとき、日本はアメリカに尽くしてきたのに、逆になると薄情なものだ。一部の識者の見解では、アメリカはこの機に乗じて日本を乗っ取るうとしているのではないかと言っている。現在、それが危惧されるほど日本はどんな悪い方向へと落ち込んでいる。

アメリカに乗っ取られるなら、ドルはこの先重要な位置を占めることになる。荒城吉光はそれを狙っているのか。それならば、この一連の事件は全く説明ができない。細川貴一を殺したり、毛利連合を襲撃する必要はないはずだ。笹山たち第五課の見解ももっともだが、正木には何か引つ掛かるものがあつた。

「話には続きがありまして、アメリカドルの原版は二つ存在します。と、言うのも、札は裏表で絵柄が違います。そこで、原版は表の原版と、裏の原版があるのです。その裏の原版ですが、どうやら武田組の京都支部にあるようなのです。なぜそこにあるのかは不明ですが、我々の見解が正しければ、荒城吉光がそれを狙って次の行動を起こす危険性が出てきます」

その言葉の後に、会議室はざわつき、前に座っている幹部会の連中の顔に緊張が走ったのが、正木にはすぐにわかった。それを狙って動くとなれば、武田組との全面戦争になるからだ。

## 第七話 笑顔の奥に 続き4

### 第七話 笑顔の奥に 続き4

カズミと瀬良は互いの頭に銃口を突き付けながら、横になって床に倒れこんでいた。二人同時に引き金を引いた後、また二人同時に同じ方向に床に倒れこんで銃弾をかわし、銃口を互いの頭に突きつけたのだ。二人とも両方の肩が上下に繰り返し動いている。顔は汗だくで、息が荒くなっていた。

「はあ、はあ、はあ、これじゃあ、埒が開きませんね」

「はあ、はあ、はあ、じゃあ、このまま、引き金を引くか？」

「それじゃあ、二人ともあの世行きですよ。いいんですか、彼女を置いて逝ってしまっても。僕は何もありませんから、一向に構いませんよ」

「・・・・・・」

「でも、死ぬのは嫌だな。痛そうだもんな」

「じゃあ、どうすんだよ？このまま、力尽きるまで、にらめっこか？」

「それじゃあ、こうしましょう。二人同時に銃を捨てて、素手で勝負するってのはどうですか？さっきのあなたのカンフー素晴らしい動きだったし」

「ああ、その方が俺もありがたい。弾の残りが少ないんでな」

「じゃあ、銃は捨てますよ。いつせいで」

瀬良の掛け声で二人とも銃を自分の後ろに放り投げた。銃が床に叩きつけられて、大きな金属音を立てている。二人は立ち上がると、間合いを取るために後ろに飛び退いて向き合った。

「用意はいいですか？」

「ああ」

「それじゃあ行きますよ！」

瀬良はさつと構えると身を低くしてカズミ目掛けて突進してきた。



瀬良が眼前にどんどん迫ってくる。カズミは踵落しで一気にかたをつけようと足を上げた。だが、彼がその足を振り下ろそうとしたとき、瀬良はすでに中空で蹴りの体勢に入っていた。カズミはそれに気づくこともできなかった。瀬良の蹴りがカズミの顔面にもろにヒットして、カズミは一気に後ろのテーブルに突っ込んだ。テーブルの上に置いてあったグラスやボトルが派手な音を立てて割れ砕け、テーブルが足からボキリと折れて穂先の重くなった稲のように、だらんと丸いテーブルボードが垂れ、カズミはそこに寝そべる容になった。そこにすかさず瀬良の足が胸に突きたてられる。カズミは咳き込むと同時に、血を吐いた。瀬良の蹴りがかなり効いているようだった。

「どうです？ 僕のカンフーを喰らった感想は？」

瀬良はニヤリとしながら、カズミを見下ろしていた。カズミは息を切らしながら、その瀬良の、カズミにとってはひどく反吐<sup>へど</sup>が出そうにむかつく顔を睨みつけていた。瀬良はそのカズミの表情を見えますます唇を緩める。その表情にカズミは舌打ちをついて悪態をついて返した。

だが、その態度とは裏腹にカズミの心は不安が支配していた。確かに途中まで瀬良の動きは完璧に見えていた。そこから繰り出されるであろう攻撃も見切っていた程だ。だが彼の動きが急にわからなくなった。途中でふっと消えたように、カズミの目には映らなかった。

瀬良に殺気というものはない。先程の銃撃戦でも、今の闘いにおいてもほとんど殺気を感じとれない。それどころか、闘志すら感じ取れない。カズミが先の先について攻撃をすれば、瀬良はすでにその先の行動を起こして、カズミの攻撃を全く受け付けない。それにあの笑顔がカズミにとっては何よりもむかつくものだった。絶対にぶっ殺す！！カズミの心に怒りと共に闘志と殺気が復活した。

カズミは目を剥いて、これ異常な鋭い目で瀬良を睨みつけると、瀬良の足に素早く蹴りを入れた。突然の攻撃に瀬良がよろめいた。

カズミは素早く立ち上がると、瀬良の顎下目掛けてすつと足を伸ばした。喉から顎にかけて激痛が走り、強力な蹴りの力に瀬良の身体は宙を舞った。

瀬良は二・三メートル離れた所に派手に落ちた。だが、カズミの攻撃はこれで終わらなかった。床に倒れた瀬良の胸倉を掴むと、鳩尾に膝を埋め込み、身体を反転させてそのまま瀬良を投げ飛ばした。瀬良は先程カズミが突っ込んだテーブルに頭から突っ込んでいったうなだれたテーブルボードに頭からぶつかって、丸いテーブルボードが二つにばかっと割れた。血がべったりと付いている。

カズミがゆっくりと瀬良に近づいた。瀬良はピクリとも動かない。カズミの足取りはすでに勝ち誇っている者の足取りだった。注意深くというよりも、この余韻を楽しんでいると言った方が合っている。カズミの足取りがふと止まった。カズミは目を見張った。瀬良がむくりと起き上がりだしたのだ。カズミは焦った。まさか生き返ったのではないかと真剣に考えたほどだ。

体を起こした瀬良はカズミの方に向き直った。首をうなだれていて、前方にさらさらの長い紫の前髪が垂れている。もしかして、怒ったのではないのか？それで今以上に強くなったら勝ち目はない。カズミの脳裏に悪い予感が走る。背筋がぞつとする。

瀬良が顔を上げた。だが、カズミに向けられた表情は相変わらずの笑顔だった。しかし、何かが違った。顔面血塗れで不気味になっているのもあるが、先程までの笑顔と明らかに何かが違う。それが何なのかは全くわからない。だが、カズミにはその笑顔の裏に隠された何かが、危険なもの、この上ない恐怖を与えるもののように取れてならなかった。カズミの背筋に今まで感じたことのないほどの悪寒が走る。

「なかなか、やりますね。いやー、さすが、カズミさんだ。本気を出したら怖いや」

瀬良は首をさすりながらへらへらした表情で口を開いた。頭から流れる血が頬や鼻先をつたって滴り落ちている。カズミは瀬良を睨

みながら身構えていた。すっかり警戒している。だが、身構えていても、瀬良の攻撃がどこから、どのように繰り出されるのかが、その不気味なまでに貫き通される笑顔で見当もつかなかった。

「僕はあなたのことを少々甘く見ていたようですね」

「やっつと、本気になるって、か？」

「いいえ。今のでわかりました。本気を出さなくてもちよつと力を出せば、あなたなんか簡単に殺せるってことが、ね」

「……」

カズミは返す言葉がなかった。自分は限界突破でようやく瀬良に攻撃できたのに、瀬良は本気を出さなくても簡単に殺せると言う。この口ぶりから、この男は今までほとんど力を出していない。むしろ遊んでいる感覚だ。カズミはだんだん恐ろしくなってきた。この男の死の宣告ではなく、この男の存在自体が。

「さて、もう決着を付けますか？そろそろ飽きてきたし」

「……」

「覚悟はいいですか？」

瀬良は身構えると、ぎゅっと拳を握って、カズミ目掛けて一気に走り込んだ。

## 第七話 笑顔の奥に 続き5

第七話 笑顔の奥に 続き5

新山が両手をかざして、立ち上がった。ざわついていた会議室が一気に静寂を取り戻した。

「我々の任務は、その抗争をいち早く阻止することにある！なんとしても、彼らの全面戦争を阻止し、この国から凶悪犯罪を一掃するのだ！！」

新山がまじめに入ったということは、もうすでにこの両組織の情報は無いということだ。これだけ全国に網を張っていて、たったこれだけの情報とは情けない。この会議でわかったのはただ単に、近いうちに武田組と荒城組の抗争が起こるかも知れないということだけだ。何のためにこれだけ集めたのかわからない。単に不安を募るために集めたのか？正木にはそう思えてならなかった。結局この幹部会を指揮する新山には、この抗争が起こる前に打って出て阻止するという度胸と作戦を立てる頭がないのだ。おそらく、誰かにこの件を任せるのだろう。そんなことを考えていると、正木の口から自然と溜め息が漏れた。

新山のまじめに、会議室のほぼ全員が拍手を送った。ここにいる連中の大半が、出世しか考えていない。だから、こんな当たり前のまともにも、これだけの拍手喝采を送るのだ。ここで彼を盛り立てておいて、その下で手柄を立て、彼の父親である警視總監にいい印象を与え、秘密特殊警察機構の権力と国家における立場を上げようとしているのだ。そうになると必然的に彼らの給料も上がる。

だが、正木には全く興味のないことだった。そもそも警察に入った根拠が違う。

ここにいる連中の大半が、公務員万態・安定主義世代の人間だ。公務員になればリストラはないし、職にあぶれることもない。彼らが通っていた学校や、彼らの親が小さい頃から公務員になるように

子供に言い聞かせ、小学生に夢を聞くと九割の子供が公務員になりたいと答える時代。そんな時代に育った連中が集まったために、警察、いや、公務をつかさどる全ての役所においてやる気のある奴はいない。だから、これほどまでに日本は荒れ果て、凶悪犯罪が闊歩する時代に突入していったのだ。

正木は親を奪った犯罪を心から憎んでいた。そこに彼らと決定的に違うものが生まれる。正木の心の中にはいつも復讐心と憎悪と、それを覆うオブラートの役目をする正義感と警察という組織がある。正木は親を奪った犯罪に対する復讐心を満たすために警察という組織を利用していただけなのだ。正木にとっての警察は、自分に巢食うこの上ない復讐心をコントロールするための手段に過ぎないのだ。ここにいる連中の大半が自分たちの生活の安泰と、給料と地位のアップにしか興味がない。それに比べて正木は、それとは違う動機で自分の身体を突き動かしている。凶悪な犯罪は自分のこの手で握り潰さなければ収まらない。ここに決定的な違いがあるのだ。

今、正木は後悔の念にかられていた。この秘密特殊警察機構に参加して正解だったのだろうか？やはり、正義の味方のように自由気ままに悪を潰して自分の復讐心を満たした方が、遥かに気持ちがいいのではないか？このまま辞めて、探偵か何かになった方がいいのではないか？もし、他の奴にこの件が一任されれば、自分の出番はない。それならばいつそ警察なんか辞めて、カズミと共に処刑人か何かになってかつこよく悪を一掃した方がいいのではないか？正木の脳裏を次々と思惑が飛び交う。だが、そのどれもこれも、自分の心を満たすものでしかないことに正木は気づいた。しかもそれらの考え全てが低レベルだ。顔に苦笑が浮かぶ。

「この件に関して、我々全員が動いては目立ちすぎる。そこで、誰かに一任しようと思う」

来たぞ、来たぞ。正木の思った通りだった。ここで選ばなければ、本気で辞めようと考えた。だが、選ばれる確率がないというわけでもない。幹部会に正木の育ての親である佐々木警部がいる。そ

ういう理由で使われるかも知れない。正木は目を瞑って、ここの連中とは対比して、選ばれるように祈っていた。

「えー、この件を一任するのは、幹部会の佐々木警部。あなたに一任する」

正木は驚いた。それと同時に、会議室の警官たちも騒ぎ始めた。佐々木警部の顔をチラッと見た。だが、佐々木警部の顔には動揺の色がない。彼は選ばれることをあらかじめ知らされていたのだろう。しかし、幹部会の人間が選ばれるのはどうもおかしい。そもそも、幹部会は各所轄をまとめるために各地のエリートや功労者を集めて構成された組織で、それ自体が捜査に乗り出すということはまずありえない。幹部会は所轄の行動を監視して、その捜査に指示を送るだけの組織のはず。それが今、幹部会の佐々木警部が選ばれている。一体なぜなのだろうか？なぜ、幹部会がヤクザの抗争の捜査に自ら乗り出すのだろうか？これには何か裏があるのか？正木の頭の中を数多の疑問が飛び交う。

「皆驚いていると思うが、この件は一つの所轄が処理するには規模が大きすぎる。そこで、我々幹部会自らが、君たちの先頭にたって捜査に当たりたいと思う。よって、佐々木警部には君たちの直接的なボスとなってもらう。今回は、佐々木警部の采配の下、秘密特殊警察総力を挙げて、この抗争を食い止めようと考えた結果だ」

いや、さほど大きいとは思えない。それでも、裏社会の二大勢力がぶつかるかも知れないという事件だが、ぶつかるかも知れないという、まだ見解の段階だ。このヤクザの抗争もそうだが、革新党などの新興テロ組織の事件だって起っていないわけではない。そのテロ事件に人員を割かないで、秘密特殊警察の総力をヤクザの抗争にぶつけようというのか？まとめの段階でもそうだが、新山の言い分では、あたかも、抗争が起きているというような言い分だ。おかしい。

何かある。正木は何か引つかかるものを感じずにはいられなかった。新山が席についた。すると、佐々木警部がおもむろに立ち上がった。会議室の視線が、今回のボスの佐々木警部に集中する。佐々木

は咳払いをすると、手元に置いてあるマイクのスイッチを入れた。

「捜査は明日より開始する。各所轄への指示は、明日の午前中までに電子メールで送る。各自それに従って行動し、一日の報告書を電子メールで本部に返信しろ。本部の場所は、ここ大阪府警察署十二階の武田・荒城組抗争対策本部室だ。何か大きな動きがあれば、代表者会議を本部室で開く。今日は以上だ。明日からの捜査に備えて、各自準備を整えておくように」

佐々木は席についた。それと対比して新山が立ち上がる。

「全員、起立！」

その言葉で、会議室の全員が起立した。学校の起立とは違い、皆びしっと立っている。その様はまさに壮観の一言に尽きる。

「敬礼！」

ばっという服が空気を裂く音が一丸となって響き渡り、頭に手を斜めに構える格好となり、全員直立不動の姿勢になった。

「解散！」

会議は終了した。正木に多くの疑問を残して。

## 第七話 笑顔の奥に 続き6

### 第七話 笑顔の奥に 続き6

突然目の前で瀬良が飛び上がった。カズミは考えた。先の先を突くから見切られる。ならば、奴の行動を十分見切ってから攻めようと。

瀬良が天井に着かんばかりに飛び上がると、落下の勢いを借りて強烈な蹴りを繰り出そうと右足をカズミ目掛けて伸ばした。カズミは見た。その間が一番隙だらけだ。カズミは落下してくる瀬良に向かって飛び上がった。足を伸ばして蹴りの体勢に入った。完璧な空中戦に突入した。互いの足が絡み合い、落ちる瞬間の刹那の内に激しい蹴撃が飛び交う。

瀬良の口元に大きな笑みが浮かんた。瀬良の強烈な踵がカズミの首筋にめり込み、カズミは一気に床に叩き伏せられた。一瞬の出来事。常人の目には何が起こったのかわからないほどの速さでの戦い。目にも止まらぬ速さとはまさにこのことなのだろう。

カズミは必死に立ち上がるうとした。四つん這いになって身体を起こそうとした。首筋に入った一撃は、全身の神経をずたずたに引き裂く。身体が思うように動かない。床についた手がガクガク震え、背中には激痛が走る。足も全く機能しない。

靴音が近づいてくる。つま先が目の前に見えたとき、それが顎下を蹴り上げた。カズミは亀のように四つん這いになった状態で蹴り飛ばされた。四角く冷たいコンクリートの柱に激突して、口から多量の血を吐いた。息が荒い。肺にも支障が出てきたようだ。目を開けると瀬良が目の前で笑っていた。

「ボロボロですね。カズミさん。一匹狼の名が泣きますよ」

瀬良はくすくす笑いながら言った。カズミは荒い息づかいのおかげで上下する視界の、その中に入っている瀬良がむかつて仕方なかった。それよりもっとむかつくのは、この男を倒せない不甲斐な



い、情けない自分だった。カズミは嘲笑をこぼした。

「早く殺れよ」

「今度は随分と諦めがいいですね。首筋への一撃が効いたかな？まあ、そんなのどうでもいいか。それじゃあ、お望みどおりに」

瀬良はしゃがみこむと、右のスラックスの裾をたくし上げた。白い靴下に黒いものが巻きついている。小さなホルスターだ。そこから、グロック26の特徴的なグリップが覗いている。瀬良は銃を隠し持っていたのだ。この戦闘の間に、いつでもカズミを殺せたわけだ。だが、瀬良はそれを使わなかった。それは、勝てるという絶対的な自信があったからなのだろうか。口ではああ言っているが、瀬良にとってカズミは、ただの雑魚に過ぎなかった。ただそれだけの存在だったのだ。

瀬良は立ち上がるとグロック26の銃口をカズミに向けた。銃口の向こう側に見える瀬良の顔には満面の笑みが映し出されている。それは勝ち誇った笑みのだろう。カズミにはそう映った。もう体が動かない。カズミは死を覚悟してそっと目を瞑った。瞼の裏に映るのは、リエの屈託のない笑顔だった。その笑顔を見たとき、カズミの心に熱いものが込み上げてきた。それは生きろという心の声。まだ彼女を救っていない。彼女を救えるのは俺しかない。彼女を救うまでは死ねない！！

カズミはかつと目を開いた。そして、銃を持っている腕を思いっきり蹴り上げた。瀬良の身体が仰け反った。天井に大きく振り上げられた銃から銃声と共に銃弾が発射される。瀬良の表情から一瞬笑顔が消えた。彼のどこにこんな力が眠っていたのか。瀬良は驚きを隠せなかった。

仰け反った身体を元に戻そうとした瞬間、胸を蹴り飛ばされた。瀬良は身体をくの字に曲げて、テーブルに突っ込んで行った。埃や木のクズが舞い、瀬良の手から銃が音を立てて床に落ちた。カズミは足を引きずりながら瀬良に一步一步近づいていった。いや、瀬良にというよりも床の銃を拾うために近づいている。この銃でどこか

に隠れているであろう山県を殺すために。

だが、突然、瀬良が目を剥いてカズミを睨んだ。カズミは足がすくんで動けなくなった。始めて見る怒りに満ちた顔。だが、それはほんの一瞬だった。またすぐ笑顔に変わった。瀬良はゆっくりと起き上がると、カズミの前に立ちはだかった。

「カズミさん。まだ、決着がついていませんよ」

「互いに、この一撃が最後になるな」

二人はふらふらの状態で、ほぼ同時に拳を振り上げた。そして振り下ろそうとした瞬間、互いに聞き覚えのある声が耳に届いた。二人は動きを止めてその方向に視線を送った。濃い埃と硝煙の靄の中にその声の主があった。

「もう止めておけ。死ぬぞ。二人とも」

「待ってろ、山県。今、ぶっ殺してやる」カズミは肩越しに睨み、山県を視界に捉えながら言った。

「瀬良。終わりにしろ」

「あなたに言われたら仕方ありませんね」瀬良は構えを解いた。

「何の真似だ、山県？」

「あなたをここまで誘い込んだ理由が違うんですよ」

瀬良はそう言い残すとカズミの横をすり抜けて山県の隣で少し止まると互いに頷いて、瀬良はそのままこのフロアから出て行った。カズミはその後ろ姿を目で追いながら、山県の方に向き直った。山県はしきりに葉巻をふかしている。火を点けたばかりのようだ。

周りを見回すと、先程まで多くの若者で賑わっていたダンスホールやバー、その他の領域に人の気配が感じられない。この戦いに熱中している間に、客は全員逃げ出したのだろう。カズミの周りには血に染まった、服を着せられた冷たいマネキンのような骸が転がっているだけだった。

「俺をここまで誘い込んだ理由ってのは何だ？」

「やっぱり、お前は強いな」

「はぐらかすな。その前に、リ工を何処へやった？」

「その女の居場所なら、俺たちがその女の花屋に踏み込んだときに見つけたメモに書いてあった。俺たちが行ったときには、女はすでにいなかった」

山県は上着の内ポケットから一通の封書を取り出した。封書はしわくちゃだった。おそらく、カズミが山県の胸に踵を埋めたときに、しわくちゃになったのだろう。カズミは山県からそれを受け取ると、封を解いて中を見た。中に一枚のメモが入っていた。それを取り出し広げる。

日付は十月三〇日一昨日の日付だ。そして、その他にはホテルの名前が書いてある。名前は、京都の郊外に位置する京武ホテル。琵琶湖沿いの高級リゾートホテルだ。その下に、“ずっと待ってる”と記してある。彼女はこのホテルにいるようだ。そして、俺を待っている。だが、なぜ彼女はこのホテルに？まさか、彼女の身に本当に何かあったのか？カズミの心に不安が込み上げる。

だが、それと比例して疑問も湧き出てきた。彼女がホテルにチェックインしている理由だ。あたかも、この山県の行動を知っていたかのように、リエは突然ホテルに行っている。それに、知らせ方まで奇妙で疑問が残る。メールや電話で知らせるという手がある。なぜ、置手紙という手段を使ったのか？このやり方はこうなることをすべて見通していたかのようなのだ。

「これで、彼女の居場所がわかったら？」

山県の言葉にふと我に帰った。とりあえずそのホテルに行けば全てわかるだろう。これ以上考えても仕方のないことだ。とりあえず居場所がわかっただけでも一安心だ。それより、山県がこんな芝居をうった理由を知りたい。

「それで、俺をここまで誘き出した理由はなんだ？」

「とりあえず、座らないか？お前に蹴られた胸が痛むんでな。見たところ、お前もボロボロで、立っているのもやつとって感じだしな」  
山県は瓦礫や死体だらけのホールから、バーカウンターのあるホールへ移動した。カズミも後について行った。正直、立っているの

はきつかった。

山県はポーチに腰を下ろすと、置いてあつたフォアローゼズのボトルに口をつけた。ごくりと一口飲み干すと、ボトルをカズミに渡した。カズミも同じようにボトルに口をつけて一口飲み干す。アルコールが身体中の神経を麻痺させて、心地いい感じにしてくれる。オイルライターの石を擦る音がした。山県は、葉巻をふかしながら、おもむろに話の続きを始めた。

「実は、武田組の方針が、荒城組との全面和解に決まった」

「和解？」

「そうだ」

「当然、ただじゃないよな？」

「ああ。一年前、京都を俺たちが制圧したときに、京極会がアメリカドルの原版の片方を所持していた。当然、それを俺たちが戴いた。そのことを荒城は知っていた。そこで、俺たちの持っているドルの原版をよこせと言ってきた。その代わり、三億の金を払い、武田組と友好関係を結ぶと言ってきたんだ。今の俺たちでは、到底奴らにはかなわない。これは願ってもないチャンスなんだ」

「それを信じているのか？」

「この機を逃す手はない」

「虫が良すぎる話だぜ」

「そんなことはわかってる。だから、お前に来て欲しいのさ」

「随分と身勝手だな」

「身勝手は昔からさ」

山県は、肩をすくめてにやりと笑った。だが、どうも、その仕草が無理をしているように感じられた。カズミはその山県の仕草を見て、思わずため息を吐いた。最初に会ったときよりも、弱々しく感じられたからだ。

「しかし、そんな罫ですよって言ってるような話、あんたがよく信じる気になったな。向こうにしてみれば、武田組なんてすぐに潰せるだろう？ 武田より強い荒城が友達になつてくれなんておかしいと

思わなかったのか？」

「この話は、評議員からの通達なんだ。組長も従えと言っている」  
「評議員が絡んでいるってわけか」

「ああ。だから、従わないわけにはいかない」

「・・・・・・」

「だが、やはり、騙されているような気がするんだ。お前の言う通り、どうも怪しい」

「十分、警戒したほうがいいぞ」

「ああ。そのためにお前に来て欲しいんだ」

「・・・・・・」

「返事はなしか？」

「今回の話し、そんな簡単につけられる話じゃないだろう。これは、絶対に何かある。評議員自体も怪しいもんだぜ。あんたも、随分とお人好しになったもんだな」

「もう、面倒くさいし、疲れた。ただそれだけさ。所詮、駒は駒として生きて、そして死ぬのみさ」

山県はカウンターにうなだれた。確かに、山県は最前線で神経を張り詰めながら組のために命を賭して働き続けてきた。だが、組は一向に勢いを盛り返してこない。それどころか、評議員たちが組を解散させようと画策し始めているという噂も出ている。

だから、若頭の山県としては、なるべく早くこの対立を終わらせたかったのだろう。荒城との件で失敗して、一番叩かれるのは山県だ。それに、この前のカズミと正木を殺し損ねた件も重なっている。だから山県は、こんな危険で怪しい話に応じるほど疲れきっていたのだ。

カズミはうなだれている山県をチラツと見た。山県の表情に明らかに蓄積された疲れが見える。最初に会ったときは雲泥の差だ。最初に会ったときは希望と野心と自信に満ちた顔つきだった。だが、今の彼にはそれがない。今の彼にあるのは、絶望と疲労と脱力感と困惑が複雑に絡み合った、見るに耐えない表情だ。カズミにはその

表情が、死相が浮かんでいる表情のように見えてならなかった。

「まあ、気が向いたら顔出すわ。場所は？」

「大阪市街の、横山立体駐車場の地下だ。頼むぞ・・・」

カズミには行く気などなかった。だが、こんな山県の姿を見るに耐えなかった。とりあえず、元氣をつけようと思った。ただ、それだけだった。だが、その言葉だけで、山県の冷たく暗い心に一筋の光が差し込んだ。

いつのまにか、山県はそのまま安堵の表情を浮かべて眠りに入っていた。カズミは着ていた穴だらけのコートを彼にかけると出口へと足を運んだ。全身に走る痛みをこらえながらゆっくりと歩みを進めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4450a/>

---

レッドムーン

2010年10月17日03時12分発行